

らざる所に棲み、外物をして其の心を亂らざらしむ。常に一石竇に寓す。獵者數人有りて傍に合す。其の見て而して人に語らんことを恐れ、即ち出て伴ひ宿し、將に過て路に迷へる者の如く然り、明日又他所に徙る。志を礪して苦行するもの十餘載、得る所有るが如ければ、就て龍門藏公に質す。又十載を積み懶翁に謁し、一轉語を擧ぐ。翁之を可とす。又十載を積み造る所益深し。前後問答する所凡そ若干語、印可を蒙りて法正と爲る。翁示寂に及び、無學と與に衆僧の並び稱する所と爲る。空文を解せず。其の參究する所は皆心に在りて文字にあらず。問答法語若干有り、李權之を跋し、權近之が序を作る。(阿村集)

鼎 新羅景明王代の僧。時に興輪寺の南門及び左右廊廡發け、未だ修せず。靖和・弘繼の二僧、縁を募り將に修せんとす。帝釋天降り玉帛采稻積んで山の如く工匠自ら來り日ならずして之れを成す。工既に畢り天帝將に還らんとす。二僧白して曰く、請ふ聖容を圖寫し永く下方を鎮めんことを。帝曰く、我の願力は彼の普賢菩薩の遍く教化を垂るゝに如かず此の菩薩の像を畫き供養して廢せざるを宜しとすと。二僧教を奉じ普賢菩薩を壁間に敬畫し、永く其像を存せりと云ふ。(三國遺事)

師に就て業を受け、雲通寺の戒壇に具を受く。高麗成宗十五年彌勒寺五教大遷に赴きて捷く、後歸りて法泉寺に居る。穆宗二年大師を加へられ、顯宗の朝首座を加へらる。德宗命じて法泉寺に移住せしめ尋で僧統を加へて玄化寺に住せしむ。文宗踐祚の歳召されて内殿に金鼓教を講じ、紫羅僧伽梨一領、錦貼法衣一領を賜はり尊信せらるること智願の重生の如し。二年五月早す。百神に歸りて雨ふらず、賢召されて文德殿に雨を祈り、八卷金經を講ず、展轉未だ終らず密雲四塞し、霽然として雨下り、苗芽均しく露ひ、圃田滋生す。王茶香を賜ひて之を勞す。明年百官を率みて奉恩寺に幸し膜拜して王師と爲し、親しく振衣の禮を取る。八年老を以て山中に歸臥せんことを請ふ。王其の志に違ふを重り、奉恩寺に幸して親しく靈寶を加へて國師と爲し、宰臣朴成傑を郊亭に造りて之を饑せしめ、大府柳金陽・左街僧正道元をして送りて法長寺に至らしむ。賢巖穴に坐りてより繩床を宴坐し、一衲を被りて端居して以て萬縁を息む。幾くも無く臥坐して示滅す。報年八十三。僧臘七十四。王聞て之を悼み、證を贈りて慧昭國師と曰ひ、其の事蹟の傳はれしめんことを恐れ、石に勒して無疆に傳へしめんとし、左僕射參知政事兼太子少保金顯をして銘を撰ましむ。其の碑石今に遺存するも、文字剥滅して生卒の年を詳にし難し。法長寺事蹟に云ふ、慧昭國師中國に入りて

【十四畫】

宋の太祖の師傳と爲り、還りて本寺を創め、七惡人を化度す。故に山を七賢と稱し寺を七長と稱ふ。師壽八十三にして示寂す。宋帝勅して證を慧昭國師と賜ひ、太子少傅金顯をして行蹟の碑銘を撰ばしむ云々と。事蹟は乾隆二十年僧圓一の識す所なり。然るに碑文に依るに慧昭入宋の事無く、又證も文宗の贈る所、且つ賢の出生は宋の太祖の末年乃至太宗初期の間に在り、奚くんぞ之が師傳たらんや。又法長寺は賢修業の所、其の少時既に在り、賢の創創にあらざることも明なり。寺傳の升誤謬妄に笑ふべし。而して七長寺舊と法長に作る。七惡人化度の説亦信を置き難し。(金石錄釋教通史)

備 百濟の僧なり。孝德天皇大化元年、天皇、沙門彌陀法師及寺主僧吳等を十師と爲し衆僧を教導し釋教を傳行せしむ。白雉元年、白雉を獻ずる者あり、天皇之れを諸人に問ふ。善く答ふるものなし。僧吳法師曰く、此れ休祥なり、希物と爲すに足る。王者仁聖なれば則ち見ざる休祥なり天下に教すべし。是に於て天下に大教し白雉と改元す。(日本書紀)

備 高句麗の僧。推古天皇十年(皇紀一三三)僧雲聰と與に來歸す。(日本書紀)

慧 新羅の僧。伯嵩和尚と稱せらる。谷山藏(聖)の法嗣なり。俗姓は王

氏、公州の人なり。祖は淑長。父は亮吉。母は金氏。夢に流星儀に入る。其大さ瓮の如く、色甚だ黃潤、因て鎮めるあり。幼にして父母の許を得て出家し、本州南穴院如解禪師に投じ、又西穴院揚乎禪師に就き勤苦勵精す。孝恭王三年(皇紀一五五九年)を以て唐に入り法を求め、遍く禪苑に參じ遂に谷山に詣り道徳和尚(石)に謁し、一眞を洞究し、三昧を増修す。尋で四方に漫遊し、江南河北跋涉せざるなく、往きて五臺の聖跡を禮し、後唐同光二年七月を以て東還し、全州嘉安縣浦口に達す先師揚乎禪師已に世を謝せるを以て、遂に康州白巖寺住持を繼ぐ。道を訪ふ者雲蒸し、請益する者踵を接す(三國遺事伯嵩寺傳) 陽山縣和尙來り住。景哀王、使を遣し書を下し奉宗大師の號を賜ふ。高麗太祖召して法要を問ひ、相見るの晩きを歎す。歸るに及び僧史に命じて送らしめ、淨施を厚うし以て之れを寵す。光宗又之を召す乃ち歩して京に入り、醫國の藥言を進む。歸るに及び磨納袈裟一領を製し之を寄せ、新寫義熙本華嚴經八帙を以て之を送る。後屢召して政道を諮詢す。光德二年舍那禪院に移住せしめ、毎に師禮を執つて敬仰し、證空大師の尊號を加へらる四年秋、王京を辭し故山に還り、七年秋八月寂滅す。享齡七十九。歷夏六十。王之れを聞き震悼し、使を遣し證塔塔名を贈り、靜眞大師圓悟の塔と曰ふ。李夢遊教を奉じ碑文を撰ぶ。景德傳燈錄に云ふ、

新羅伯嵩和尚、師(谷山)に問ふて曰く、如何なるか是れ禪。師曰く、古塚家を爲さず。問ふ如何なるか是れ道。師曰く、徒に勞す車馬の跡。問ふ如何なるか是れ教。師曰く、具業收め盡さず。(三國遺事) 夢 異次頓の部を見よ。(三國遺事) 夢月湧淵 俗姓は李氏。昌平君徹十二世の孫なり。少より佛道に歸し、四山に周遊し三教に通達す。晚節禪院に回心し、桑下一宿、日中一食、杆城郡乾鳳寺の萬日會に投じ、念佛三昧に入り、怡然として化す、世壽八十。僧臘六十五。(東國傳) 一 高麗明宗の叔父なり。出家して興王寺に居り僧統となる。尤も詩に工なり。(破國集高麗史) 慈 高麗忠烈王時の僧。法諱を詳せず。禪源寺に住す。圓明國師冲鑑の師なり。(高麗傳) 慈 高麗曹溪山第十一世の祖師なり佛祖源流之を妙巖慈圓と爲す。事蹟詳ならず。(佛祖源流) 慈 高麗曹溪十六祖師の一なり。事蹟詳ならず。松廣寺副院碑海東佛祖源流俱に之を曹溪第六代と爲すも、第六世は松廣寺に現に高麗曹溪山第六世圓鑑國師碑有りて第六世の圓鑑なること明なれば第七世と見るを妥當とすべし。(松廣寺文書) 慈 俗姓は李氏。香州の人。後ち寧邊の沙川に移る。父は洞男。母は趙氏。

永曆戊戌(皇紀一六二八年)生る。十歳碧雲長老に從ひて禪業し、雪巖秋鷗に參じ、其の法を嗣ぎ、盡く三乗の妙旨を究め、法化行ばるゝもの四十年、乾隆二年(皇紀一三九七年)寂す。(佛教通史) 慈 新羅善德女王代の高僧。姓は金氏。俗名は善宗。新羅の眞骨、蘇判茂林(一作武)の子。其の父香て子無きを憂ひ、乃ち心を三寶に歸し加護を求め、千部觀音を造り一子を生まんとを希ふ。母忽ち星墜ちて懷に入ると夢み、因て鎮めるあり。誕るに及び釋尊と日を同らす。乃ち善宗と名く。神志澄睿、世趣に染む無し。早く二親を失ひ、轉た世華を厭ひ、遂に妻子を捨て田園を捐して元寧寺と爲し、幽寂に獨處し、枯骨觀を修し、倦怠あるなし。適ま豪輔に聞けるあり顔に徵すも赴かず。王乃ち勅して曰く、就かざんば之れを斬らんと。藏之れを聞き曰く、吾れ寧ろ一日戒を持して死すと。百年戒を破つて生きるを願はずと。事聞す。王乃ち放つて出家せしむ。善德王五年(皇紀一四六九年)命を受け、門人僧實等十餘輩を將て(三入あり、僧實、圓日、敬成とす)唐に入り清涼山に謁す。師、門人僧實等十餘輩と與に、唐に入り終南山雲母寺香閣に謁す。師之れに謁つて曰く、汝が國經變難し日に于支に役し、誓願成就、以て歸を爲すなし、汝今此に住して塔を立て寺を立て、以て東方山水の逆を鎮むべしとす。十二年(皇紀一四八十年)善德王上表し還さんことを乞ふ。詔して之れを許す。藏、本國經像未だ充たざるを以て、藏經一部を

漸さんことを乞ひ、及び諸幡花蓋の福  
利を爲すに堪ふるもの皆之れを載せて至  
る。國を傾け來り迎へ、一代の佛法はに於  
て興顯す。命じて芬皇寺に住せしめ、一  
夏訪ふて宮中に至り大乘論を講ぜしめ、  
又皇龍寺に於て、菩薩戒本を演ず。勅し  
て藏を大國統と爲し、凡そ僧尼一切の規  
儀は、總て僧統に委ね之れを主らしむ。  
藏、乃ち通度寺を創し戒壇を築き、以て  
四衆を度す。又別に寺塔を造ること十有  
餘所、一興建毎に合國俱に崇む。眞徳女  
主三年、藏の言に従ひ、新羅始めて華制  
に依り冠服を爲る。明年庚戌又唐の正朔  
を奉じ始めて永徽の年號を行ひ、自後朝  
觀ある毎に列して位上藩に在り。此れ皆  
藏の功に依るなり。暮年に京を辭し江陵  
郡に水多寺を創し之に依る。藏、諸經戒  
疏十餘卷を撰び、出觀行法一卷を著る。  
又釋圓勝なる者あり、藏に先づ西に學  
び、而して同じく桑梓に還り、藏を助け  
て律部を弘むと云ふ。藏後太白山に石  
南院(今釋)を創し竟に此に寂す。茶毗し  
て骨を石穴中に安ず。蓋し佛法東漸し日  
已に久きも、未だ戒律闕如して整はず。  
藏に至り開律部を講じ戒檢を嚴にし、圓  
勝亦た藏と與に力を盡し綱管を厲行し、  
以て正教を弘峻にし、是に至りて三學備  
れり。(續高僧傳、三國遺事)

漸開 新羅景徳王代の僧。金大城傳中に詳  
なり。  
碧松智嚴 姓老と號す。居る所の堂を碧松  
と曰ふ。俗姓は宋氏。扶安の人。天順八  
年(皇紀二二四四年)生る。骨相奇秀、雄武人  
に過ぎ、幼にして書讀を好む。弘治四年  
野人北邊に冠す。成宗許琮に命じて之を  
討たしむ。嚴軍に従ひて戰功有り。既に  
して征より還り、嘆じて曰く、大丈夫斯  
の世に生る、心地を守らず役々として  
馳勞し、縱ひ汗馬の功を得るも、徒らに  
虛名のみと。即ち鶴龍山臥草庵に入り、祖  
溪大師に參じ落髮す。時に年二十八、志  
を厲まして禪を修し、又衍熙教師を訪ひ  
て楞嚴の深義を問ひ、次で正心禪師に參  
じ、傳燈の密旨を探り、悟益する所多し  
後智異山に入り、風鑿益々明に、律儀清  
淨、一時攝林の宗と爲る。佛法を開揚し  
て世に誦はず、故に參禪者多く留慢を以  
て之を譏る。初學を導くに先づ禪集  
別行錄を以て、如實知見を立て、次に禪  
要語錄を以て知解の病を掃除し、活路を  
指示す。時有りて門人靈觀・圓悟・一禪  
等六七十の徒と與に諸大乘經論を講ず。  
嘉靖十三年甲午冬、諸門人に命じて壽國  
菴に會せしめ、法華經を講じ、方便品に  
至り、忽然歎じて曰く、衆生自ら光明を  
蔽ひ、輪轉を甘受する久し。他の世尊の  
一光東照を勞し、苦口開示に至る。皆衆  
生の爲に方便を設くるのみ、實法にあら  
ざるなり。蓋し諸法寂滅相、言を以て宣

すべからず。今汝等諸人佛の無言を信じ  
直下に自家心地に悟入すべし。今日老僧  
亦諸人の爲に寂滅相を示さん、諸人外に  
向つて求むるなかれと。侍者を喚んで茶  
を點し來らしめ、啜茶訖り、門を閉ぢて  
坐し、良久しく默然たり。窓を開て之  
を視れば已に入寂す。年七十一、臘四十  
四。(佛敎通史)

碧溪正心 一に淨心に作る。碧溪と號す。  
金山の崔氏。遠く龜谷覺雲を嗣ぐ。又明  
に入り、臨濟下地統和尚の法印を傳へて  
來る。高麗恭讓王の時辭し退き、李朝太  
宗沙汰の時歸俗し、髮を長し妻孥を蓄へ、  
黃岳山(黃岳)古紫洞物罕里に入りて晦迹  
す。後禪を碧松智嚴に傳へ、教を淨蓮法  
俊に傳ふ。(佛祖源流、佛敎通史)

碧霞大愚 俗姓は朴氏。靈巖の人。喚醒大  
師に就て落髮し。孤鶴禪師に懺悔す。人  
と爲り氣岸高峻、人攀援するを得ず。事  
に遇へば直前し廻轉する所無し。經教の  
外、旁ら子史に通じ、晩に禪頌を喜び、  
手卷を釋てず。嘗て言ふ、龜谷間に誤處  
有り。自ら爲に筆記し、老に至りて輒  
めず。眉間に白毫有り、見る者之を異と  
す。面貌峻々、瞻望するに悚然たり。諸  
參問者覺へず忘念を消落す。乾隆癸未  
(皇紀二四三三年)歸寂す。壽八十八。偈に曰  
く、生來寄他界、去也歸吾鄉、去來白雲  
路、且得事平生と。放筆して泊然として  
逝く。(佛敎通史)

碧巖覺性 湖西奉恩の人。俗姓は金海の金

氏。萬曆乙亥(皇紀二二五五年)生る。風骨  
凝、眼珠電耀、幼にして嬉戲せず。九歳  
にして枯を失ひ、十歳華山に之き、雪獸  
に依りて之を師とし、十四落髮して、具  
を寶晶老師に受く。浮休禪師華山に到り  
大に之を異とし、勉むるに眞筌を以てす  
乃ち休師に従ひて、俗離山に入り、徳裕  
伽師金剛等の諸山を轉歴し、相隨ひて暫  
くも離れず。壬辰の亂寇を山中に避けれ  
が、尙ほ經を手にして問難怠らず。癸巳  
松雲惟政、休を朝に薦め、楸して陣上に  
致す。性亦從ひて到り、海上に職ひて功  
有り。庚子七佛羅若に結夏し、衆を休の門  
に受くるもの二十餘年、悉く其の體を得  
戒行極めて高し。笈を負ふもの雲集す。  
又諸寺の廢頽せるものを興し、雙溪・華  
嚴・松廣等皆其の重新せる所なり。光海  
君の時獄事興り、浮休狀僧の誣する所と  
爲る。性師と偕に京に入る。光海君兩師  
を見て之を奇とし、休を釋して山に還し  
性を奉恩寺に留めて、判禪教都總攝と爲  
す。卿士大夫多く之と交る。東陽尉申湖  
聖と最も相善し。未だ幾ならずして南に  
歸る。仁祖南漢に城くや、徵されて八道  
都總攝となり、編徒を領し監禁するもの  
三年にして功を訖る。報恩開教圖照國一  
都大師師の號を賜る。丙子の亂智異山に  
在りて軍駕南漢に幸するを聞き、南僧數  
千を募り、降魔軍と號し、相率ひて北し  
道に和成ると聞きて山に還る。後ち命ぜ  
られて日本に使し、行いて中途に到り老

病を詣して還る。孝宗即位に及び、總  
攝の印を授け、赤裳史閣を衛らしむ。後  
ち名山に雲遊し、扶安の邊山に上りて南  
海を俯瞰し、還りて方丈の華嚴寺に居る  
己亥十二月微疾を示し、越えて明年庚子  
一月來を極めて告訣し、一偈を題して曰  
く、拈頌三十篇、契經八萬偈、何須打葛  
藤、可笑多事在。即ち筆を擲ちて坐化  
す。年八十六。臘七十二。性人と爲り容  
貌端正、氣像清高、目光人を射る。見る  
者恩智貴賤と無く之を敬せざるなし。製  
する所に圖中決疑參商禪旨等の語錄有り  
申湖聖之を序し、世に行はる。其の傳鉢  
の弟子を處能と爲す。(金石遺書)

福高 高句麗の僧。孝徳天皇大化元年(皇紀  
一三〇五年)高句麗の大法師福亮、惠雲・常  
安・靈雲・惠至・寺主僧曇・道登・惠隣・  
惠妙を以て十師と爲し、別に惠妙法師を  
以て百濟寺寺主となし、共に衆僧を教導  
し、釋教を奮行せしむ。(日本書紀)

碧巖守初 字は太昏。俗姓は成。名匡成三  
問の旁裔なり。萬曆庚寅(皇紀二二五〇年)京  
城に生る。髫年錫月教軒に依りて落髮し  
頭流に入りて浮休に調す。浮休一日上足  
碧巖に謂て曰く、異日吾道を大にする者  
は必ず此の沙彌なり。汝須らく之を護る  
べし云々と。仁祖己巳玉川靈鷲寺に開堂  
す。學徒日に益す。嶺外禪學の感は守初  
に溢觸すと云ふ。顯宗戊申六月示寂す。  
年七十九。臘六十餘。守初外典に旁通し  
當時の碩儒潘谷金壇、澤堂李植・東岳李  
安訥等諸人と交遊し、其の推獎する所と  
なる。(佛祖源流)

碧岩正浩 俗姓宋氏。海南の人。早く頭輪  
山に入り剃染遊學し、初ば乃ち松食草衣  
し、後則ち法財具足す。嘉慶四年義庵轉  
印禪師の室に拈香し、講を玩虎宗師の會  
下に受け、上院菴に開講し、學徒三十餘  
人あり。總攝の職を行ひ、乙酉明寂菴を  
重葺し、蓮潭祖師の影閣を附す。道光甲  
午(皇紀二四四七年)寂す。(東嶽別傳)

碧巖 俗姓は李氏。高麗の中書令子淵の子  
なり。靖宗四年(皇紀一九九八年)生る。年甫  
めて十一、海安寺の海麟に投じて落髮し

明年具を福興寺の官壇に受く。文宗十五年王輪寺の大遷場に赴きて一捷し、大徳を授かり、二十三年重大師を加へらる。三十三年全州の金山寺に住し、首座を加へられ、宣宗嗣位の年僧統を授けられ、移りて玄化寺に住す。昭顯曾て金山寺に廣教院を創し、慈恩撰ぶ所の法華支贊・唯識述記等の章疏三十二部三百五十三卷を搜訪開板して院中に蔵し以て流通せしむ。師また傳法の外經史を博覽し、詩書を善くす。肅宗元年示寂す。享年五十九。僧臘四十八。王開て震悼し、封じて王師と爲し、證して慧徳と曰ひ、塔を眞應と號す。睿宗六年門人學生僧統等の請により碑を金山寺に立て、以て其の事蹟を後來に傳へしむ。此の碑今尙ほ遺存す。

【十五畫】

墨胡子 新羅の高僧。或は云ふ西竺の人と新羅訥祇王の時沙門墨胡子高句麗より一善郡(今山陰)に至る。郡人毛禮(毛禮傳)窟室を作り之を居く。時に業より使を遣し王に衣著香物を賜ふ(高僧相傳に云ふ)。墨君其の香名と用ふる所とを知らず。人をして香を齎し過く問ふ。墨胡子之を見て曰く、此れ之れを香と謂ふ、之れを焚けば則ち香氣芬散す、誠を神聖に達する所以なり。所謂る神聖は三寶に過るものならず。一に曰く佛施、二に曰く達摩

三に曰く僧伽、若し此を燒き發願せば則ち必ず靈應ありと。時に王女の病革まじむ。王、墨胡子を召し、香を焚き表誓せしむ。王女の病瘳で愈ゆ。王喜び饌贈尤も厚し。胡子出て毛禮を見、得る所の物を以て之に贈り、因て語つて曰く、吾れ今歸する所を知らず。昭知王の時に阿道和尚(阿道)あり、侍者三人と亦毛禮の家に来る。儀表墨胡子に似たり。住ること數年、疾なくして死す。其の侍者三人留り住し、經律を誦讀す。往々に信來する者あり(毛禮傳に云ふ)。三國遺事には墨胡子は眞の名に非ず。阿道(阿道)と同人なりとし曰く、所謂る墨胡子は眞の名に非ざるなり。乃ち目を指すの辭にして、梁人の達摩を指して碧眼胡と爲し、晋の釋道安を嘲つて渠道人と爲すの類なり。乃ち阿道の危行避諱して名姓を言はざるの故なり。蓋し國人其の聞く所に隨ひ、墨胡・阿道の二名を以てし、分つて二人と爲し傳を爲すのみ、況や阿道の儀表墨胡に似ると云ふをや。則ち此を以て其一人なるを驗すべきなりと。尙ほ阿道傳を參照すべし。

廣學 新羅文武王代に廣徳・嚴莊の二僧あり相友とし善し。日夕約して曰く、先だつて安養に歸する者須く之を告ぐべしと。徳は芬泉寺の西里に隱居し、蒲鞋を業と爲し妻子を伴うて居る。莊は南岳に菴栖

し、獨身農耕し、松陰に靜に暮す。一日窓外に聲あり報じて云ふ、某已に西に往く。惟だ君好く住し速に我に従つて來れと。莊、明日其の居を訪へば徳果して亡せり。是に於て其婦と與に骸を收め同く蒿里を營み、既に畢り乃ち婦に謂つて曰く、夫子逝けり僧に處ること何如。婦曰く可と。遂に留て夜を宿し、將に通ぜんを求むるは魚を求むるに木に緣るが如しと。莊驚き怪み問うて曰く、徳も既に乃ち爾り、予も亦何ぞ妨げん。婦曰く、夫子我れと同居すること十餘載、未だ嘗て一たびも同床して枕せず、況や觸汚をや。但だ毎夜端身正坐し、一聲に阿彌陀佛號を念じ、或は十六觀を作し、觀既に熟すれば明月戸に入る。時に其光に昇り上に加趺す。誠を竭すこと此の若し。夫れ千里に過く者ば一步規すべし。今師の觀は東すと謂ふべし。西は未だ知る可らざる也と。莊、愧服して退き、便ち元曉法師を以て之れを教ふ。莊、是に於て己を潔うし悔責し、一意修觀し亦西昇するを得たり。其婦ば乃ち芬泉寺の婢にして、蓋し十九應身の一徳なりと云ふ。

又曾て海賊の來り擾すに當り、太祖の命を受け法を作して禪鎮し、廣學は大徳(位)大緣は三重(位)を授けらる。後ち太祖爲めに現聖寺を創し一宗の根底と爲す。

影山敬淳 幼にして出家し、染衣にして具を受け、通度觀音松廣海印の諸寺に歴住す。光緒癸未(皇紀二五四三年)端坐して示寂す。

影披聖堂 字は晦隱。俗姓は金氏。高麗の玉山君永齡十六世の孫なり。父を萬紀と曰ふ。英祖戊申(皇紀三三八年)生る。年十五書を清涼庵に讀み、供佛の時、諸僧の回旋膜拜するを見、忽ち捨身の願を發し越えて四年家を辭し、湧泉寺に至り出家せんことを請ふ。喚應長老愛して之を許し、遂に落染せしめ、遂に戒律を授く。是より四遠に參尋し、雲遊して道を訪ひ海峯燕巖・龍坡影虛等の諸名師に歷參し服膺甚だ勤む。一日夢に一室に入る、佛書の架に滿つるを見る。粧潢鮮淨、盡く是れ華嚴經なり。傍に老僧有り指して曰く、道は是に在りと。越えて九年黃山退隱長老一見して心契し、華嚴全部を以て之に授く。粧卷を摩挲するに果して前夢に符す。之を讀んで既に然し、仍て重玄の理を探り、最妙の旨を究む。三十年一日の如し。嘗て謂へらく禪工は持誦を最と爲すと。普賢觀音兩菩薩を以て願佛と爲し、致齋尤も勤む。又戊戌より辛丑に至り、大悲呪十萬遍を誦し、日に以て

課と爲す。甲戌より以來雪坡・節月二和尙に參じ、盡く華嚴の宗旨及禪教の要領を得、仍て信衣を受けて登壇說法し、嘉慶壬申示寂す。年八十五。僧臘六十六。

德昌 高麗肅宗睿宗朝の僧なり。玄化寺に居る。睿宗即位の初、王師に拜せらる。元年早し、召されて會慶殿に般若道場を設け雨を祈る。

德素 字は慧約。小名は子美。俗姓は田氏。大禪師數門下に投じ、九歲剃髮す。雄當に言ふ、吾宗を興す者は必ず此の沙彌ならんと。高麗毅宗八年禪師を授けられ尋で大禪師と爲り、明宗元年(皇紀一八三一年)王師に封崇せらる。寂して圓覺國師と號せらる。當時樹つる所の碑、忠清北道永同郡陽山面寧國寺に遺存す。文字多く泐滅せり。

德緣 高麗の僧なり。睿宗十二年(皇紀一七七年)王師に拜し、仁宗の初、國師となる。

慧明 高麗光宗時の僧なり。王の十九年(皇紀一六二八年)恩津の盤藥山に大石有り地中より變出す。探險の女之を見、歸りて婿に言ふ。婿官に告げ、官之を上聞す。朝議曰く、此れ必ず梵相を作るの兆なりと。命じて八路に遣使し、能く梵相を作るものを求む。時に慧明夢に應ず。朝廷即ち工匠百餘人を擇び、工を庚午に始め丙午に至りて訖る。凡そ三十七年なり。尊像既に具はり、之を道場に安んぜん

欲し、千餘人并力して運ぶ。明既に佛像を刻成せしと雖も、其の未だ立たざるを以て慮となす。適ま沙梯村に至り一雙の童子泥土を以て三段佛像を作るを見る。即ち地を平かにして先づ其の本を立て、沙土を積んで而して次に其の中を立て、又是の如くして其末を立て。明熱視して大に悟り、欣然還り來り、一に其の法に従ひて、遂に其の像を立つ。蓋し童子は即ち文殊普賢の現化して指教せしものなりと云ふ。佛像長五十五尺五寸、闊三十尺、耳の長さ九尺、眉間六尺、口角三尺五寸、火光五尺、冠の高さ八尺、大蓋方廣十一尺、小蓋六尺五寸、小金佛三尺五寸、蓮花枝十一尺、或は黄金を塗り、或は紫金を飾る。是に於てか四方風聞し、萬姓雲集し、敬禮する者市の如し。此像國家太平なれば滿身光潤にして、因亂有れば則ち遍體汗を流し、手花色を失すと云ふ。即ち今の論山郡論山面灌燭寺の大佛是なり。

慧昭 俗姓は崔氏。全州金馬郡の人なり。少にして遊戯するに必ず葉を焚て香と爲し、花を采て供と爲し、或は西向して跪坐を移す。既に童卵にして力を養親に致し、親歿して求法の志切に、貞元廿年(皇紀一四六四年)歲貢使に詣りて舟手たらんことを求め、海に泛んで彼岸に達し、國使に告げて曰く、人各志有り、請ふ此より辭せんと。遂に行て滄洲に至り、神變大師に謁して落染し、慧解月に進み、徒

中推重し、昭が形貌酷然たるを以て、衆名せず、目して黒頭庵となす。元和五年具を嵩山少林寺の戒壇に受く。時に本國の僧道義なる者あり。先に既に入唐求法し、偶ま昭と邂逅して相契合し、奥に四遠に參尋せしが、義先づ國に歸るに及び昭即ち終南に入り、止觀を修するもの三年、後山を下り、四遠の道に出で、芒屨を緘り、行路に施すもの又三年、苦行已に就り、大和四年遂に國に歸る。興德王詔を下して迎勞して曰く、道義禪師嚮に已に歸り、上人繼で至り、二菩薩となる云々。舉國欣賴す。寡人行くゆく富に東鶉林の境を以て、吉祥の宅と成さんと。昭始めて尙州靈房の長柏寺に駐錫し、次で出て晋州智異山に至り、花開谷の故三法和尙蘭若の舊基に就て堂宇を葺修して居る。開成三年慈哀王新に位に即き、深く其の徳を慕ひ、璽書を降し齋費を饒し、特に見んことを求む。昭の曰く、勤修善政、何用願爲と。使復命し、王之を聞て愧慚し、使を降し璽を賜ひて慧照と爲す。昭字は曾祖。昭聖王の諱を避けて之を易ふるなり。仍て籍を大泉龍寺に貫し、徴して京邑に詣らしむ。使者往復するもの路に相望む。而して昭其の志を移さず山に在りて道を行ふ。居ること數年、益を請ふ者稍麻列を成し、居る所隘を告ぐ即ち勝境を歴探し、南嶺の麓に夷壇を得て禪庵を經始し、竹を架して流を引き、階を環らして四注し、因て寺を玉泉と稱す。昭字は曾祖。昭聖王の諱を避けて之を易ふるなり。仍て籍を大泉龍寺に貫し、徴して京邑に詣らしむ。使者往復するもの路に相望む。而して昭其の志を移さず山に在りて道を行ふ。居ること數年、益を請ふ者稍麻列を成し、居る所隘を告ぐ即ち勝境を歴探し、南嶺の麓に夷壇を得て禪庵を經始し、竹を架して流を引き、階を環らして四注し、因て寺を玉泉と稱す。

す。昭は乃ち曹溪の玄孫なり。是を以て六祖の影堂を建て、粉堵を彩飾し、以て導誘に資す。大中四年(皇紀一五二〇年)正月九日詰且門人に告げて曰く、萬法皆空、吾將行矣、一心爲本、汝等勉之云々と言ひ。竟に坐滅す。報年七十七。積夏四十一文聖王聞て之を憫み、將に諡を贈らんとせしが、遺教を聞て之を曉む。越えて三十年、門人等陵谷を以て慮と爲し、石に勒して不朽を圖らんを請ふ。獻康王即ち諡を眞鑒禪師と賜ひ、塔を大空靈塔と曰ひ仍て許して築刻し、以て高閣を壽うせんとせしが、會ま獻康王薨じ、定康王嗣で立ち、先志を繼ぎ隣山の招投に玉泉の號あるを以て、新に寺名を雙溪と賜ひ、文臣崔致遠に命じて銘を撰ましめ、明年丁未遂に立石せり。其の碑今に慶尙南道河東郡花開面雙溪寺に在り。(金石錄) 慧照 高麗の僧。國師を授けらる。睿宗の時詔を奉じて西に學び、遼本大藏經三部を購ひ來る。一本は定惠寺にあり。一本は海印寺にあり。一本は參政宅にありと云ふ。(三國遺事) 慧賢 字は元乙。自ら無衣子と號す。俗姓は崔氏。羅州和順縣の人。進士琬の子なり。父早く卒して母に従ふ。出家せんことを乞ふ。母許さず備を業とせしむ。高麗神宗四年(馬試)に中り、是年太學に入る。母の病を開きて郷に還り、疾に族兄嬰光漢の家に侍す。念じて觀佛三昧に入り母の病愈ゆ。翌年母歿す。即ち曹溪に詣

り普照國師に謁して剃度す。始め諡の國師に謁するや、國師見て以て僧と爲し、更に之を見れば僧に非ず。是より先き國師、雪竇禪師院に入ると夢み、翌日夢來り參ず。是によりて之を奇とす。護符を齋山に居り一盤石に坐して晝夜定を習ふ。五更に至る毎に偈を唱ふる甚だ厲し其の聲十餘里に聞え、略ぼ時を失せず。聞く者此を以て且を知る。又智異山の金臺庵に居り臺上に宴坐す。雪竇んで頂を沒するも猶ほ兀坐して動かざること枯木の如し。衆其の死せるを疑ひ、之を撫すに應えず。其の刻苦工夫すること此の如く、遂に真旨に洞徹す。熙宗四年國師法席を嗣がしめんと欲す。諡固く辭し、遂に智異山に去り絶跡滅影するもの數歲大安二年國師入寂するに及び、王命じて其の後を繼がしむ。諡止むを得ず院に入り堂を開く。是に於て四方の道俗高人逸老雲奔して講に赴く。王禪社の狹隘なるを開き、有司に命じて掃掃せしめ、又使を遣り滿羅製茶磨納茶香等賜ひ、因りて法要を求む。諡心要を撰して以て進む。世に行はる。晉陽崔公渴仰已まず、屢之を京師に邀へんとせしが竟に至らず。遂に二子を遣りて從ひ學ばしめ、餉遺絶えず。高宗位に即き、制して禪師を授け、又大禪師を加ふ。遷席を經ずして直に編秩に登るは蓋し諡より始まる。貞祐已卯(六年)詔によりて斷俗寺に住す。然れども修禪社を以て常住の所と爲す。高宗二

十年疾有り、王御醫を遣りて診視せしむ翌年(皇紀一八九四年)春月燈寺に徙り六月示滅す。王聞て震悼し、諡を眞覺國師と贈り浮圖を立て額を賜ひて圓紹の塔と曰ふ。壽五十七。臘三十有二。諡性冲和碩實、儒より釋に之き、内外の經書淹貫せざる無く、嘗て京都を踐まずして坐して一國の仰ぐ所と爲る。眞に禪門の正法眼と謂ふべし。王門人等の請によりて碑を立て、文臣李奎報をして銘を撰ばしむ。碑石尙ほ順天の松廣寺に存す。(李相國集、金石錄)

慧覺 高麗曹溪山第十二世の祖師なり。輿地勝覽に高麗安震撰む所の慧覺の碑は慶尙道善山末勒寺に在りと云ふも、未だ其の存否を詳にせず。

慧滿 高句麗の僧。隋に入り嘉祥寺吉藏大師に三論宗の旨を受く。推古天皇三十二年(皇紀一八四四年)本國より實來す。勅して元興寺に住せしむ。其の夏天下大に旱す。灌に詔して雨を祈らしむ。灌青衣を着け三論を講ず。大雨便ち下り、上下大に悦ぶ。灌んで、僧正と爲す。後ち河内志紀郡に井上寺を創し三論宗を弘む。年九十にして滅度す。本朝三論宗の始祖と爲す。(日本書紀、本朝高僧傳)

慧顯 一に惠現に作る。百濟の高僧。最も三論宗(性宗又は法相宗と名く)に通ず。少より出家し苦心専志し、法華を誦するを以て業と爲し、祈禱し福を請ひ靈應誠に稱し。兼て三論を攻め、精詣神に通ず。

初め、北部の修德寺に住し、衆あれば則ち講じ、無ければ則ち持誦す。四遠欽風し、戸外に履滿つ。現稱々煩雜を厭ひ、静を求め、遂に江南の達摩山に往き居る。山林めて富險にして來往稀なり。現、静坐求志し遂に山中に終ゆ。同學屍を擧し石窟中に置く。虎遺骸を啖ひ盡し、唯骸骨を存す石の如し。道俗之れを敬し石塔に藏す。俗齡五十有八。即ち唐貞觀の初年(日本書紀、天智元年)現曾て西學せず靜退以て終るも、而も乃ち名を諸夏に流し唐高僧傳中に其の傳を立せられ、其名遠く聞ゆ。(續高僧傳、三國遺事)

慧甫 字は光宗。俗姓は金氏。鳩林の人なり。父は開榮益良。母は朴氏。新羅景文王八年(皇紀一五二八年)四月生る。幼より學に上り、稍長じて父母に請うて出家し、夫仁山寺に至りて落髮す。尋で白鶴山に詣り道業和尙に謁して弟子と爲り、年十八具を月遊山華嚴寺に募く。還りて白鶴山に至り師に辭して四方に歴遊し、聖住に無染大師に謁し、嶺山に梵日大師に參ず。新羅眞聖女主六年海客に請うて同載を許され、遂に唐に乘り、道を訪ひ師を尋ね撫州の疎山に詣り匡仁和尙に謁し、堂を傳ふ。是より僧の高きものは必ず詣り境の名有るものは必ず搜り、去つて江西の老善和尙に謁す。天祐十八年夏歸舟に値ひて東還し、全州の臨波郡に達す。時

に眞覺全州に據り、國を後百濟と號す。師を遺へて歸依深く、弟子の禮を伸べ、後請うて州の南、南福禪院に居らしむ。後ち移りて白鶴山玉龍寺に居る。(皇紀一五九六年)高麗太祖三韓を統一し、天下を奄有するや、師の西土に雲遊し、道行甚だ高きを聞き、詔して京畿に徴し、傾心瞻仰し、惠宗・定宗亦相繼で師事す。定宗二年門人を召して遺戒を傳へ、臥坐して玉龍の上院に示寂す。享年八十。僧臘六十二年。王聞て震悼し、諡を贈りて洞眞大師と曰ひ、塔を寶雲と號す。後ち門人等の請に依り碑を樹て翰林學士金延彦に詔して銘を撰ばしむ。此の碑尙ほ全南光陽郡玉龍寺地に遺存す。(金石錄)

慶獻 俗姓は張氏。其の先は南陽の冠族なり。遠祖は漢の宗技の海を渡りて來り住せしものなりと云ふ。母は孟氏。新羅景文王十一年(皇紀一五三二年)を以て、獻を生む。幼にして穎悟、早く離塵の志有り。年十五調宗長老に就て落髮し、光啓四年具を近度寺靈宗律師を受く。後ち使徒に附して唐に入り雲居道膺和尙に就て法要を傳へ、天祐五年(皇紀一〇二〇年)還りて武州の會津に達す。時に兵戈滿地、賊寇天を消す欲仍て巖穴に藏れ以て煙塵を避く。高麗太祖嘗て南征して羅州に至り、其の高風を聞き、柳營に遷へて之を見、歸依甚だ篤し。太祖位に即くに及び來り謁す。王待するに王師の禮を以てす。貞明七年(四年)日月寺の法堂に示寂す。俗年五十一

僧臘三十有三。誥を法鏡と贈り、塔を普照慧光と名く。此碑猶ほ遺存して開城郡嶺南面通巖山五龍寺址に在り。文は崔彦揚の撰めるもの如く、惠宗元年(皇紀一六〇四年)の建立に係れり。(海東金石錄、金石總覽)

**儀興** 新羅神文王代の高僧。熊川の人。姓は水氏(一作水)。年十八にして出家し、三歳を究め、名望一時に重んぜらる。開羅元年(皇紀一三三四年)文武王の將に昇忍せんとするや、神文に願命して曰く、儀興法師は國師と爲すべし、朕が命を忘れざれと神文王の位に即くや、曲げて國老と爲り三郎寺に住し、専ら著述を事とし其の説法相を主とす。忽ち癸亥其月に薨る。一尼あり來り謁し之れを候し、華嚴經中の善友原病の説を以て言を爲して曰く、今師の疾は憂勞の致す所なり、喜笑せば治すべしと。乃ち十一様の面貌を作り各の俳諧の舞を作す。噴成削、變應言ふべからず。皆頤を脱すべし。師の病覺えず酒然たり。尼遂に門を出で、乃ち南巷寺(三郎寺に在り)に入りて隱る。將つ所の父子は翰書(三郎寺に在り)一面圓通像の前に在り、輿、常に馬に騎りて王宮に出入す。一日將に王宮に入らんとし、從者先つて東門の外に備はり、鞍騎甚だ都に、靴笠斯れ陳び、行路之れが爲めに辟易す。一居士あり形儀疎率、杖を手にし篋を背にし來り、下馬臺上に懸ふ。篋中を視るに乾魚なり。從者之れを呵して曰く、汝箱を著け奚んぶ濁物を負

ふやと。僧曰く、其の生肉を兩股間に挟むと、背に市上の枯魚を負ふと、何の嫌ふ所あらんやと。言ひ訖つて起ち去る。興、方に門を出で其の言を聞き、人をして之れを追はしむ。僧、南山文殊寺の門外に至り、篋を抱つて隱る。沈は文殊像前に在り、枯魚は乃ち松皮なり。使來り告ぐ。興之れを聞き嘆じて曰く、大聖來りて我が害に騎るを戒むと。終身復騎らず興の行狀は備に釋玄本撰ぶ所の三郎寺碑に載す。著す所、涅槃經十四卷、法華疏十六卷、金光明經疏七卷、彌勒經疏贊三卷、藥王經疏一卷、四分律羯磨記一卷、起信論問答一卷、唯識論疏二十五卷、瑜珈論疏十卷、瑜珈記三十六卷其他頗る多し。(三國遺事、新羅國史、新羅國僧傳)

**樂眞** 俗姓は申氏。字は子正。其先は利川郡の右族なり。生れて數月、異僧有り、門前に來りて之を見て曰く、此の子淑賢有り、出家すれば必ず法器とならんと。遂に空門に歸依し、雲通寺の景德國師に就て學ぶ。高麗文宗十年丙申の歲其戒を受け、十九歳還場に赴きて大德を受く。是より景德の門を離れず。景德遷化し大覺國師繼て法師と爲るに及び、其の諷下に屬す。大覺國師還れて宋に遊ぶに及び追うて之に従ひて京師に朝し、又杭州惠因院の普水法師に見え、啓發する所多し宣宗三年仲夏宋より還る。肅宗即位の初制して首座と爲し、法衣を賜ひ、後僧統を加ふ。凡そ國に水旱あれば必ず眞に請

うて遊福す。大覺國師興王寺に教誡司を置き、續藏を雕造するや、勸考校正眞興りて大に力有り。睿宗九年(皇紀一七三四年)春、王奉恩寺に幸して、拜して王師と爲し、歸法寺を以て其の燕息の所とし、法水寺を以て香火の所と爲さしむ。此歲示寂す。俗壽七十。法夏六十二。王聞て震悼し、誥を贈りて元景と曰ひ、歸法寺の西に茶毗し、翌年十月陝川管内治禮縣般若寺の東南崗に安埋す。仁宗即位の三年、門人首座覺純等の請に依り、碑を立て翰林學士金富僧をして文を撰ばしむ。碑石今尙ほ遺存して同寺址に在り。(海東金石錄、金石總覽)

**澄** 初名澄告。宋帝の諱を避け名を改む高麗肅宗の第四子なり。年八歳京南の興王寺に詣り、大覺國師に投じ、明年明慶殿に落髮し、具を佛日寺に受く。是より學問に服膺し、華嚴の大旨に通ず。肅宗十年僧統に除せられ號を福世と賜る。睿宗の時洪圖國泰歸信等の諸寺に累住し、仁宗位を嗣ぎ詔して五教都僧統を加ふ。四年丙午退きて歸信に居る。是より先き澄覺名藍に歷住すと雖も、宗親の故を以て特に京師に留まり、遂に之を領するに過ぎず。是に至りて外戚權を擅にし王室を危らせんとするを見、抗章して退かんと請ひ、王之に従ひ、中使を遣りて護送せしむ。時に宗室名臣等相踵て斥逐せられしが、澄覺獨り晏然難に及ばず、時人此を以て其の先見に服す。九年王既に

鶴龜を平げ、萬機を聽斷し、中使を遣り召して京師に還らしむ。興王寺に居ること凡そ十餘年、金の皇統元年(皇紀一八〇一年)示寂す。享年五十二。王震悼し朝を輟むること三日、册して國師を贈り、圓明と諡す。(金石總覽、高麗史)

**範教** 新羅興輪寺の僧。景文王の尙ほ國仙たりし時、興に花郎と爲り其の上首に居る。憲安王、庸廉(即ち後の憲安王)の賢なるを愛し、公主を以て之れに妻さんと欲し、謂つて曰く、吾に二女あり、惟だ郎の擇ぶ所と。庸廉拜謝し還つて父母に告ぐ。父母曰く、聞く、王の二女、兄は弟に如かずと。宜く其弟を娶るべしと。然れども尙ほ疑つて未だ決せず。乃ち往きて興輪寺の僧範教に問ふ。範教曰く、郎若し弟を娶らば則ち必ず郎の面前に死せん。其の兄を娶らば必ず三美あり、之を誡めよと。既にして王、辰を撰び郎に使して曰く二女は惟だ公の命ずる所と。使歸り郎の意を以て奏して曰く、長公主を奉ぜん。既にして三朝を過ぎ王の疾革る。群臣を召して曰く、朕男孫なし、寔變の事は宜く長女の夫庸廉をして之を繼がしめよと。翌日王崩じ、庸廉、遺詔を奉じ位に即く。之れを景文王と爲す(皇紀一五二一年)。王、次で夫人の弟を納れ次此と爲す。異日、王、範教に問うて曰く、師が前きに三美とば何ぞや。對へて曰く、當時王及び王妣其の意の如くなるを喜ぶこと一なり。此に因りて位を繼ぐるること二

なり。遂に壽きに求る所の季女を得ること三なりと。王其の言を德とし、範教を爵して大德と爲し、金一百三十兩を賜ふ。(三國遺事、三國史記)

**緣會** 新羅元聖王代の國師。嘗て靈鷲に隱居し、毎に蓮經を讀み普賢觀行を修す。庭池に蓮數朵あり、四時萎まず。元聖王其の瑞異を聞き徵して國師と爲さんとす。師之を開き庵を築て遁ぐ。途にして文殊菩薩の調に感じ再び庵に還り、遂に詔に應じ闕に赴き封ぜられて國師と爲る。僧傳に云ふ、憲安王封じて二朝王師と爲し(字略、下)と號し、咸通四年卒すと。年代相違る。未だ孰れが是なるを知らず。師の靈鷲に居るや、高僧朗智の傳を撰み世に行はる。(三國遺事)

**靈月** 俗姓は韓氏。清州の人なり。康熙甲午(皇紀二七三四年)生る。年十二、平康縣寶月寺に入り、削髮して僧と爲る。瀟月大師海源に従ひて浮圖を學び、遂に其の宗を得。嘗て海源に従ひて安邊の釋王寺に居る。乾隆庚寅示寂す。年五十七。(佛敎通史)

**蓮坡** 俗姓は金氏。字は無盡。兒菴と號す。寒琴縣の人。幼にして出家し、大菴寺に落髮し、具を月松再觀に受け、春菴天默に従ひて學ぶ。天默外典に淹貫し、惠藏慧群に出で、學ぶこと數年、其の名籍林に聞ゆ。既に長じて廣く佛書を受け、蓮潭有一、雲潭那耶に歷事し、年二十七、品岳郎圓に拈香す。郎圓は即ち遺

遊の宗、華岳文信の傳なり。年甫めて三十、頭輪の會を主盟す。藏外傳に於ては酷だ周易論語を好み、旨趣を究索し、遺蘊なきを期す。律曆性理等の諸書に至るまで精校研磨し、俗儒の及ぶ所にあらず。性詩を喜ばず、作る所絶て少し。尤も騷麗に工に、律格精嚴、佛書に於て最も切實起信論を好む。嘉靖辛未(皇紀二一八三年)寂す。年僅に四十。(佛敎通史)

**蓮潭** 一字は無二。俗姓は千氏。和順の人。年十八、法泉寺性哲に従ひて出家し戒を安貧靈師に受け、虎巖體淨に海印寺に投じ、隨侍するもの數年、盡く其の密旨を得、遍ねく尊宿に參じ、又雪坡尙彦に従ひ、華嚴に振錫し、講席を主るもの三十餘年、常に隨ふ者百人に近し。正宗己未(皇紀二四九九年)長興の寶林寺三聖菴に示寂す。年八十。述ぶる所の經論義七部共十八卷、文集法語四卷、竝に世に行はる。(佛敎通史)

**調信** 新羅世逸寺(後の興)の僧なり。本寺より遣はされて溟州捺李郡莊舍の知莊と爲る。信、莊上に到るや、州守金昕公の女を悦び之に惑ふ深し。乃ち洛山觀音大悲の前に就き潛に幸を得んことを祈る。數年の間に其の女已に他に配す。信、大に惜み、乃ち又堂前に往き大悲の我が願を遂げざるを怨み訴へ、哀泣して日暮に至り情思倦憊し俄に假寐を成す。忽ち夢に金氏の娘來り謂つて曰く、兒早く上人を識り心に愛し、未だ嘗て暫くも忘れず。父

母の命に迫られ強ひて人に従へり。今願くは同穴の友と爲らんと欲して來ると。信、願喜し同く郷里に歸り、計活すこと四十餘霜、兒五人あり、家は徒だ四壁空響給せず。遂に落曉し其の口を四方に糊す。是の如きもの十年、懸鶴百結亦た體を掩はず。適ま深州の蟹嶺を過るや大兒十五歳罷て死す。痛哭し道に瘞め餘の四人を率ひ羽曲縣に到り、路傍に茅を結んで舍す。夫婦老い且つ病み、飢えて興る能はず。十歳の女兒過乞し里樂の嘘む所と爲り、號痛して前に臥す。父母之が爲め歎歎す。婦、涙を拭ひ謂つて曰く、子の始めて君に遇ふや、色美に年芳く、衣袴稠鮮に、一味の甘も子と之を分ち數尺の履も子と之を共にし、出處五十年恩愛稠綿し、厚縁と謂ふべし。比年以來衰病歳に益深く、飢寒日に益迫り、兒寒く兒飢るも計補に違あらず、何の暇か夫婦愛悦の心あらんや。君は我が爲めに果を爲し、我が君の爲めに憂と爲る。細思すれば昔日の歡は適ま憂患の階する所と爲れり。君か予か愛んぞ此極に至る。其の衆鳥の同く饑んよりは、焉ぞ雙鸞の鏡あるに如かん。然かも行止人に非らず、離合數あり。請ふ此れより辭せんと。信之を開き大に喜び、各二兒を分ち行かんとす。女曰く、我は桑梓に向はん、君其れ南せよと。手を分ちて別れ、方に路に進まんとし夢即ち驚む。夜色將に闌ならんとし、殘燈翳吐す。且に及び髮髮盡く白く、朝々然として殊に人世の意なし。已に勞生を厭ひ食染の心洒然として米糲す。是に於て聖對するを慚ぢ、憤懣已むなし。歸りて蟹嶺に埋む所の兒塚を撥けば、乃ち石爛斲なり。濯洗して隣寺に奉安し、京師に還り莊任を免れ、私財を傾け淨土寺を創し、白業を勤修す。後終る所を知るなし。(三國遺事)

醉如三愚 俗姓は鄭氏。康州の人なり。天啓二年壬戌(皇紀三二八二年)生る。幼にして出家し、萬徳山の白蓮寺に落髮す。諸師に歴參し、内典に淹通す。業を海運敬悦の室に受く。愚顔漏丹の如し。故に海運號を錫ひて醉如子と曰ふ。最も談論を善くし、聽く者心醉す。嘗て大苑の上院樓に於て華嚴の宗旨を演説す。聽く者數百人、一僧有り田器を負ひ、樓板の下に歇み、一二句を窃み聽き立地に頓悟し、擔を捨て、堂に升起り、泣涕雨の如く、其の罪悔を陳べ、妙詮を受けんことを請ふ。愚撫して之を諷へ、卒に衣鉢を傳ふ。是を華岳文信と爲す。康熙二十三年甲子卒す。年六十三。(佛敎通史)

靈歡一玉 萬頃佛居村の人なり。七歳にして全州の西方山風樓寺に入りて出家し、内典を讀み双迎水解し、目を過ぐれば誦を成す。沙溪金長生の高弟風谷金東準相與に往來し、方外の交を爲す。風谷嘗て通鑑を借與し、奴をして之に隨はしむ。玉路に於て之を披閱し、一卷を看終れば即ち地に抛つ。奴從ひて之を拾ひ、寺

【十六畫】

應一 字は逢渠。西原保安の人なり。父は應曉仕へず。母は李氏。一夜龍屋に入ると夢みて娠める有り。生るゝに及んで未だ嘗て一日再乳せず。年十三具足戒を受く。後ち香水惠舍師に參じ。禪旨に洞明し又經律論究めざる所無し。尤も大般若に長じ、三昧力を得、凡そ疾病すれば貴賤を問はず、一切之を救ひ、動もすれば輒ち驗有り。宗徒推仰すること泰山北斗の如し。高麗宣宗二年遷佛場に赴きて優捷す。時に大覺國師西の方宋に遊び、華嚴の義を傳へ、兼ねて天臺教觀を學び、歸りて智者大師を尊崇し、別に一宗を立て。叢林の衲子雲集し、台宗に歸屬する者十の六七に居る。學一祖道の凋落を哀み、介然孤立し身を以て之に任ず。大覺頗に之に驗せしが終に命を受けず。宣宗四年大覺、弘圓寺に圓覺會を置き、學一を以て副講師と爲す。辭して曰く、禪講交

に及ぶ比、盡く一部を看読る。他日風谷玉に謂て曰く、書を借りて之を抛つは何ぞやと。玉曰く、魚を得る者は筈を忘る。風谷即ち筈を抛て之を試むるに一字の錯無し。邊山の月明庵、全州の遠燈庵、大元寺等に住し、異蹟甚だ多し仁祖癸酉(皇紀三九三年)寂す。世壽七十二。語錄有り。草衣・雲山校正して刊行す。(東國通志)

々流る、取て之に當らずと。但だ講席に參ずるのみ。時に王子圓明國師年九歳、忽ち一日暴に死し、暖氣全く絶ゆ。參會の人皆慟倒之を救ふの方を知らず。大覺即ち之を師に請ふ。師密に大般若を念じ、良久久うして王子乃ち甦る。是に於て大覺特に敬重を加ふ。睿宗即祥の年三重大師を加へられ進智寺に住し、幾くも無く移りて龜山寺に住す。後ち禪師を加へられ、尋で内帝釋院に住す。九年大禪師を加へられ安和寺に住す。仁宗即位、先志を繼ぎて拜して王師と爲し、明慶殿に幸して親しく弟子の禮を伸ぶ。國に水旱災異有れば之を祈禱せしむるに効應あらざるなし。四年雲門に退き居らんことを請ふ。王允さず。七年遂に潛に發して廣州に至る。王留むへ、かゝることを知り、内臣を遣りて懇款を宣へ、兩街に命じて過ぐる所の州郡普照國師下山の例に依りて送迎せしむ。遂に歸りて雲門に入る。四方學者雲珠す。王又特に勞問を加へ、茶香藥劑を送りて間歳なし。二十二年(皇紀一八〇四年)示寂す。王聞て震悼し、朝を輟むること三日、内臣を遣りて葬事を庇護せしめ、明年正月禮を備へ册して國師と爲し、諡を圓應と贈る。春秋九十三。僧臘八十二。尋で門人の請により碑を立て、文臣尹彦頤をして銘を撰ばしむ。此碑今尙同寺に遺存す。(金石錄 海東金石苑)

學 曇 曉 燕 其の役を監し、早作夜思、射ら督勵を加へ、乙酉三月に始め翌年丙戌に訖はる。世祖江原道に幸し、親しく其の落成開堂に臨み召對時を移す。悅山中の故蹟を擧げ、且つ本寺興廢の始末等を擧げ、談鋒迅利、言皆旨に稱ふ。世祖大に喜び、内帑の布帛を賜ふ。後ち成宗の時、悅已に寺事の完きを啓して骸骨を賜はんことを請ひ、飄然として南遊す。事は金守温の五臺山上院寺重創記に詳なり。(佛敎通史)

曇 曉 燕 一に曇微に作るは誤なり。高句麗の僧、推古天皇十八年、沙門法定と共に高句麗より貢來す。曇微、外學に涉り五經を知り、且つ彩畫に工なり。是の時本朝未だ給事を善くせず、微に就き指教を受く。微、又技藝あり紙墨及び礪石を造る蓋し礪石を造るは是の時に始まるか。(日本書紀)

盛且大、近古稀なる所と爲す。講説の餘又念佛を以て業と爲す。其の法は虎岩に受け、印は慈應より傳ふ。(東國列傳)

**獨歩** 初名中歇。人と爲り開敏口辯有り。妙香山に入りて浮屠を學び、削髮して僧と爲る。明の都督沈世魁東江を鎮するや獨歩海に臨んで往きて遊ぶ。世魁執へられて死し、獨歩同歩して河南に入り、左都督洪承疇に依る。清兵燕京を犯すや、承疇師を帥みて入衛し、獨歩をして東して瀋陽に入り、敵の情勢を探らしむ。歸りて鴨綠水上に至り、朝鮮戊卒の得る所と爲る。戊卒之を節都使林慶業に致す。慶業之を崔鳴吉に致す。是より先使者復た明に通ぜず。仁祖義士の明に使すべき者を求めしが未だ得ず。慶業が獨歩を得るを聞くに及んで遂に之を遣り、承疇に移す。具に慶兵の圍む所と爲り、城守する能はざるの狀を遣はしむ。獨歩潛んで山東に入り、間走して承疇の軍に到り因りて國書を致す。承疇之を明帝に上る。時に崇禎十二年なり。明帝詔して其の義を褒し、因りて獨歩に號を麗忠と賜ふ。十四年獨歩明より歸る。王大に喜び米五百五十石白金千五百兩參五五十筋を賜ひ、復た之を遣る。明年承疇清に降り朝鮮が僧獨歩を遣り明に通ずるを言ひ、清人朝鮮を疑ふ。會ま朝鮮の賈人高忠元瀋陽の獄に繋り、崔鳴吉が使を遣りて明に入らしむるを告ぐ。承疇の言ふ所の如し。是に於て清人鳴吉を執へしめ、瀋陽

の獄に繋ぐもの三年、獨歩明に入りて慶業に従ひ、登州に往來す。明亡びて慶業獨歩と福州に趣らんと謀り、獨歩肯んぜず。已にして慶業燕獄に繋かれ、獨歩も亦執へらる。之を久うして又慶業に従ひて本國に歸る。慶業持死するに及び、獨歩坐して蔚山府に流さる。(明僧百録)

**獨衣始悟** 幼名桂芳。俗姓は丁氏。同福の人。正宗二年(皇紀二四三八年)生る。十五父歿し、十六母逝く。初め和順の萬淵寺に入る。嘉慶丙辰、慶冠に従ひて落髮し、具を白蓮禪師に受け、年二十蓮潭に明寂に參じ、隨ひて美善寺影沈臺に往き、二十一日蓮師に上院に參じ、又玩虎法師に參じ、諸山に歴遊し、壬申又玩虎の室に拈香し、丁丑師に侍して祇林寺に往き千佛を造り、歸路深ひて日本の長崎に至る。戊壬日本より還り、七月寺に達す。壬午道龍寺に住し、庚寅還りて禪室に住し、庚子北庵に住し、挽日庵・南庵・眞佛庵等に移住し、戊午草衣と與に恩師玩虎の碑を建つ。戊辰九月示寂す。世壽九十一僧臘七十二。(東國列傳)

**獨仙** 高麗忠惠王時の僧なり。洪法寺に住す。王幸して長生の訣を問ふ。獨仙對へて曰く、人に定分有り、限を過ぐるの理無し、但だ惡業を爲して之を促すべからずと。時に王術士の言を信じ崇教寺を撤去せんと欲す。獨仙其故を問ふ。王曰く、書雲觀云ふ、此地に寺有れば逆臣必ず生ぜん。予曹顯の復た生ぜんを恐れて之を

毀つなりと。獨仙曰ふ、穆宗の時より已に此の寺有り、其の間逆臣幾く有るやと。獨仙琴畫醫術を善くし、亦漢蒙語を解す。王敬重して師傳と爲す。殿に上りて拜せず時人之を疾む。龍に倚り旨を矯めて囚を放つ。王怒りて監察司に命じて之を鞠せしめ、濟州に流す。(高麗史)

**獨光** 高麗神孝寺の僧。睿宗十一年(皇紀一七六六年)顯堂神孝寺の蓋光内殿奉安の佛舍利に敬を致さんことを請ふ。勅して中庭に特に佛牙殿を作り之を安じ、吉日を擇び神孝寺上房蓋光、徒三十人を領し内に入り齋を設け之れを敬す。(三國遺事)

**獨天師** 新羅眞平王代の僧。最も鄉歌を善す。時に國仙の第五居烈郎・第六實處郎・第七寶同郎等三花の徒、楓岳に遊ばんと欲す。韓星あり心大星を犯す。郎徒之れを疑ひ其の行を認めんと欲す。時に融天師歌を作り之れを歌ふ。星怪即ち滅し、日本の兵國に還り、反つて福慶と成る。大王歡喜し郎を遣し遊居せしむ。之を融天師韓星歌と曰ふ。(三國遺事)

**獨宗** 新羅の僧。永深等と與に景德王代の高僧眞表法師の教を受く。永深傳に詳なり。同部を看よ。(三國遺事)

**獨觀** 高麗の高僧。天台派義寂(即)の法嗣なり。初め吳越王假(王)最も佛道を好み禪宗に歸し、因て永嘉集を讀み、同除四住の語に至り之れを解する能はず、以て融天師に問ふ。融曰く、此は是れ教義(此の語讀と)なり、宜く天台の義寂法師に

問ふべしと。即ち召して之を問ふ。對へて曰く此は是れ天台三大部中の法華玄義に出でたる語なり。然れども三大部は會昌の難より五代の亂を経て教誨海外に流散し今復た存せずと。是に於て吳越王使を遣し五十種の寶を以て、高麗に往き之を求めしむ。(此時日本にも使を遣し教誨を求めたりとの説あるも詳ならず)

高麗光宗十一年(皇紀一六二〇年)、王乃ち諸觀を遣し、天台の論疏諸文を持し宋に入らしむ。而も智論疏・仁王疏・華嚴骨目・五百門論等は禁じて傳へしめず。且つ觀師を戒め中國に於て師を求めて問難し、若し答ふる能はずんば、則ち教文を奪ひ以て回れと。諸觀既に至るや、螺溪の義寂善く購授すと聞き、即ち往きて參謁し一見心服し遂に禮して師と爲す。嘗て製する所の四教儀を以て彼に藏す。人知る者なし。遂に螺溪に留ること十年にして入寂す。傳へ云ふ、寂後故道より光を放つてを見、開き視るに乃ち推だ此書(即)のみ、是れより諸方に傳傳し、大に初學啓發の助を爲す。其の書日本に傳傳し、台宗東叡山に藏版し、今尙ほ佛教研究者の參考する所なり。蓋し台宗の教籍を吳越に持傳せしより、一宗の教文復た中國に還りしも、諸觀の支那に死し、遂に高麗の台宗絶脈せんとす。所以に大覺國師義天の天台山に入り智者の塔に謁するや、文を述べて誓を發して曰く、昔し諸觀なる者あり教觀を傳へ得たるも、今承襲久く絶てり。予、發憤身を忘れ師を尋ね道を

問ふと。以て諸觀が教界に於けるの功亦大なるを見るべし。(東國列傳)

**獨淵** 俗姓羅氏。羅州の人。氣豪にして權教あり。故に人或は之を嘲りて權都將と曰ふ。兒時曰く、錦洲大師は無極樂特の人なり。末法衰微し、而して錦洲家遇不羈の故を以て能く復た宗風を振ふと。至る所那羅住持等皆躬を屈して供獻し、郷中十族の年長者は之を友とし、年少者は之を侍に侍生を以てす。或は官長に招かるも騎馬にあらざれば往かず。經講は大義に通ずるに務む、故に従學者衆し。嘗て頭輪山に於て大華嚴講會を龍華堂に設け、集まる者數百餘人に及ぶ。系は華岳の曾孫、碧虛の孫、月坡の嗣なり。(東國列傳)

**獨溪元宇** 字は暮雲。俗姓は羅氏。泰山湯谷の人なり。康熙乙卯(皇紀二二二五年)生る。鞭羊産襪の法を傳ふ。乾隆庚申入寂す。年六十六。臘五十一。(佛國通志)

**獨觀一禪** 俗姓は郭氏。連山の人。嘉靖癸巳(皇紀二二九三年)生る。末に西山の講席に參じ、心法を傳ふ。萬曆戊申德裕に往き微疾に感じ、端座して逝く。年七十六。夏六十一。(佛國通志)

**獨輪濟性** 又明晝と號す。俗姓金氏。海南の人。早く頭輪山に投じ、印元に従ひて落髮す。學既に成りて華岳・喚醒・雪岩諸師に參じ、文章彬蔚、大小行文多く其の手に出づ。文集一卷あり。(東國列傳)

**獨華最納** 字は耳食。興陽に生る。四歳父

母に従ひて樂安に移り、年十四澄光寺に出家し、萬里大師に受具す。十九始めて經を曹溪の楓巖和尚に受け、又虎巖・晦菴・龍潭・霜月等の諸師に歴參し、明眞大師に就きて禪旨を得、崇禎七年、悉く禪教兩門を窮め、前人未發の所を發するもの多し。嘗て華嚴の大義を博採して目一篇を分合し、四教の行相を博採して會要一篇を編集す。又蓮潭と共に性理の大義を論じ、空門に獨吼す。年五十四表忠の任に赴き、後十七年乾隆庚戌(皇紀二四五〇年)、曹溪の普照庵に寂す。年七十四蓮潭の挽に曰く、七十星霜又四年、講經吟病過相連、平生博覽兼曠慧、那箇宗師敢比肩と。文集三卷あり。世に行ばる。(東國列傳)

**獨湖海珠** 四佛山大乘寺の大講師なり。光緒丁亥(皇紀二四七七年)入寂す。(佛國通志)

**獨潭惟冠** 俗姓は金氏。南原の人。康熙庚辰(皇紀二二六〇年)生る。骨相靈秀、鋒穎峻銳、九歳入學し、未だ十五歳ならずして儒業已に成る。時に翰墨の場に入り、累に課第に中る。郷に奇童と稱せらる。十六父を喪ひ、泣血するもの三年、世の無常を觀し、深く出塵の志有り。十九出家せんことを母に請ふ。母強ふべからざるを知りて之を許す。遂に甘雲寺尙洽長老に投じて祝髮し、具を大虛堂就侃に受く。獨黨の儒士之を聞て嘆じて曰く、虎空林に入る。將に大に咆ゆる有らんと。二十二華嚴寺に詣り、霜月大師に參す。大師

一見之を器とす。服役するもの數年、嶺湖に過遊し、影海・洛菴・雪峯・南岳・晦庵・虎巖等諸名師に歷參す。禪教共に妙に臻らざるなく、到る處扣決し、聲名大に彰はる。嘗て見性庵に在りて起信を讀誦す。一日夜忽ち悟る所有り、神心豁然たり。黎明諸經を手に信せて拈看するに、言々果して中夜悟底する所の如し。湖に冥眞堂守一大師有り、月清の高弟なり。宗眼明白にして見處高峻なり。從ひて服膺し、神機相授す。三十三靈源庵に入り、影山を出でず。手づから土窩を庵の東隅に築き、又一社を庵の西麓に創め之を名けて佳隱と曰ひ、以て終年冥息の所と爲す。益克己の工夫に務め、後ち廻門の深源、動樂の道林・智異の諸庵に遍遊し、拈頌の旨、圓頓の法を以て叢林を掀翻するもの二十餘年、己巳の冬遂に霜月の衣鉢を傳ふ。乾隆壬午入寂す。世壽六十三。法臘四十四。(佛敎通史)

【十七畫】

優曇婆羅 初め法名を禹幸と曰ふ。後ち改めて洪基と稱す。俗姓は權氏。安東の人なり。早く情持を失ひ、年弱冠に至り、福く名山に遊び、忽ち厭塵の想有り。遂に小白山に祝髮す。曹溪山松廣寺に遊び、蓮月禪師に參じ、教を枕漢翰醒に受け、具を江坡律師に受く。慧解超凡、又能く沈潜默究し、遂に玄旨に洞透し、因りて

體を堅て、堂を開く。學徒市の如し。平居、人に對し物に接するに、常に言口を出でざるが如く、宗教を拈弄し禪旨を演揚するに至りては、言詞波瀾滔疊し、水湧風激するが如し、居常言爲、衣に勝へざるが如く。恒に鼻嚏を以て一言に三吐三拭す。其の田衣を整へ、禪座に據るに至りては氣湧くこと山の如く、儼として古先生の如く、一も嘘唾無く、牢坐竟日、未だ暫くも假作せず。尤も華嚴に精しく殊に禪學に造し。晚年禪門證正錄を著し、以て佛祖傳心の奥旨を明にす。其の家風清白、室中只だ黃卷數帙有るのみ。光緒辛巳(皇紀二五〇一年)入寂す。年六十。法臘四十五。(佛敎通史)

眞なる者は必ず詣り、跡の古き者は必ず尋ね、遂に舒州桐城縣寂住山に住じ、授子和尚に謁す。和尚は大同と號し、石頭山の法孫聚微無學大師の嫡胤なり。答問妙契し、遂に其の密傳を得。辭して四方に遊び、勝友を旁求し、高師に歷謁し、或は隱を天台に聚り、或は支を江左に探り、貞明七年歸舟に值ひて東還し、康州の德安浦に達し、鳳林に詣りて眞體大師を歸觀す。大師大に悦び三郎寺に住せしむ。高麗太祖國を開くに及び、遠く藝杖を携へて京師に詣りて之に謁す。太祖乃ち廣州の天王寺に住せしむ。後ち移りて慧目山に住す。四方學者臻ること雲の如し。光宗の朝師號を賜ひて證眞大師と爲し、芝檢を飛ばして京師に徴し、舍那院に居らしめ、遂に奉じて國師と爲し、傾心禮仰し、僧會の吳に入るに異ならず。後ち老を請ふて慧目に歸り、煙蘿に栖遲し、水石に枕漱し、終焉の志有り。顯德五年(皇紀一六八八年)秋八月弟子に遺訓し儼然臥坐して示滅す。享年九十。僧夏六十九。王閉て慨嘆し、元宗大師と謚し、塔を惠眞と號す。門人等色身を奉じて塔を慧目山の北崗に墾つ、像法に遵ふなり。門人兩街僧益三重大師听弘等碑を樹てんことを請ひ、王之を可し、乃ち翰林學士金廷彦に命じて銘を撰ましむ。此碑遺存して廣州慧目山高達寺の舊址に在りしが、今隴州郡廳内に移せり。(金石錄)

檀師 觀機傳を看よ。 檀師 字は道光。俗姓は金氏。鶴林河南の人なり。父は容。母は李氏。新羅景文王九年(皇紀一五三九年)生る。年十三落髮出家し、尙州公山三郎寺融禪師に詣りて弟子と爲る。禪師曰く、吾宗の大宗師法號希(大)師(大)事。今慧目山に在り、汝宜く往いて之に師事すべしと。便ち辭して慧目に詣り、服勤修業し、幾くも無く妙理を窮め玄機に通ず。二十二歳具を楊州の三角山莊義寺に受け、道を問ひて寝を忘れ、師を尋ねて解る無し。時に本師移りて光州の松溪禪院に住すと聞き、遠く汝を携へて歸觀し、後ち遠遊送覽の意を告げ、師笑て之を聽す。景福元年春適ま商船の入漢する者有り、遂に寄載して西し、僧の

高麗恭愍王時の僧なり。辛曉と善し

遂に王師に封ぜらる。王親しく康安殿に遊へて振衣の禮を行ふ。百官朝服して班に就く。時に史官尹紹宗、曉の傍に在り、曉顧みて謂て曰く、國事を安書する勿れれと。是より先き紹宗の族僧夫目なる者有り、紹宗に謂て曰く、曉の食暴犬家よりも甚し、必ず國家を誤らん。禪師之に阿附す、吾れ見るに忍びずと。遂に逃れて山に入りしと云ふ。(高麗史)

隱峰斗云 頭輪山に出家し、繁城禪師に拈香し、荆庵自玉と法兄弟たり。嘉慶四年(皇紀二四九九年)燕庭典平と挽日庵を重建し茶山丁若儒此が記を作る。(東國列傳)

霜月靈封 字は混遠。俗姓は孫氏。順天の人なり。康熙丁卯正月生る。幼時竊戲するに沙石を聚めて壘塔城と爲す。十一歳曹溪山の仙巖寺極峻長老に投ず。十五歳髮し、又明年具を洗塵堂文信大師に受く。十八雪巖に參す。道既に通じ、碧虛・南岳・蓮花に遍參し、癸巳本郷に歸觀す。四方笈を負ふ者日に益多し。無用一見歎じて曰く、涉安後の一人なりと。封色白くして中身、圓面大耳、聲は洪鐘の如く坐するに泥塑の如し。衣鉢を雪巖に受く蓋し臨濟の嫡傳なり。凡そ國內の名山瓶錫殆んど遍し、嘗て曰く、學者若し返觀の工夫無ければ、日に千言を誦すと雖、已に益無しと。又曰く、一日念頭實切を着せざれば、食に對して飯に愧つと。乾隆戊辰春曹より禪教兩宗都摠攝國一都大禪師に署せられ、庚午表忠院長と爲る。丁

友(皇紀二四二七年)十月微疾有り、偈を授けて示寂す。年八十一。法臘七十。(佛敎通史)

霜臺淨源 俗姓は金氏。天啓丁卯(皇紀二二八七年)寒邊に生る。父祖共に儒を業とす兒時傍觀するに皆佛事を爲す。早く善天長老に隨ひて落髮受戒し、玩月・秋露二大師に參じ、經論に習通し、年三十に至り、始めて楓潭の室を扣く。潭與に語りて之を異とし、盡く學ぶ所を以て告ぐ。是に於て一鉢一錫、國內の諸勝を歴探し、知識に參禮す。至る所輒流座を避け、問法者常に室に滿つ。尤も華嚴大經に精し、經に四科有り、其の三を逸す。師文に據りて義を究め、遂に三科を定め、讀者をして其の旨を遺さざらしむ。後ち唐本を得て參校するに、乃ち差違無し。學者驚き服す以て清涼の轉世と爲す。己丑師祇平の龍門に在り、偶ま微疾を示し、門人に遺戒し、偈を書して曰く、雪色和雲白、松風帶露青と。筆を投じて怡然として逝く。年八十三。臘六十四。(佛敎通史)

【十八畫】

豐國 百濟の僧。史に其の名を失し、國を以て之を呼ぶ。生養俊遇にして風化を慕つて我が國に來朝す。是の時佛法未だ周からず、豐後の民間に寓す。用明天皇二年夏四月、帝不豫なり。侍臣に語つて曰く、朕三寶に歸せんと思ふ、卿等之を講

せよと。物部守屋・中臣勝海奏して曰く、先皇以來未だ此の義あらざる、何ぞ本邦の神に背き、異域の佛を奉ぜんやと。蘇我馬子曰く、已に敎旨を承く何の異謀か之れあらんやと。是に於て泉穴穗部王子、豐國法師の名を聞き書を下して招請し内に入り法を説かしむ。聖德太子中山寺を攝津の駒塚に建て、落慶の日豐國を請して供養師となし、後住持に任ず。(日本書紀)

饒羊產機 俗姓は張。竹州の人。珣の子なり。萬曆辛巳(皇紀二四一年)生る。幼にして玄賓大師に從ひて具戒を受け、稍壯にして西山大師に歸し、盡く心法を得たり遂に南遊して遍く諸禪長老に參じ、以て其の學を充たす。或は楓房に住し、或は妙香に住して開堂說法し、廣く禪教を演じ、甲申五月微疾に感じて化す。法臘五十三。遺骸を茶毗し、普賢寺の南麓に石鐘を立てて之を藏す。之を西山下饒羊派の祖と爲す。(佛敎通史)

騎盧靈圭 姓は朴氏。密陽の人。大師の高足なり。常に公州の青蓮庵に住す。神力有り、好んで禪杖を以て武技を演ず。壬辰の亂義僧數百人を糾合し、防禦諸將と與に敵を清州に擊ちて諸將敗る。圭獨り敵と戦す。義兵の將趙靈將に錦山の敵を撃たんとす。圭之を諫めしが從はず。圭の曰く趙公をして獨り死せしむべからずと。因て與に戦ひて死す。錦山の從容祠に配享せられ、後ち法徒大仁等、閻を郡



南進樂山の西麓に建て、其の眞影を安んじ、扇して穀禪と曰ひ、碑を樹て、其の事を紀す。(佛敎通史)

【十九畫】

懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴

懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴

ふ。成豐丁巳(皇紀二五二七年)示寂す。日記一卷あり。(東傳列傳)  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴  
懶 懶 證 嚴 關 嚴 嚴

じて賑める有り、嚴を生む。生れて能く言ふ。年甫めて九歳、無量壽寺に往て觀變し、住宗法師に授す。新羅憲康王六年具足戒を受く。後ち教宗を捨て、嵩巖山に往き廣宗大師に依て禪を學ぶ。大師示寂の後遠く南遊して靈覺山に至り、深光和尚に謁し、服勤するもの數歲瓶を撃へて山を下り、商榷に乗じ、海を渡りて唐に入り、雲居大師に禮見し、問義休まず星霜を閲し、遂に雲居の心印を得て再び海に泛んで東還し、唐の天祐六年武州の昇平(天福)に達す。時に千戈旁午、初め月嶽に居りしが、晏坐を得ず、塵を避けて彌峯に入り、尋で小伯山に隱る。知基州諸軍事康宣なる者、深く其の禪德に歸依し、之を上聞す。高麗太祖遂に鳳筆を飛ばして龍墀に徵し、續仰尊崇至らざるなく、善提寺を捨てて以て住せしむ。太祖十二年(皇紀一五八九年)法堂に善笑す。春秋六十九。僧臘五十。王聞て憐哭し、諡して大鏡大師と曰ひ、塔を玄機の塔と曰ふ。後ち十年碑を立て、文臣崔彦擲命を來じて文を撰びて之を刻す。此碑今に遺存して京畿道楊平郡龍門面同寺地に在り。(湖東金石苑 金石雜覽)

【二十畫】

嚴莊 廣德傳中に詳なり。同部を看よ。  
實良 新羅僧。眞興王代始めて僧職に阿尼大都唯那一人を置き、實良法師を以て之

れと爲す。(三國史記、三國遺事)  
實宗 新羅景徳王代(皇紀一四二〇年より一四二五年)の高僧眞表法師の弟子なり。後ち一山の祖となる。(三國遺事)

實 實 實 實  
實 實 實 實  
實 實 實 實  
實 實 實 實

一年大旱し田蕪焦稿す。填、晴日に命じ雨を行らしめ、一境足を告ぐ。天帝怒り。將に之を誅さんとす。晴日來つて急を師に告ぐ。師之を床下に藏くす。俄に天使あり庭に到り、晴日を出さんことを請ふ。師庭前の梨木を指す。乃ち天之に震ひて上天し、梨木委權す。師之を呪し而して生く。後ち其の木地に倒る。人あり鍵推を作り、法堂及び食堂に安置す。其の推柄に銘あり。初め師の唐に入りて廻るや、先づ推火の奉聖寺に止る。適ま太祖東征して清道の境に至る。山賊等犬城に嘯聚し驅散降らず。太祖山下に至り師に之を制する道を問ふ。師答へて曰く夫れ犬の物たる夜を伺りて畫を司らず、前を守りて後を忘る。宜く畫を以て其北を撃つべしと。太祖之に従ふ。果して賊敗れ降る。太祖大に其の神謀を嘉し、歲に近縣の租五十石を給し、以て香火に供す。是れ寺に二聖の眞容を安ずるを以て因て奉聖寺と名く。後ち遷りて鶴岬に至り、突に終焉すと云ふ。石椁の備慮(遺體)に作)師と長弟たりと。蓋し奉聖、石椁、雲門の三寺に峰を連ね備比し、交も相往來し法交を結ぶ。後人改めて新羅殊異傳を作り、鶴塔晴日の事を圓光傳中に記し、大城の事を毗盧傳に系く。既に謬なり。又海東僧傳を作る者、従つて潤文し、實境をして傳なからしむと。(三國遺事、東國輿地勝覽)

實 實 實 實  
實 實 實 實  
實 實 實 實  
實 實 實 實

覺月 別名覺調。高麗明宗高宗時の僧なり自ら高陽醉斃と號す。少にして李仁老に従ひて遊ぶ。華嚴の首座と爲り、内典の外亦文章を善くす。草集有り士林に傳はる。又著はす所に海東高僧傳有り。李相國奎報其の計を聞き詩を作つて曰く、法門榮棟今頽折、後學憑誰討十玄と。(續高麗書、李相國集)

覺 覺 覺 覺  
覺 覺 覺 覺  
覺 覺 覺 覺  
覺 覺 覺 覺

を崇み達磨折衷渡江圖、普賢六牙白象の圖を畫きて之を賜ひ、又龜谷覺雲の四大字を手書し、兼ねて大曹溪宗師禪教都摠攝崇信眞乘勳修至道都大禪師の法號を賜はる。牧隱李權之が爲に讚を書せり。世に傳ふ。雲骨て智異山無住菴に上り拈頌説話を作る。筆端時に舍利を現せしと云ふ。佛教通史に曰ふ、拈頌説話は是より遠く高宗時の國師眞覺の弟子覺雲の作る所、世人皆誤り傳へて龜谷の撰む所と爲す。拈頌説話中引く所眞覺の言多し。親しく教誨を承くる者にあらざれば能く是くの如くなる能はずと。(佛教通史)

覺雲 高麗睿宗王代の僧、祇林寺に住持す。(三國遺事)
覺徳 新羅求法僧の先鋒なり。性聰明廣博新羅既に佛教を奉行し人争つて歸信す。覺徳謂つて曰く、喬に遷るは必ず谷を出で、道を學ぶは師を求るに務む。安々とて居り遅々として行くは釋子報恩の本意に非ずと。即ち船に附し梁に入る。此れ新羅求法の始なり。但だ其の年代を詳にせず。遂に明師に歷事し口訣を傳承し道望彌々隆し。眞興王十年(皇紀二〇〇九年)梁使と共に佛舍利を齎し還り來る。王百官をして禮儀を備へ輿輪寺前路に出で迎へしむ。此れ亦舍利の始めなり。覺徳の渡海求法してより、海東の人皆往かんと欲するの志を懐くに至る。其の功何ぞ道ふに勝へんや。後二十六年に陳、使劉思及び入學僧明觀を遣し、釋氏の經論無慮

二千七百餘卷を送る。初め新羅法化稍く張るも、經像多く闕く。是に至り班班として將に大に備らんとす。惜むらくは、求法の二師終る所未だ詳聞せず。

覺齊 高麗熙宗の第五子なり。出家僧と爲り、諡を冲明國師と曰ふ。(高麗史)
覺忠 新羅眞覺王代の高僧眞表法師の弟子なり。後ち一山の祖となる。(三國遺事)
釋珠 孝子なり。文宗の時の人。早く孤となり托する所なし。刺髮して僧と爲り、木を刻して父母の形を爲り、輪飾を加へ朝夕定省し。奉養の禮悉く平日の如し。有司之を奏す。王の曰く丁蘭の孝も以て加ふる無しと。命じて厚く之を賞せしむ。(高麗史)

釋實 新羅の高僧慈藏法師の門人なり。貞觀十年(皇紀二九六年)師に従ひ同輩十四人と共に唐に入る。(三國遺事)
釋聰 羅末の僧なり。孝恭王五年(皇紀九〇一年)弓高自立して王と稱す。高僧て説法して僧となり善宗と號す。是に至り矯傲甚しく自ら彌勒佛と稱し、比丘二百餘人に命じ梵唄し後に隨はしめ、又自ら經二十餘卷を述ぶ。其の言皆妖妄不經の事なり。時に或は正坐講説す。僧釋聰謂つて曰く、皆邪説怪談、以て調と爲すへからずと。弓高怒り鐵椎を以て之を打殺す。(三國史記)

【二十一畫】

覺圓 高麗文宗朝の高僧なり。雲通寺に住す。王の十二年王師に拜せらる。十九年王彌圓を召し第四王子熙を祝髮して僧と爲し、出て雲通寺に居り就て學ばしむ。熙は即ち法諱義天、後の大覺國師是なり彌圓後ち國師に進み、卒して景徳と諡せらる。(高麗史・金石錄)

鐵牛表云 康津の人。幼にして恬持を失ひ頭輪山に入り力作して衣食す。仍て僧たるの志を發し、懸崖蒸餾禪師に従ひて刺染し、遂に宗師の號を受く。云公役有れば則ち衆人に先ち、巧者有れば則ち己の米を出し、雨有れば漏雨の處を點檢し、必ず瓦して傷所を修補す。寒者を見れば之を衣し、飢者を見れば之に食を推す。遠近之を云善薩と稱す。遺光丙午(皇紀二五〇六年)赤蓮庵に示寂す。(東國列傳)
續給惠楨 俗姓金氏。雲岩の人。乾隆五十六年(皇紀二四五年)生る。乙卯恬を失ひ、甲子頭輪の性一に就て刺染し、十九玩虎禪師に従ひて學び、又蓮庵祖師に就て四集を受け、解脫大雲に參じて五教を受け、抽龍顯性の室に拈香し、開轉轉山、來參者を接する二十餘年、默坐止觀するもの二十餘年、文章卓犖、筆法鈞傑、時に鐵筆と稱せらる。冽水丁若備大に贊歎を加ふ。咸豐八年卒す。世壽六十七。法臘五十五。集一卷あり。(東國列傳)

覺源 新羅憲康王代の僧。崔致遠の智異山雙溪に在るや、毎に詩文を寄せて相交る。(輿地勝覽)

【二十一畫】

歡喜 新羅善德王代の僧。皇龍寺寺記に云ふ、善德王代、寺の初主眞骨歡喜師、第二主慈藏國師云々と。事蹟詳ならず。(三國遺事)

覺月敬軒 自ら虛閑居士と號す。其の居る所を覺月堂と曰ふ。俗姓は曹氏。湖南長興の人なり。嘉靖甲辰(皇紀二〇〇四年)生る。十歳恬持を喪ひ、十五天冠山に入り、玉珠禪師に従ひて祝髮し、遍く子史を讀み古今事物の理に通ず。喟然として嘆じて曰く、此れ世法なり。出世の法にあらざるなりと。返々門哲大禪に謁し、尋で玄雲中徳に參じ、群經を涉盡し、三蔵の教に淹貫す。萬曆丙子、西山の道場に赴き西來の密旨を聞き、言下に大悟し、滯礙するところ有るなし。戊寅金剛山内院洞に投じ、株坐するもの數年、廓然として得る所有り。壬辰の亂に清虛倡義して僧徒を募るや、宣祖授くるに左營の將を以てす。師暫く軍門に詣り、遂に辭して去る。宣祖其の節を高しとし、特に禪教兩宗判事に命ず。軒讀りて受けず。輒光晦跡、深居して出でず。學者雲集す。或は楓岳に之き、或は五臺に之き、或は雄岳に之き。或は寶蓋に之き、最も楓岳

を喜び、菴を仙隱洞に構へ、結夏するもの七年、癸亥の春忽ち山を出で、五臺に移錫す。崇禎壬申雄岳より輿して寶蓋に還りて曰く、此れ有縁の山なりと。居ること未だ幾ならず、微疾を感じ、倏然として示滅す。年九十一。臘七十六。(佛教通史・佛祖源流)

【二十四畫】

覺聖曇島 一に嶺山雲史と稱す。嶺南の人なり。中間全州の威鳳寺に住錫し、文章聲名あり。紳衣・海島・紳盧と名を齊らす紳衣と興に西方山雲默祖師語録を校正して刊布す。早知識深遠、文章雄豪なり。終南山松廣寺大雄殿東壁に雲峯影像有り。自贊に曰く、人間萬事夢中鏡、自性彌陀在目前、海濶風清雲已散、一帆風送向西天と。弟子に龍虛瑞雲有り。(東國列傳)

覺谷承愚 茂長禪雲寺の僧。虎岩の嗣、蓮潭の兄なり。蓮潭年譜に云ふ、乾隆庚申雲棲寺を訪ひ、雲谷師に従ひて圓覺經を學ぶ、余時に二十一なり。門人十一、皆北城に在り、懸解・慕澗一派は頭輪山に在り、一派は月出山に在り、門人二人塔碑を守護すと。(東國列傳)
覺雲 高句麗の僧。孝徳天皇大化元年。來朝せし十師の一人なり。福亮の都を看よ。(日本書紀)

【二十五畫】

觀勸 百濟の僧。三論を研究し旁ら外學に通す。推古天皇十年(百濟武王三年)十月遷を受けて來朝す。勸して元興寺に居らしむ。觀勸曆本及び天文地理の書并に道甲方術の書を獻す。乃ち俊秀の者を擇び、勸に就て學び習はしむ。陽胡史の祖玉陣は曆法を習ひ、大友村主高聰は天文遁甲を學び、山背臣日並立は方術を學び、皆其の業を成す。三十二年一僧あり斧を以て其の祖父を殺害す。天皇、大臣を召し、詔して曰く、夫れ出家は三寶に歸し、戒法を保つ。何ぞ懷忌することなくして輒ち惡逆を犯すや、因て悉く諸寺の僧尼を聚めて之を推問し、若し事實ならば重く之を刑せよと。是に於て僧尼を集めて之を推問す。一時僧尼多く稽疑に違ふ。觀勸表を上りて曰く、夫れ佛法は西國より漢に至るまで三百歳を経たり。然るに我國は未だ百歳に滿たず、今時に當つて僧尼未だ法律に習はざるを以て輒ち惡逆を犯せり。是を以て諸僧尼惶懼爲す所を知らず、仰き願くば、彼の惡逆者を除き其餘は悉く赦して罪したまふこと勿れ、是れ大なる功德なりと。天皇乃ち之を聽りし給ふ。是に於て朝廷僧正・僧都を置き僧尼を檢校せしめ、勸を以て僧正に任し鞍部德積を以て僧都となす。是れ本朝僧綱を立てるの始なり。(本朝高僧傳・三代實錄・日

觀 新羅の聖僧。時代詳ならず。道成なる  
 本寺に  
 と奥に同く包山(傳は所羅山と云ふ乃ち梵音)に  
 隠る。機は南嶺に庵し。成は北穴に處る。  
 相去ること十許里。雲を披き月に嘯き、毎  
 に相過ぎり從ふ。成若し機を邀へんと欲  
 すれば、則ち山中樹木皆南に向つて俯し、  
 相迎ふもの如し。機之れを見て往く。機  
 若し成を邀へんと欲すれば、則ち亦之の  
 如く、皆北に偃し、成乃ち至る。是の如き  
 もの年あり。成居る所の高窟上に常に宴  
 坐す。一日窟より身を躍し空に騰つて逝  
 き至る所を知らず。或は云ふ壽昌郡に至  
 り骸を指つと。機も亦踵を繼ぎ同く眞に  
 歸す。今二師の名を以て其墟に命じ、後人  
 寺を穴下に置く。太平興國七年(高麗成宗二  
 年)釋成梵あり、始めて來り寺に住し、  
 萬日彌陀道場を開き、精勤すること五十  
 餘年、屢殊祥あり。時に玄風の信士二十  
 餘人、歲々社を結び、香木を拾ひ寺に納  
 る。其の木時に夜光を放つこと燭の如し。  
 是れより郡人相率ひて其香を施し、放光  
 を得るの歳を以て賀を爲し、二聖靈應の  
 致す所と云ふ。其の風を繼げるものに尙  
 ほ殿師・權師・道義・子陽・成梵・今勿  
 女・自牛師の七聖ありと云ふも、事蹟詳  
 ならず。(三四通考)

補遺

【一畫】

丁大有 又香と號す。羅州の人。鶴齋學教  
 の子。哲宗三年壬子生る。卒年七十六。  
 賦行を書し、畫梅に巧なり。(香齋叢)

【二畫】

大院君 李景應を見よ。

【四畫】

尹始炳 一進會設創者なり。忠清道の人。  
 元兵使。光武の初年獨立協會に入りて活  
 躍せしが、時利あらず。金剛山に隠れ、  
 又日本清國に遊び、光武八年日露戦争の  
 起るや舊獨立協會の復黨を率ひて維新會  
 を組織し、次て名を一進會と改め、始炳  
 此が會長となり。大に政府の稅政を糾弾  
 す。後李容九の率ゆる進歩黨と合併し、  
 會勢頓に振ふ。隆熙三年一進會は次の會  
 長李容九の名を以て日韓併合を提唱し、  
 明年遂に併合を見るに至れり。  
(最近の韓國、滿洲の風俗と名士)

尹容善 字は景圭。自有齋と號す。海平の  
 人。史判致義の子。李太王乙酉(皇紀二五

【補遺二畫一五畫】 丁大尹申白

尹容植 字は士能。坡平の人。別檢泰元の  
 子。哲宗己未(皇紀二五一九)生る。李太王  
 庚辰文科に登り、翰林院書典簿より、官を  
 累ねて吏曹參判漢城左右尹に至り、建陽  
 元年開城の尹となり、中樞院議官に轉じ  
 二年駐俄法使を拜し、景季殿提調特  
 進官奉常寺提調忠清北道觀察使を歴て、  
 五年秘書院卿となり、七年掌禮院卿より、  
 平安南道觀察使となり、地契衙門監督に  
 轉す。(文獻備考)

尹容駿 石淳と號す。坡平の人。判書敬成  
 の子。文科に登り。官後營使に至る。李  
 太王甲申金玉均の變に前營使韓奎稷等と  
 與に害に遭ふ。忠貞と諡せらる。  
 尹喜求 字は周玄。于堂と號す。海平の人  
 參議致善の子。少にして九經に涉獵し、旁  
 らら子史に及び、古文を治め、戸外に出で  
 ざるもの幾んど三十年。光武の初、朝廷  
 史館所を置き、博學の士を簡ぶや、張志  
 淵と與に布衣を以て之に與かり、幾くも  
 なく罷め、後ち辟されて郎となり、參上  
 閣に入りて兩朝寶鑑を纂進す。嘗て日本  
 に遊覽して歸り、併合の後、總督府中樞

【五畫】

申正熙 字は中元。平山の人。判府事權の  
 子。李太王戊寅(皇紀二五三八)御營大將を  
 拜し、禁營訓練壯營大將等を歴拜し、甲  
 申後營使となる。(奎章錄)

申樞 字は周卿。亞將命温の子。李太王の  
 朝總戎使別使より親軍衛使を拜す。  
 申箕善 字は言汝。平山の人。義朝の子。  
 哲宗辛亥(皇紀二五二一)生る。李太王丁丑  
 文科に登り、内法學部大臣等を歴て、參  
 政に至る。後大東學會長掌禮院卿修學院  
 長等を歴踐す。  
 申樞 初名顯浩。字は國賓。威堂と號す。  
 平山の人。義直の子。哲宗己酉(皇紀二五〇  
 九)禁營大將を拜し、尋で職を罷めて諱  
 せられ、李太王丙寅總戎使を拜し、兵曹  
 判書參贊鎮撫使禁將等を周流し、卒して  
 莊肅と諡せらる。明治九年成立せし日韓  
 修好條規は、總時の判中樞府事を以て、  
 日本全權黒田清隆と江華府に於て議定せ  
 しものなり。

白殿 字は景如。水原の人。哲宗辛亥  
(皇紀二五二一)禁營大將を拜し、總戎使に

任全安 字は公洞。訓練大將聖皇の子。哲宗戊午(皇紀二五二八年)禁營大將となり、摠戎使御營大將訓練大將を歴て判書に至り靖毅と諡せらる。(全略)

【六畫】

任善瑛 字は殷卿。豊山の人。兵使百親の子。李太王辛未(皇紀二五三一年)御營大將を拜し、訓練大將摠戎使前營使等を歴拜す。(全略)

任善瑛 豊川の人。教官百熙の子。哲宗庚申(皇紀二五二〇年)生る。李太王二十二年文科に登り、光武十一年成均館長を以て李完用内閣に入りて内部大臣となり、隆熙二年度支部大臣に移り、三年遷す。明治四十四年日韓併合するや、朝鮮總督府中樞院顧問に任せられ、子爵に叙せらる。

全善瑛 東學黨の互魁なり。元と全羅道古阜の豪農。李太王三十一年亂を古阜に起し、同年十二月捕へられて京師に押送せられ、其の黨孫化中・崔永昌等と共に遂に謀に伏す。詳は崔時亨の都を見よ。

安中植 心田と號す。哲宗十二年辛酉生る。卒年六十九。書を能くし、各體具に長じ、又德行を善くす。(全略)

安嗣善 字は聖哉。竹山の人。李太王甲午捕將となり、經理使を歴て警務使を拜し法務協辦に轉じ、乙未申箕善に代はりて軍部大臣と爲り、後ち認め、建陽元年、國

王露國公使館播遷後、警務使を拜せしが幾くもなく罷めて中樞院に入る。光武二年金在豊等と共に王に迫りて禪位せしめんとせし陰謀露はれ、在豊等捕へられて流配せられしが、嗣善は日本に亡命して難を免かる。光武四年國に還りしが、是より先、乙未の歲李煥鎔が王妃及世子並に義和宮を除かんとする逆謀に嗣善與かり聞きし故を以て獄に囚せられ、權濬與と共に謀に伏す。時の裁判長署理は警務使李裕寅にして宣告と同時に死刑を執行し、未だ裁可を経ざりしを以て、議政署理金厚根之を不當とし、上奏して、裕寅等を流に處す。光武十一年嗣善の官を追復し、後發敏と諡せらる。

安鍾和 字は士應。涌齋と號す。廣州の人。風匠敏學の後、基遠の子なり。哲宗十一年(皇紀二五二〇年)生れ、李太王甲午文科に登る。是歲時事大に變じ、阻勉從仕すと雖、一も意に當るものなく、先後居官總て二月に滿たず。光武九年約議に抗章し嚴斥せられて洪陽に歸り、甲子卒す。其の學九流に貫穿し、史に長し、尤も國朝の掌故に習る。著はす所に東史節要、人物志あり。世に行はる。(全略)

朴源敏 潘南の人。判書元陽の子なり。李太王辛巳(明治十四年)文科に登り、甲申弟一舉事大黨を倒し、新政府を樹立せんと欲せしが、清兵の沮む所となり、洪英植等と共に之に死す。甲午罪籍を赦され、

官を復す。

朴定陽 字は致中。潘南の人。齊近の子。憲宗辛丑(皇紀二五〇一年)生る。李太王丙寅文科に登り、辛巳命せられて趙秉稷・魚允中・洪英植等と共に日本に遊覽し、丁亥特派全權大使となりて美國に往き、後學部大臣内部大臣等を歴て、數々總理參政に陞る。

朴洪壽 字は子範。潘南の人。宗冕の子。風樓俞華煥の門人なり。學行を以て監役を授けらる。隆熙四年、其の學淵源あり踐履篤實を以て文端と諡せらる。

朴容大 字は聖器。密陽の人。史曹判書承輝の孫なり。憲宗己酉(皇紀二五〇九年)生る。李太王乙丑進士に中り、戊辰文科に登り華要を歴歿し、甲午禮曹參判都憲に陞り中樞院議官管稅司長掌禮院卿等を歴て、光武四年忠清南道觀察使となり、七年大醫院卿社稷提調に歴遷し、九年法部大臣を拜し、十年弘文館學士李章閣提學に轉じ、明治四十三年日韓併合するや男爵に陞叙せらる。

朴齊純 平齊と號す。潘南の人。參政洪壽の子。李太王癸未(皇紀二五四三年)文科に登り、駐劄天津從事官校理掌令同副承旨を歴て、駐劄天津督理通商事務官に差せられ、明年歸國して工曹參議を拜し、又天津に赴き、還りて史曹參議を拜し、各曹參判全忠二道監司等を歴拜し、中樞院議官外部協辦に轉じ、尋で外部大臣に陞り光武二年全權大臣となりて清韓通商條約

歷遷す。(全略)

【六畫】

任善瑛 字は殷卿。豊山の人。兵使百親の子。李太王辛未(皇紀二五三一年)御營大將を拜し、訓練大將摠戎使前營使等を歴拜す。(全略)

任善瑛 豊川の人。教官百熙の子。哲宗庚申(皇紀二五二〇年)生る。李太王二十二年文科に登り、光武十一年成均館長を以て李完用内閣に入りて内部大臣となり、隆熙二年度支部大臣に移り、三年遷す。明治四十四年日韓併合するや、朝鮮總督府中樞院顧問に任せられ、子爵に叙せらる。

全善瑛 東學黨の互魁なり。元と全羅道古阜の豪農。李太王三十一年亂を古阜に起し、同年十二月捕へられて京師に押送せられ、其の黨孫化中・崔永昌等と共に遂に謀に伏す。詳は崔時亨の都を見よ。

安中植 心田と號す。哲宗十二年辛酉生る。卒年六十九。書を能くし、各體具に長じ、又德行を善くす。(全略)

安嗣善 字は聖哉。竹山の人。李太王甲午捕將となり、經理使を歴て警務使を拜し法務協辦に轉じ、乙未申箕善に代はりて軍部大臣と爲り、後ち認め、建陽元年、國

の議訂に當り、明年比國全權と條約を議定し、六年沈相薫に代りて駐清全權公使となり、八年還りて復た外部に任じ、議政府參政と爲る。明年韓主高内閣に入りて外部大臣となり、日韓協約に調印せり。尋で韓主高の後を承けて參政大臣に陞りて内閣を組織し、政局に當るもの約一年半。十一年中樞院顧問に轉じ、隆熙三年宋秉峻に代りて李完用内閣に入りて内部大臣となり、遂に日韓併合の大策に參し、子爵に叙せられ、大正五年卒す。年五十九。

朴齊敏 字は文卿。潘南の人。禾壽の子。哲宗戊午(皇紀二五二八年)生る。李太王甲午文科に登り、承政院假注書を拜し、注書に陞り、正言校理修撰掌令應教工兵曹參議大司諫中樞院議官秘書院丞に歴遷し、光武四年宮内府特進官となり、各司提調を果拜し、八年全羅北道巡察使を命ぜられ、明年復命し、隆熙元年承寧府副提管を拜し、三年伊羅公國葬の時勅使を以て日本に赴き、明年日韓併合するや、男爵を授かり、朝鮮總督府中樞院議官を命ぜられ、經學院副提學を拜し、大正十年卒す。

朴箕陽 字は範五。石雲と號す。潘南の人。縣令齊暉の子。哲宗丙辰(皇紀二五二六年)生る。李太王戊子文科に登り、説書檢閱文學大司成承旨史曹參議を歴て刑曹參判に陞り、出て京畿咸鏡二道觀察使となり、入りて宮内府特進官中樞院議官侍講院詹

事大醫院卿兼承禮院卿に累遷し、議政府參政となり、光武三年宮内府大臣署理を命ぜられ、隆熙四年奎章閣提學を拜し、同年日韓併合し、朝鮮賞族令に依り男爵を授けられ、大正十年經學院副提學を命ぜられ、十四年朝鮮總督府中樞院參議を拜し、昭和七年卒す。琴棋書畫に通じ、屢々朝鮮美術展覽會評議員に擧げらる。池錫永 字は公胤。松村と號す。忠州の人。哲宗六年(皇紀二五二〇年)漢城に生る。李太王十三年修信使金綺秀の日本に派遣せらるるや、隨員朴永善なる者、東京に於て種痘の法を聞き、且つ種痘針盤一卷を得、歸りて之を門生錫永に傳ふ。錫永此に於て發奮し、十六年自ら釜山に赴き、日本の濟生醫院を訪ひ、海軍少軍醫戸塚積齋に就て種痘法を學ぶこと數月、歸りて之を其の郷里及び京師の子女に試み、其の名漸く世に知らるるに至る。之れ朝鮮牛痘普及の端緒なり。十七年修信使金弘集の日本に派遣せらるるや、命ぜられて其の隨員となりて東京に赴き、痘苗製造の法を傳へて歸る。十九年全羅御使朴泳敏に聘せられて全州に赴き、牛痘局を設けて種痘法を教ふ。明年文科に登り、成均典籍司憲持平を歴、二十二年牛痘新説を著して之を國中に刊布せり。司憲掌令を以て上疏して時弊を論じ、薪智島に流され配に在る五年、此の間亦種痘を島民に施せり、省を蒙りて歸り、益々之が普及に力む。刑曹參議承旨漢城府尹晋州牧使東

業府使等に歴遷し、學部大臣に請ひ、光武三年醫學校を立て、終に其の校長となり。爾後醫育に従事するもの十餘年。錫永又譯文の普及に着眼し、光武九年上疏して難解の漢文を捨て、曉り易き譯文を廣佈し、以て教化普及を圖らんことを請ひ、遂に新訂國文の實施を見るに至れり。大正十五年朝鮮總督府中樞院賜託を命ぜられ、昭和九年卒す。年八十一。(全略)

【七畫】

吳顯文 字は周卿。海州の人。慶宣の子。李太王甲午(皇紀二五三四年)摠戎使を拜す。(全略)

宋近謙 字は近述。立齋又は南谷と號す。恩津の人。欽樂の子。尤庵時烈八世の孫なり。憲宗戊申(皇紀二五〇八年)登第し、李太王壬午大拜して左相に至り、退て朝奉賀を拜し、光武七年卒す。近法風度粹偉、姿性謹厚、學文該貫、家庭に受くるあり。時の親戚に遭ひ、山樊江湖の間に優遊して終はる。文獻と諡せらる。

宋秉峻 恩津の人。哲宗戊午咸鏡南道長津に生る。長じて京城に出て、當時の權門閔泳煥の知を受け、武科に登り、守門將に任じ、訓練判官都摠府都事を歴て、司憲府監察に移り、李太王壬午の變に備に身を以て免かれ、又甲申の變に遭ひ、乙酉内命を受け、潜に日本に往き、金玉均

を暗殺せんと圖りしが、却て其の人物に共鳴し、其の同志となりしと云ふ。丙戌國に還りしが如上の嫌疑を以て拘拿せらるるもの數月。閩泳煥の救によりて特赦せられ、數官を歴て、興海都守陽智縣監等を拜せしが、既に宮中の注意人物を以て目せられ、心に安んづる能はず、終に日本に亡命し、各地を周遊し、野田平治郎と變稱し、山口縣萩に於て蠶業等に從事せり。明治三十七年日露戦争起るや、通譯として軍に従ひて歸國し、尹始炳、李容九等と與に謀りて一進會を組織し、施政の改善と國民生命財産の安固等を政府に向て要望し、各地に演説會を開催して豪快痛烈の雄辯を揮ひて以て聽衆を動かす等盛に活躍し、名聲頗に高し。光武十一年李完用内閣成るや、入りて農商工部大臣となり。後内務大臣に轉ぜしが、隆熙二年二月職を辭し、又日本に遊び、盛に日韓の併合を朝野の間に提唱せり。隆熙四年國に還る。此年日韓併合就り、朝鮮貴族令により子爵を授けられ、朝鮮總督府中樞院顧問に任ぜられ、大正九年伯爵に陞叙し、十四年卒す。年六十八。計報天聽に達するや、正三位勳一等を授けらる。(日韓併合史、後述の條)

**宋秉瑞** 字は華玉。潤齋と號す。恩津の人物。趙洙の子。尤庚宋時烈の弟。家學を承襲し、遺逸を以て祭酒經筵官を授かり、屢上疏して變服の非を論じ、光武十年又上疏して協約の失を論じ、闕に伏して對を請ふ。警務使尹誥去狀で南門より擁出し郷里に送還す、棄婦狀かれたるを覺り、遺疏を治し藥を飲んで卒す。議政府議政を贈り、文忠と諡せらる。

**成大承** 昌寧の人。縣監元鎮の子。哲宗戊午(皇紀二五二八年)進士に中り、歷官して府使に至り。李太王乙酉文科に擢んで、刑曹參議を拜し、特に承旨に除せられ、丙戌兵曹參判同知敦寧府事等を歴て、乙未管稅司長を拜し、官掌禮院卿特進官に至る。(文獻備考)

**成岐運** 字は鳳瑞。昌寧の人。義益の子。宣宗丁未(皇紀二五〇七年)生る。李太王庚辰文科に登り、甲申津津書記官に差せられて天津に赴き、乙酉弘文館に入りて修撰を拜し、同副承旨刑曹參議内務參議津城少尹仁川監理典圖局總辦等を歴て、癸巳出で駐滬總領事となり、甲午宮内府參議農商協辦右承旨を歴拜し、建陽元年内府參議府會計院卿となり、光武四年鐵道監督政府參贊を拜し、出で駐日公使となり。五年宮内府協辦を拜し、六年議政府參政に陞り、鐵道院總裁に除し、八年慶尙南道觀察使となり、明年忠清北道に轉じ、十年京畿觀察使より、農商工部大臣となり、隆熙元年中樞院副議長を拜し、明年掌議院卿となり、明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙せらる。(文獻備考)

諸般の改革を斷行せり。之を甲午革新と稱す。該戰役は日本の勝利に歸し、馬關條約に於て清國をして朝鮮の獨立を承認せしめしが、三國干渉による日本の遼東還附は、朝鮮に於ける日本の勢力失墜を來し、ロシアは機に乗じて勢力を扶植し幾多の紛糾を重ね、三十三年二月、王は露國公使館に播遷し、翌年二月慶運宮に歸還す。三十四年十月、王は國丘境に於て皇帝の位に即き、國を大韓と號し、曩に定めし建陽の年號を廢し、更に光武と建元せり、其の前明治天皇より大勳位菊花大綬章を贈進あらせらる(明治三十一年四月)。次て日露戦争となり、日韓協約となり、其の結果日本は統監府を京城に開設し、明治三十九年二月外交に關する一切の事項を管理せり。然るに翌光武十一年七月海牙に於ける密使事件起り、王は位を皇太子に譲り、退て德壽宮に居る。隆熙四年日韓併合に際し、德壽宮李太王と稱號せられ、皇族の特遇を賜はる。大正八年菊花章頸飾を授けられ、尋で薨す。在位四十四年。壽六十八。洪陵に葬る。(朝鮮小史)

**李元熙** 字は善長。德水の人。宣傳官益權の子。李太王戊辰(皇紀二五二八年)御營大將を拜し、訓練大將兵曹判書に歴遷す。靖僖と諡せらる。(金鑑)

**李正魯** 字は大哉。少漢と號す。全義の人士。曹判書好敏の孫。哲宗戊午(皇紀二五二八年)文科に登り、庚申龍岡縣令を拜し、官を累れて李太王壬辰工曹判書を拜し、各曹を歴拜し、癸巳冬至至上使となり、甲午史曹判書を拜し、官侍從院卿判書等事に至り、光武十一年著社に入り、奎章閣大提學を拜し、明治四十三年日韓併合するや、男爵に陞叙せらる。(文獻備考)

**李奎徽** 字は士一。禁將光益の子。哲宗の朝再び德政使となり、禁營大將兵曹判書を歴て輔國に陞り、孝毅と諡せらる。(金鑑)

論を押し切り、毅然として之を解決し、  
 隆熙三年一月より二月に亘り、伊藤統監  
 と共に皇帝の南巡及び西巡に扈從せし  
 が、排日派獨立派等より累に迫害を受け  
 又刺客の變(隆熙三年十二月二十二日)に遭ひしが、斷  
 手として所信を掲げず、遂に明治四十三年  
 八月二十二日勅命を受け、全權委員と  
 して日韓併合條約に調印し、以て東洋平  
 和の基礎を永遠に確定せり。功を以て伯  
 爵を授けられ、朝鮮總督府中樞院顧問を  
 拜命し、次で同副議長を仰付られ、正三  
 位に叙せらる。彼の大正八年萬歲慶事  
 の際の如き、晏然之を座視するに忍び  
 ず、三回に渉り同胞に對する警告文を公  
 表し、鎮壓に努力せしが如き、其の志の  
 確乎不撓なるを知るべし。大正九年侯爵  
 に陞り、同十四年從二位に陞叙せられ、同  
 十五年二月卒す。年六十九。危篤の報天  
 聽に達するや、特に恩命あり、特旨を以  
 て正二位に叙し、大勳位菊花大授章を授  
 けらる。男二人あり。長升九早く歿し、  
 次子男爵恒九の子丙吉入りて升九の後を  
 繼ぎ、侯爵を襲ぐ。(皇室紀事、併合史等)

**李址鎔** 初名根鎔。字は景天。響雲と號す。  
 宗室完永君載鏡の子なり。李太王庚午  
 (明治三年)生る。丁亥文科に登り、顯要を歴  
 歿し、光武二年黄海道觀察使となり、三年  
 慶尙南道觀察使を拜し、明年宮内府協辦  
 となり、五年全權公使に任じ、贊政に陞  
 り、七年復た駐日公使となり、八年外部  
 大臣を以て日本特命全權公使林權助と日

韓議定書を協定調印せり。法部大臣に轉  
 じ、命を奉じて日本に報聘し、歸りて奉  
 章閣學士、判教事教育總監等を歴て、明  
 年農商工部大臣となり、内部大臣に轉じ  
 十一年中樞院顧問に任ず。明治四十三年  
 日韓併合するや、伯爵に陞叙せらる。  
 (文庫案)

**李秉武** 全州の人。李太王二十二年武科に  
 登り、宣傳官を拜し、三十一年壯衛營副  
 領に陞り、報聘大使義和宮(日親賢)の隨員  
 となりて日本に赴き、陸軍教導團士官學  
 校に修業し、國に歸りて正尉を拜し、三  
 十四年參領に陞り、副領を歴て正領に通  
 み、軍部教育局長となり、參將に陞り、  
 光武十一年副將を以て李完用内閣に入り  
 て軍部大臣を拜し、明治四十三年日韓併  
 合と共に子爵に陞叙せらる。  
 (文庫案)

**李承輔** 字は粹卿。韓山の人。吏曹判書謙  
 在の子。憲宗辛丑(皇紀二五〇一年)生る。哲  
 宗己未文科に登り、工刑曹判書左右參贊  
 を歴て、光武元年中樞院議官と爲り、二  
 年掌禮院卿に移り、三年特進官を拜し、  
 正憲に陞り、五年侍從院卿と爲る。  
 (文庫案)

**李顯** 字は惠伯。全州の人。僉使思謙の  
 子。李太王丙寅(皇紀二五二年)擧成使を拜  
 し、禁衛大將統使に陞遷す。(文庫案)

**李建昌** 字は鳳朝。或は鳳藻と曰ふ。寧齋  
 と號す。定宗王の後なり。大父是遠の開  
 城に留守たるや、母沈氏官舎に賑むもの  
 彌月、江華の第に歸りて以て終む。建昌

風儀美に性明敏、少にして四書五經に通  
 じ、十五登第す。李太王三年なり。二十  
 三書狀官を以て清都に往き、徐部・黃珏  
 等諸人と遊ぶ。諸人其の文を見て其の夙  
 茂に驚かざるなし。卒年四十七。建昌文  
 學に於て飢渴の如く、尤も古文に長じ、潔  
 淨剛深、貧華・王安石の間に得るもの多  
 しと爲す。而して經理は多く王守仁を主  
 とす。性弱隘にして物を容るる能はず。  
 然れども人の長を見れば能く己を處うし  
 て之を獎し、一介も義に非れば取らず。  
 外交の始めて開かるや、粗ぼ時務を言  
 ふ者は起用せらる。或は建昌の才を慕ひ  
 て來り、諷するに事を共にせんとす。然れ  
 ども建昌は父の洋警によりて自裁せる  
 を以て、常に洋人を仇視し、外務を言は  
 ず、故に皆謝して之を退け、遂に變ぜず  
 して身を終はる。寧齋遺稿數十卷あり、  
 家に藏す。(寧齋遺稿)

**李重夏** 全州の人。寅植の子。李太王壬午  
 (皇紀二五二年)文科に登り、乙酉八月安邊  
 府使を以て土門勸界使に差せられ、清國  
 差官買元桂と與に白頭山界を勘査せり。  
 德源府使に轉じ、統理交涉衙門協辦大邱  
 平安監司宮内府特進官に陞遷し、隆熙四  
 年李載克・李夏榮・李根湘等と與に柞蠶  
 會社を設立せり。

**李曾榮** 字は舜敬。慶州の人。郡守裕憲の  
 子。憲宗丁酉(皇紀二四七年)生る。李太王  
 甲戌文科に登り、清要を歴歿し、工戸禮  
 兵曹參判大司憲を歴て、乙未貴族司長と

なり、宮内府特進官太醫院卿に轉じ、復  
 び掌禮院卿を拜し、書社に入る。明治四  
 十三年日韓併合するや、男爵に陞叙せら  
 る。(文庫案)

**李奎遠** 字は星五。全州の人。勉大の子。  
 李太王壬午(皇紀二五二年)御營大將總戎使  
 を歴拜す。(文庫案)

**李奎興** 字は君伯。德水の人。兵使謙熙の  
 子。李太王甲申親軍左營使を拜し、後營  
 使工曹判書に轉す。(文庫案)

**李長應** 字は是伯。石城と號す。南廷君球  
 の第四男。英祖の玄孫なり。純祖庚辰  
 (皇紀二四〇年)生る。長じて冠禮を行ひ、羅  
 興閔氏致久の女を娶る。初め興宣副正に  
 封ぜられ、累遷して君に至り、宗親府堂  
 上に陞り、五衛都總府都總管に任ず。哲  
 宗癸亥十二月哲宗薨じて嗣なし。君の第  
 二男遷まれ入りて大統を承く、之を李太  
 王と爲す。王何ほ幼冲なり。君即ち大院  
 君に封ぜられて國政を總攝し、前代諸王  
 も取てせざりし果斷を以て積習の打破に  
 力め、先づ人材登庸するに舊制を破り、  
 四色の黨閥を無視し、苟も一藝一能ある  
 者は貴賤に論無く之を擧用し、又外戚の  
 權柄を抑壓して名門閥閥に縁無きものを  
 薦用して破格の顯位を與へ、次で當時諸  
 種の弊根たりし八道の書院は或る一部分  
 の外悉く之を撤廢し、以て從來の積弊を  
 刈除せんとし、又軍弊を革めて戸布を均  
 うし、社會を設けて貧民を賑はし、服制  
 を改めて袂袖とし、冠帽の長大を縮少し

大烟管大扇を禁じて輕捷ならしめ、勤儉  
 を崇み、奢侈を抑へ、嚴刑峻法以て奸猾  
 を懲す等、令行はれ禁止まり、内外肅然  
 たり。然れども大に土木を興して景福宮  
 を重建せしが如きは徒に民力を疲弊せし  
 め、遂に人心をして離反せしむるの因を  
 爲し、又天主教に對し大彈壓を行ひ、極  
 端なる領國政策を敢行して遂に外患を招  
 來するに至り、改革に快からざる徒は時  
 に乘じて政を勸し、遂に大老の尊號を受  
 け退隱するの止むなきに至れり。此に於  
 て外戚閔氏入りて政を秉りしが數年なら  
 ずして政令漸く墮落し、國庫空虛と爲り  
 遂に壬午明治十五年の變亂を見るに至  
 り、君即ち起て之を收拾せしが幾くもな  
 く清軍の爲に拉し去られ、保定府に幽居  
 すること四年。乙酉の歲迎へられて國に  
 歸りしが、時勢利あらず閑居するもの又  
 十年。乙未明治二十八年の變に復た起ち  
 て宮闈に入り、政變を鎮定せしが、遂に  
 雲龍宮に退隱し、又世事に與らず。光武  
 二年薨す。年七十九。隆熙元年大院王に  
 追封し、獻懿と諡せらる。君天姿英邁、性  
 度峻正、人と對して談笑するに間ふるに  
 善論を以てし、和氣藹然たり。而して人  
 に過失有れば少しも假貸せず、賞するに  
 遠きも遺さず、罰するに私に阿らず、子  
 任の貴顯なる者も側侍して常に瀟々た  
 り。而して切に躁進を禁じ、以て行義を  
 重んじ、常に綈綿を服し、食に肉を重ね  
 ず。詩文書畫、皆妙境に詣り、尤も寫關

に工に、天下に名あり。三男三女を生む。  
 長は載星(公)・次は李太王・庶男は載先  
 なり。長女は趙慶鎭に、次女は趙鼎九に  
 庶女は李允用に適けり。(大英野傳、李顯傳)

**李埴** 舊名埴鎔。字は景極。石底と號す。  
 興宣大院君の孫。李太王七年生る。二  
 十三年文科に登り、弘文館正字兼奉秋  
 館記事官を拜し、明年、高文檢閱兼侍講  
 院說書弘文副應教を拜し、刑曹參議大司  
 成副提學直提學都承旨に陞遷し、吏曹參  
 議を拜す。三十一年甲午吏曹參判統衛使  
 より内務衙門署理大臣となり、未だ幾な  
 らず、日本報聘大使の命を被りたるも未  
 だ任に赴かず。明年日本駐劄全權公使を  
 拜せしが、未だ發せず、事によりて喬桐  
 に流配せられ、尋で赦されて官に復し、  
 日本留學を命ぜられ、三十四年歐洲を遊  
 覽し、三十六年日本に還り、千葉縣北條  
 町に閑居するの累年。四十四年國に還  
 り、永宣君に冊封せられ、陸軍參將を拜  
 し、同年報聘使李載冕に隨行して日本に  
 赴き、隆熙四年韓國に陞る。大正元年李  
 嘉公薨去するや、公家を相續し、舊名李  
 埴鎔を李埴公と改め、大正六年三月薨  
 ず。

**李容九** 初名愚錫。又祥玉と稱し、字は大  
 有。海山と號す。李太王五年尙州に生れ父  
 母に從ひて安山稷山等に轉々し、十三年  
 にして孤となり、母を助けて農事に從ひ  
 以て僅に口を糊す。二十三東學黨の第二  
 祖海月崔時亨に從ひて學び、竟に孫秉熙

等と興に海月門下の高弟となる。李太王甲午(明治二十二年)東學黨の亂後時等次第に捕せられて刑に就き、容九亦捕へられて獄に下りしが、幸に死を免かれ、出獄後依然東學を宣傳し、後東學黨を改めて進歩會と稱し、黨員吸收に力めしが、宋秉岐の勧めにより一進會に合併し、日露戦争に際し、我軍事行動に政治施設に貢獻する所多し。光武十年孫秉熙亡命より歸來し天道教を開創するや、容九之と分離して別に待天教を創め、其の教主となり、一面一進會の十三道支會委員長たりき。尋で尹始炳の役を承けて一進會長となり、終に百萬會員を率ひ國民一般に對して日韓併合を提唱し、同時に韓國皇帝・曾爾統監並に總理大臣李完用に各一通の意見書を上り、明治四十三年愈日韓併合を見るや、宿願頓に發し、轉じて須磨に療養せしが、明治四十五年五月終に歿す。年四十五。計報天聽に達するや、勳一等瑞寶章を賜はり、生前の功勞を表彰せらる。(朝鮮併合史、最近の韓國)

**李容直** 字は受卿。完山の人。純祖甲申(皇紀二四八四年)生る。哲宗庚戌文科に登り弘文館に入り、實錄記注官を兼ね、獻納を歴て諫院に入りて司諫執義となり、掌樂正を拜し、出で、龍岡を守り、同副承旨工曹參議に陞り、乙丑吏曹參議を拜し麗州牧使忠清道召募使漢城左右尹等を歴て、兵吏禮曹參判を拜し、工曹判書に陞り、出で、慶尙道觀察使となり、光武六年特進官を拜し、正憲に陞る。(文獻案)

年特進官を拜し、正憲に陞る。(文獻案)

**李容泰** 全州の人。府使秉路の子。哲宗甲寅(皇紀二五二四年)生る。李太王癸酉進士に中り、郡守に過み、乙酉文科に登り、累遷して直閣に至り、丁亥駐英德俄義法五國公使館參贊官となり、戊子副應教となり内外を歴遷して、光武三年平理院裁判長となり、五年駐美公使となり、駐日全權に轉じ、未だ赴かず。秘書院卿社稷提調等を歴て、八年贊政に陞り、中樞院副議長を拜し、尋で内部大臣を拜す。累轉して宮内府特進官となり、明治四十三年日韓併合するや、男爵を授けらる。(文獻案)

**李容翊** 咸鏡道の人。李太王戊子南兵使たり。後鐵道司監督度支部典國局長を歴て久しく内藏院卿となり、礦務參政等の監督を兼ね、權中外を傾け、時に露國派の領袖を以て目せらる。光武八年軍部大臣尹雄烈上疏して其の五罪を擧げ、之を誅せんと欲せんや云々と。居ること幾くもなく容翊滯に日本に往く。一に言ふ容翊の日本に來遊せるは、韓帝の勳命もあり林公使の勸誘亦興りて力ありしが、其の日本に在るや頗る改圖の狀ありしが、明年春國に還るに及び、韓國を列國共同管理の下に置かんとする運動を起さんとし、擧げられて大邱の觀察使となる。幾くもなく沈相黨内閣成り、入りて軍部大臣となる。沈相黨去り、農商工部大臣朴齊純議政署理となるや、依然軍部大臣たりし

が朝野の攻撃を受け、終に軍部を辭し、江原道觀察使の命を拜す。容翊任に赴かず滯に仁川より上海に奔り、遂に上海に客死す。

**李容植** 字は稚萬。韓山の人。哲宗壬子(皇紀二五二二年)生れ、李太王乙亥文科に登り、説書檢閱より正言應教司諫承旨刑禮曹參判大司憲を歴て出で義州府尹開城留守に轉じ、乙未春川觀察使となり、議政府參贊を歴て贊政となり、壬寅議政尹容善の無能を劾し、鐵島に流配せらる。幾くもなく赦され還り、黃海道觀察使特進官學部大臣全北觀察使等を歴し、己酉李完用内閣に入りて學部大臣となり、日韓併合後子爵に叙せられ、總督府中樞院顧問經學院副提學を拜せしが、大正八年不逞鮮人に擁せられて獨立懸擧に加はり爵位を褫奪せらる。

**李容熙** 字は公晉。洪岡と號す。金正命權の子。李太王丁卯(皇紀二五二七年)地戎使を拜し、鎮撫使御營大將兵曹判書を歴踐し靖毅と號せらる。(金顯集)

**李根命** 字は舜九。全義の人。工曹判書時敏の子。李太王辛未文科に登り、翰林に入り、大司成吏曹參判義州府尹を歴て、乙未宮内府特進官と爲り、春川府觀察使秘書院卿議政府贊政を歴て内部大臣を拜し、光武七年弘文館學士より議政府議政に超拜し、七月疏遷し、十月再び議政を拜し、太醫院都提調を兼ね、領教事に移り、隆熙四年日韓併合するや、朝鮮貴族

に列せられ、子爵に陞せらる。

**李根淵** 初名根澤。全州の人。子爵根澤の弟。李太王十一年生る。二十九年進士に中り、初め軍部主事を拜し、内外を歴て秘書丞外部交渉局長法務局長宮内府協辦に至り、光武八年内藏院監督農商工部協辦帝室制度局議定官に周流し、九年日本特派大使隨員に差せられ、歸りて學部協辦となり、中樞院贊議禮式院卿制度局總裁尙北道觀察使に累遷し、宮内府大臣に陞り、十年中樞院副議長宮内府特進官となり、十一年侍從院卿となり内大臣を兼ね、宮内府特進官中樞院副議長に轉ず。明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙せられ、朝鮮總督府中樞院顧問を拜し、大正九年卒す。

**李根滿** 全州の人。根澤の兄なり。李太王戊寅部將を以て文科に登り、訓練判官金正別軍職左參領等を歴て、出で、中和府使となり、同副左副承旨寧邊府使中樞院議官等を歴し、光武二年警務使法務協辦となり、三年農商工部協辦に移り、四年復た法部協辦に任じ、法部大臣署理量地衙門總裁等を命ぜられ、忠南全南觀察使を歴て、七年議政府贊政を拜し、京畿監司特進官を歴て九年復た贊政となり、後復た京畿監司を拜し、法部大臣に陞り、慶北監司中樞院贊議侍從武官長、帝室制度局總裁帝室財政整理委員長等を歴踐し、明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙せらる。

**李根淵** 字は景集。甌西と號す。延安の人。用奎の子。李太王壬午(皇紀二五四二年)文科に登り、官左營使に至る。甲申金玉均の變に前營使韓主授、後營使尹泰駿等と與に禍を被る。左贊成を贈られ、忠貞と諡せらる。

**李軒翊** 字は容七。富平の人。監監演光の子。哲宗辛亥(皇紀二五二一年)生る。李太王甲戌文科に登り、官を累ねて禮曹參判に至り、乙未尙衣司長となり、建陽元年中樞院議官を拜し、奉常司提調を歴て光武三年特進官侍講院副詹事となり、五年京畿監司提調堂禮院少卿等に轉じ、八年咸鏡南道觀察使を拜す。(文獻案)

**李耕植** 韓山の人。善溥の子。李太王乙酉(皇紀二五四五年)文科に登り、歴官して宮内

大臣に至る。乙未の變に王妃閔氏の殞落せらるるや、耕植時に殿中に在りて同じ禍を被る。忠肅と諡せられ、議政府議政を贈らる。

**李夏榮** 字は致行。栗山と號す。慶州の人。哲宗戊午(皇紀二五二八年)生る。初め外務衙門主事より、正六品に陞り、尙瑞院主簿司憲府監察より、美國公使館書記官となり、全權大臣署理を命ぜられ、歸りて機器局主事兼川興德監を歴し、外務衙門參議に陞り、右副承宣會計院長漢城府觀察使に移り、建陽元年駐日全權公使を拜し、明年國に歸り、光武二年中樞院副議長に任じ、議長に陞り、三年議政府贊政を拜し、再び特命全權公使となりて日本に駐劄し、四年疏遷し、七年宮内府特進官に拜し、贊政外部大臣を歴て九年法務大臣となり、十一年遷して中樞院顧問に任ず。明治四十三年日韓併合するや子爵を授けられ、朝鮮總督府中樞院顧問となり、昭和四年卒す。年七十二。

**李起鵬** 初名昌鎬。字は景魯。全州の人。正言承奎の子。李太王甲子(皇紀二五二四年)文科に登り、翰林注書より、三司に出入し、司成典簿司僕正禮兵曹參議承旨を歴て、出で、靈光を俸し、刑曹參判に陞り吏曹參判副提學大司憲等を歴踐し、光武三年特進官を拜し、六年秘書丞より掌禮院を兼ね、禮卿に陞り、七年正憲に陞階す。(文獻案)

**李尙在** 字は季皓。月南と號す。韓山の人

【補遺七畫】李

哲宗元年生る。文藝風に就り、少にして日本を視察し、戊子米國公使館書記官を拜し、還りて典國局司事右副承旨學法兩部參書官等を歴て、議政府總務局長を拜す。戊戌徐載弼と異に獨立協會を組織して其の副會長となり、大に弊政の改革を呼號せしが、官憲の忌諱に觸れて屢々獄に繋り、竟に意を政治に絶ち、決然身を宗教界に投じ、爾來基督教青年會に在りて後進を誘掖するもの殆んど二十年、又朝鮮日報社長となり、社會事業に貢獻する所多し。昭和二年卒す。年七十八。(行狀年譜)

**李寅明** 字は新永。全州の人。兵判穆淵の子。哲宗戊午(皇紀二五〇八年)文科に登り、官禮曹判書に至る。李太王甲申變服密抽の令下るや、上疏して之を争ひ、職を罷められ、遂に實配せらる。隆熙四年孝獻と諡せらる。

**李乾夏** 字は大始。全州の人。晦淵の孫。憲宗乙未(皇紀二四九五年)生る。哲宗乙卯進士に中り、李太王元年文科に登り、副校理掌令等より、工兵曹參議大司成刑曹參議左承旨史曹參議成川府使に歴遷し、己卯副總管禮曹參判同知教寧を拜し、兵史曹參判より工曹判書に陞り、禮曹判書漢城判尹に移り、冬至上使を以て清國に赴き左右參贊を歴て、建陽元年出で公州觀察使となり、入りて中樞院議官太醫院卿秘書院卿となり、光武三年内部大臣を拜し、弘文館奎章閣學士量地衙門總裁に累遷

し者社に入り、判教寧府事を拜す。九年忠清南道觀察使となり、中樞院議長を歴、十年宮内府特選官を拜す。明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙せらる。(文島案)

**李義榮** 字は周叔。龍仁の人。都守源吉の子。純祖壬辰(皇紀二四九二年)生る。哲宗辛酉文科に登り、翰林に入り、歴官して工曹參議兵曹參知分承旨に至り、戊辰名を今名に改む。後兵刑參議漢城左右尹等を歴て、仁昌君に襲封す。兵曹參判副提學史曹參判大司憲禮曹參判に歴遷し、庚寅刑曹參判、辛卯工曹參判を歴、光武六年特選官掌禮院卿を拜す。(文島案)

**李致獻** 字は君弼。全義の人。禁營大將熙綱の子。李太王甲子(皇紀二五〇四年)總戎使別營使等を歴拜す。(全義案)

**李景宇** 初名景純。字は雲瑞。禁營大將鐵求の子。憲宗己酉(皇紀二五〇九年)御營大將を拜し、訓練大將總戎使判義禁を歴て輔國に陞る。(全義案)

**李景夏** 字は汝會。全州の人。經歷寅達の子。將区となり、位輔國に陞る。大院君の大に耶蘇教徒を殺戮するや、景夏捕將を以て、捕殺算なく、百姓救済す。家は蔚洞に在り、凡そ捕將の罪人を治すこと、必ず私第に於てす。故に民景夏を見ること、閭閻の如し。時に人を罵るに必ず蔚洞に墮落せんと稱す。(朝鮮政論)

**李景應** 字は良伯。山驛と號す。興宣大院君是應の仲兄なり。初め興宣君に封ぜらる。六年侍從院卿を拜す。(文島案)

等に叙せらる。李太王二十九年文科に登り、秘書郎侍讀官秘書丞を歴て、弘文副學となり、義陽都正を拜し、義陽君に進封せられ、宮内府特選官に任ず。光武六年特命大使を以て英國に赴き、英皇の戴冠式に列し、九年又特派大使と爲りて、日本に往き、職捷(奉天)を賀す。副將沈相薰・贊議閔泳諒等之が隨員たり。此年六月赤十字社を設くるや、命ぜられて總裁となる。十一年又特派大使(韓皇太子)となりて日本に報聘し、隆熙四年日韓の併合に際し、侯爵を授けらる。(文島案)

**李道宰** 字は聖一。延安の人。溟翼の子なり。憲宗戊申(皇紀二五〇八年)生る。李太王壬午文科に登り、甲午全羅監司たり。乙未學部大臣に陞り、農商工部大臣贊政平安北道觀察使外部大臣内部大臣を歴て侍從院卿を拜し、隆熙三年卒す。文貞と諡せらる。

**李源龜** 字は景元。龍仁の人。判書參鉉の子。憲宗壬寅(皇紀二五〇二年)生る。李太王丙寅文科に登り、翰林に入り、内外を歴て、甲申吏曹參判を拜し、乙酉副學となり、丁亥内務協辦と爲り、己丑大司憲を拜し、庚寅出で江原監司となり、辛卯成鏡監司に轉じ、大司憲刑兵兩曹參判を歴て建陽二年特選官を拜し、光武元年中樞院議官となり、副學秘書丞に轉じ、掌禮を兼ね、五年禮卿に陞り、景孝殿提調となり、正憲

に陞る。六年侍從院卿を拜す。(文島案)

**李應龜** 字は聖元。碧珍の人。縣令龍和の子。哲宗庚戌(皇紀二五〇一年)生る。李太王辛巳文科に登り、官を累ねて戸兵禮曹參判に至り、漢城左右尹を歴て、乙未太僕司長を拜し、建陽元年特選官秘書院丞となり、二年奉常司提調を拜し、光武元年會計院卿となり、四年洪陵提調を拜し、六年掌禮院卿を拜す。(文島案)

**李鳳九** 鳳山の人。湖奇の子。李太王壬午(皇紀二五〇四年)文科に登り、歴官して、參議に至り、甲申特に親軍別後營使となり工曹判書に轉ず。(全義案)

**李鳳儀** 全州の人。總察使景宇の子。武科出身し、諸官を経て捕盜大將總察使陸軍副將軍部大臣等に歴遷し、明治四十三年日韓併合するや、男爵を授けらる。

**李熙昇** 字は平汝。全義の人。兵使觀植の子。李太王乙亥(皇紀二五〇五年)總戎使を拜す。(全義案)

**李範晉** 字は聖三。全州の人。訓練大將景夏の子。李太王己卯(皇紀二五〇九年)文科に登り、大に王妃閔氏の寵を得て宮中に入し、閔妃殞落の後、深く外人に結託し建陽二年二月露國公使ウエベルと謀り、竟に王を露國公使館に誘出し、新内閣を組織し、法部大臣趙秉稷の農商工部に轉ずるや、後を受けて法部大臣となり、警務使を兼ね、幾くもなく出て美國全權公使となり、俄法奧德諸國駐劄を命ぜられ、日露戦後罷免せられて露佛の間に放浪し、

る。大院君に遇せられず。李太王十年政閔氏に歸するや、恩衛大將に擧げられ、明年左議政に陞り、又明年世子傳となり、李裕元の罷むるや代りて領相となり、壬午の變に害に遭ふ。年六十八。文忠と諡せらる。(最近世史・全義案)

**李載克** 全州の人。判書沈應の子。李太王元年(皇紀二五〇四年)生る。癸巳文科に登り秘書監秘書郎を歴て、王太子侍讀官校書掌禮等を歴て、光武元年奎章閣直閣副學秘書丞等に累遷し、三年議政府參贊となり、四年京畿觀察使を拜し、數官を歴て贊政に陞り、法部大臣を拜し、奎章閣學士平理院裁判長内部學部大臣全權公使に歴遷し、日韓併合するや、男爵を授けらる。(文島案)

**李載完** 字は舜七。石湖と號す。興完君應最の子。李太王乙亥(皇紀二五〇五年)文科に擧んで、丙子翰林に選まれ、吏曹參判弘文藝文提學判判大憲を歴て、辛卯吏曹判書を拜し、光武三年内部大臣に陞り、完順君に封ぜらる。九年十二月保護條約締結後報聘大使となりて日本に如き、隆熙元年陸軍副將となり、承寧府總管を拜し、四年日韓併合就り、朝鮮貴族令により侯爵の榮典を賜はる。(文島案)

**李載純** 字は德一。宗室永平君景應の系子なり。李太王戊辰(皇紀二五二八年)宗親庭試に登第し、侍從院卿等を歴て、宮内府大臣に陞り、光武三年清安君に封ぜられ、官て陽郡に出使し、勞績あるを以て勳一

終に異境に窮死せりと云ふ。光武十一年六月海牙に開かれし萬國平和會議に於ける所謂密使事件の一人たる李球鐘は其の子なり。(最近世史・併合史)

**李襄** 初の名は載冕。字は武卿。又石と號す。興宣大院君の第一男。憲宗十一年生る。哲宗十四年文科に登り、李太王元年奎章閣待教藝文館檢閱等の清要を履歷し次で成均館大司成吏曹參議弘文館副提學を歴、都承旨直提學知經筵を歴拜して、十七年兵曹判書世子左賓客となり、次で吏曹判書に遷り、十九年十二月清國保定府に往き、當時同地に淹滞中の大院君を訪問し、爾後同地に父君を省すること二度、二十二年八月父君に陪從して歸國せり。三十一年大院君の再び出で政事を視るや、輔國となり、宮内府大臣に任ぜられ三十七年完興君に冊封せらる。隆熙元年陸軍副將となり、報聘大使として日本に赴き、勳一等旭日桐花大綬章を贈進せらる。隆熙四年特に興王に封ぜられ、名を襄と改む。日韓併合に際し李王の懿親を以て特に公となし、皇族の禮遇を賜はり殿下と敬稱せらる。大正元年九月薨す。

**李鍾承** 字は總仙。全州の人。圭男の子。李太王丙子(皇紀二五三六年)禁營大將を拜す。(全義案)

**李顯讓** 字は伯術。慶州の人。兵使格の子。李太王乙丑(皇紀二五二五年)總戎使となり、御營大將統使に歴遷す。(全義案)

**李鍾永** 字は景度。全州の人。縣監命熙の曾



孫なり。憲宗丁酉(皇紀二四九七年)生る。李太王丁卯進士に中り、庚午登第し、玉堂憲府槐院に周流し、各曹參判を歴て工刑判書に陞り、乙未特進官を拜し、内部大臣に陞り、建陽元年出でて平南觀察使となり、二年奉常寺提調に移り、中樞院議官を拜し、參政に陞り、掌禮院卿を歴て正憲に進み、侍從院卿より贊政に陞り、光武八年慶尙北道觀察使となり、八年景孝殿提調を拜す。隆熙四年文貞と諡せらる。(文貞集)

**沈相憲** 字は舜歌。青松の人。應澤の子。哲宗甲寅(皇紀二五〇四年)生る。李太王甲戌文科に登り、度支軍部兩大臣等を歴て、官參政に至る。

**沈賢澤** 字は輝華。青松の人。進士宜隣の子。憲宗庚戌(皇紀二五〇〇年)文科に登り、李太王の朝議政を拜し、光武十年領教奉司事を以て特に青寧公に封ぜらる。此れ朝鮮にて生前公に封ぜらるゝの始なり。

**沈業臣** 字は士良。青松の人。兵使漢永の子。哲宗丁巳(皇紀二五〇七年)御營大將を拜し、摠戎使に轉ず。(金鑑錄)

**車京石** 一に京錫と稱す。全羅北道井邑に生る。年二十八時眇教主姜一淳に師事し一躍其の高弟となり、明治四十二年遂に其の教統を傳へらる。信徒等素と長生不死の神人として教主を信奉せしが、此歲教主の猝に病んで歿するに遇ひ、信仰忽ち冷却して四散する者續出せり。京石も亦深く疑念に陥りしが、猶ほ教主を追憶し、謬所を求めて冥想思索を續け、以て疑

圓を氷釋せんと努め、遂に一道の光明を認め、豁然として開悟し、即ち起て有教に従事し、新に一派を創めて仙道教と稱し、後普化教と改め、大正十一年更に普天教と改稱す。而して其の教義は一理・四綱・十二箴と云ひ、仁義と敬天とを其の根本教旨とし、一般教徒の禮拜には玉皇上帝下鑑之位又は九天下鑑之位、或は七星聖天下一鑑之位と書せる神位を用ひ、掲號して一椀の冷水を供へ、瞑目致誠して呪文を誦へ、以て所願の成就を祈る。一時教徒の數、數百萬と號するに至り、全鮮の都邑に支部を置き、井邑の本部は宏壯輪煥王侯の宮殿に擬するに至り、世號して車天子と稱す。昭和十一年卒す。年五十七。本教は其の行動詭秘に涉り、屢官憲の嫌疑を被りしが、京石歿後更に當局の大彈壓を受け、竟に潰滅の運命に至れり。(朝鮮の祖傳宗教)

【八畫】

**具完福** 字は蘭汝。綾城の人。秉一の子。李太王壬午(皇紀二四四二年)摠戎使禁營大將等を歴拜す。(金鑑錄)

**林珍珠** 字は子城。荷汀と號す。慶州の人。哲宗十二年辛酉生る。書に工なり。(其書徵)

**金大建** 京畿道龍仁縣の人。父濟俊は天主教の信者(キリスト)にして、憲宗五年己亥邪獄に遭ひ斬首せらる。是より先、憲宗二

年(百曆一八三六年)最初に入鮮せし佛人天主教宣教師モーバン(Morand, Philippe)の京城に来るや、三人の少年を遇ひ、澳門に於ける巴里外邦傳教會の神學校に之を送れり。大建も其の一人にして幼名を再福といひ、時に年十五歳なりき。彼は憲宗八年同地に於ける巴里外邦傳教會の命により佛人メイストル神父と共に入鮮を企てしも、時恰も己亥(五年)迫害の後に當り國禁嚴なるを以て容易に志を達すること能はざりしが、萬難を排し辛うじて國境を通過して義州に入り、十一年陽一月八日を以て京城に入ることを得たり。彼れ曩に澳門神學校に於て専門の教育を受け、拉典語・佛蘭西語等に精通し、教名をアンドレアと云へり。資性豪膽にして才幹人に抜んづるものあり。潛かに活動を開始し、同年八月再び上海に往きてフエレオール司教より神父に叙品せらる。朝鮮人信者にして此の地位を授けられたるは實に彼を以て嚆矢とす。彼は同年フエレオール司教・ダブルイ神父と共に海路より再び入鮮し、忠清道を根據として潛かに布教に従事せしが、十二年(百曆一八四六年)主教フエレオールの命により、宣教師の潜入に關する通信連絡を取らんが爲め、黃海道大青群島の白翎島附近に赴きたる際、邏卒の捕ふ所となりて京城に押送せられ、同年陽九月十六日漢江江畔沙南基に於て軍門鼻首に處せらる。時に年二十六なりき。(己亥日記、金大建)

【補遺八畫】金

**金允植** 字は洵卿。雲養と號す。清風の人。領相增九世孫なり。李太王乙丑進士に中り、甲戌文科に登り、弘文館副修撰順天府使を歴て、辛巳領撰使となりて天津に赴き、壬午還りて吏曹判書を拜し、江華留守に轉じ、工兵曹判書に移り、統理交涉通商事務衙門督辦を兼ね、乙酉全權大使として韓露條約に當りて功あり。甲午金安集内閣に入りて外部大臣となる。時恰も日清戰爭に當り、外務多事なりしが、能く機宜を誤らず。建陽元年金安集内閣倒れ、安集・魚允仲等虐殺せらるゝや、允植僅に身を以て免かる。明年閏妃事件の責任者として濟州に流され、辛丑智島に移配せらる。配に在るもの十年、光武十一年宥され還り、帝室制度局總裁會計監査院卿等を歴拜し、隆熙二年中樞院議長となり、四年日韓併合の議に參じ、子爵を授けらる。大正八年獨立騒擾事件に連罪し、竟に勳を褫奪せられ、九年一月卒す。年八十六。著はす所に雲養集あり當代の碩儒を以て文名藉々。日本學士會員に推薦せらる。(併合史)

章を觀察して感ずる所あり、時に韓庭閣族政柄を乘り、事大守舊、一に清國の後援を得んて、勢威を振ひ、國事の日に非なるを慨し、朴泳孝・洪英植・徐光範等と結んで獨立黨を組織し、日本に親善し其の制に倣ひて國政を改革し、宿弊を打破せんと欲す。明治十七年清佛疊を生じ清國の力を半島に專にするを得ざるに乘じ、一舉事大黨を倒し、新政を樹立せんと謀り、朴・洪等と與に同志を糾合し、遂に十二月四日京城郵便局開業式の宴に托して事を擧げ、直に闕に到りて國王を擁し事大黨の巨頭等を斃して、實權を掌握し、政府を改革せしが、忽ち清國駐屯軍の阻害する所となり、事敗れて日本に亡命す。朝鮮之を求むること急なり、逃れて小笠原島・北海道等に轉々し、姓名を岩田周作と稱し、後ち東京に居る。玉均已に日本に流寓するもの十年、日夜同志と與に回復の策を畫せしが、事志の如くなる能はず。焦慮煩悶、遂に力を清國に籍りて宿志を遂げんとするの意あり。此を以て遂に刺客の乘ずる所となり、明治二十六年三月上海に誘出せられ、於十八日其の旅館なる東和洋行の一室に於て刺客洪鍾宇の凶彈に斃さる。清國官憲却て鍾宇を庇護し、軍艦威遠をして玉均の死屍を搭載し、鍾宇を便乗せしめて本國に送還す。朝廷即ち逆律を追施し、楊花津に於て其の屍を六支の極刑に處す。明年甲午庶政一新し、徐光範法部大臣と

なるに及び、總理大臣金弘集と與に奏して其の罪名を濫濫し、官を復す。隆熙四年忠達と諡し、李章閣大提學を贈り、官を遣り祭を致す。(金玉均傳)

**金正浩** 一に正峰と作る。字は伯元(一に伯元)。古山子と號す。繁山即ち清道の系。黃海道に生るといふ。少より地理の學に没頭し、博く諸家の同志を搜攷研究し、純祖晚年青邱線表圖(國名を青邱)と云ふ新式地圖二冊を著し、爾後三十年の歲月を費し、所有る艱苦と職ひ、自ら全國を踏査し、遂に完全正確なる大東輿地圖を著し、哲宗十二年獨力を以て此を板刻刊行し、高宗元年之を再刊し、又同年大東地誌三十二卷共十五冊を著せり。此れ亦多年の踏査と考證を積んで、成れる大著と稱せらる。大東輿地圖は朝鮮の全領域を二十二層に横截し、離合自由なる折疊み式地圖にして、十里方眼を設けて距離の測定を容易ならしめ、最も正確なる朝鮮地圖として日清戰爭當時軍用地圖に代用せられ、今日尙ほ一種の歴史地圖として考古家の參考に資する所甚だ多し。世傳によれば正浩は後に京城西大門外に移住し、こゝに於て其の女と與に自ら地圖を板刻せり。又大院君の時此の地圖を獻じ、却て本國の機密を洩すものと疑はれ、刻板は押收燒棄せられ、正浩は獄に下りて遂に死す。時に年六十餘と。(李西淵氏其他)

銓の子なり。憲宗辛丑(皇紀二五〇一年)生る。哲宗戊午進士に中り、李太王壬申文科に登り、翰林に入り、校理、殿前、掌令、應教、兵曹、佐郎、司僕正を歴て、禮曹參判に陞り、承旨、大司成、吏議を歴て、禮曹參判となり、漢城右尹、吏曹參判より、丙戌刑曹判書に陞り、漢城判尹、刑禮吏曹判書を周流し、光武六年侍從院卿、宮内府特進官となり、隆熙四年耆社に入り、此歳日韓合併し、男爵に陞叙せらる。(文島案)

金承壽 字は福汝。荷亭と號す。光山の人。字銓の子。李太王庚午(皇紀二五三〇年)文科に登り、官大提學に至る。(全羅案)

金弘業 初名宏集。字は景能。道園と號す。慶州の人。參判、永府の子。慶恩府院君柱臣の五代孫なり。憲宗壬寅(皇紀二五〇二年)生る。李太王丁卯文科に登第し、翰林玉堂承旨、參判に歴官し、庚辰修信使を以て日本に使す。壬午(皇紀二五三〇年)の變後、李裕元と共に韓國全權となり、濟物浦條約を締結す。尋で京畿觀察使となり、甲申議政を擢んで、甲午(皇紀二五三七年)領議政に陞り、諸政を革新する所多し。總理大臣に改まる。丙申(皇紀二五三九年)親賢派勢を得、國王露國公使館に擢進するや、弘業變を聞いて、景福宮に至り、巡檢の捕ふる所となりて、慘殺せらる。隆熙四年諡を賜はりて忠獻と曰ひ、李章閣大提學を贈られ、官を遺りて祭を賜はる。

金有淵 字は元若。藥山と號す。延安の人。收使、諡の子。憲宗甲辰(皇紀二五〇四年)文科

金炳德 字は聖一。約山と號す。安東の人。領相、興根の子。純祖乙酉(皇紀二四八五年)生れ、憲宗丁未文科に登り、癸未大拜し、官左議政に至り、辛卯致仕し、年六十八にして卒す。文獻と號せらる。(全羅案)

金炳翼 字は聖存。思淵と號す。安東の人。領相、左根の子。憲宗丁未(皇紀二五〇七年)文科に登り、哲宗の朝再び德戎使を拜し、調練大將、禁營大將を歴て、輔國に陞り、官左贊成に至る。文獻と號せらる。(全羅案)

金春熙 慶州の人。參判、永爵の孫。哲宗乙卯(皇紀二五〇五年)生る。李太王癸未文科に登り、檢閱正言、應教、吏曹正郎、同副承旨、内務府參議を歴て、戊子大司成となり。己丑吏曹參議に轉じ、内務協辦吏曹參判、都承旨に累轉し、乙未學部協辦を拜し、隆熙元年宮内府特進官に任じ、承寧府侍從長を拜し、明治四十三年日韓合併と共に男爵に陞せられ、德壽宮贊侍と爲る。(文島案)

金思澤 延安の人。李朝公妃金氏の父なり。李太王辛巳進士に中り、義禁府都事、參奉、主簿、監郡守、秘書院丞中樞院議官を歴て、法部司理局長、内藏院卿に陞り、光武九年議政府贊政を拜し、隆熙元年宮内府特進官、李章閣祇候官となる。明治四十三年日韓合併と共に男爵を授けらる。

金思勳 字は子由。延安の人。同知、教事府事、觀秀の子なり。憲宗丁未(皇紀二五〇七年)生る。李太王戊寅文科に登り、弘文館應教、龍岡郡守、外務參議、善山府使、慶尙補衣等

に登り、李太王丙戌大拜して右相に至る。性硬直。嘗て藥院提調たりし時、大院君の子載冕、一黃姓なる者を囑して醫員と爲さんとす。金從はず。再三使を遣りて懇請せしが、金其の使を叱して之を還す。載冕甚だ不平を懷き大院君に告ぐ。君即ち金を遷して惠民署提調となし、宋近洙を以て藥院提調となし、遂に黃姓を醫員に補す。金其の故を知りて大に怒り、往て大院君に見えて責めて曰く、公一醫の囑托行はれざるの故を以て、宰相の職を還轉するは何事ぞや、小人骸骨を乞ひ、謹んで職名を奉還せんと欲すと。遂に袖中より辭表草稿を出す。君之を止めて其の然らざるを諭せしが、遂に職を辭して門を杜づるもの旬日。大院君人を遣りて過を謝し、金の意乃ち解けしと云ふ。卒年六十九。貞翼と號せらる。(朝鮮政史、全羅案)

金奎鎮 字は容三。海同と號す。南平の人。侍從、基範の子。官侍從院侍從に至り、昭和八年卒す。年六十四。書畫を善くし、墨竹に長じ、篆隸楷草共に超妙に稱り、屏障碑額の文字國中に過し。

金明奎 安東の人。炳龍の子。李太王乙酉(皇紀二五三五年)文科に登り、己丑駐津管理等を歴て、乙未正二品に陞り、農商工部大臣、學部大臣を歴す。

金宗漢 字は祖綱。游霞と號す。安東の人。吏曹判書、敬鎮の子。憲宗甲辰(皇紀二五〇四年)生る。李太王庚午進士に中り、丙子

文科に登り、弘文校理より承旨、吏曹參議、大司成、禮曹參判、副提學を歴遷し、甲午都承旨を拜し、禮曹判書、宮内府協辦大臣、署理侍從院侍講を歴て、光武四年出で成鏡南道觀察使となり、明年宮内府特進官に移り、隆熙三年判教、宰司事となり、秘書監卿、李章閣祇候官を歴拜す。明治四十三年日韓合併するや、男爵に陞叙せらる。(文島案)

金奎弘 字は華一。清風の人。學性の子。李太王甲子(皇紀二五二四年)文科に登り、官京畿監司、掌禮院卿、議政署理等を歴て、參政に至る。

金炳始 字は聖初。善庵と號す。安東の人。判書、應根の子。哲宗乙卯(皇紀二五二五年)文科に登り、李太王甲申獨立黨の變後、右議政を拜す。甲午六月沈舜澤、金弘業等と共に校正廳總裁官となり、次で中樞院議長となる。乙未黨變令下るや、特進官を以て上疏、諫せしが納れられず。建陽元年王露國公使館播遷し、露國黨の内閣組織せらるるや、再び入りて議政と爲る。諡を忠文と曰ふ。

金炳翊 字は左翊。安東の人。吏曹判書、大根の子。憲宗丁酉(皇紀二四九七年)生る。哲宗庚申文科に登り、華要を歴敷し、李太王壬辰漢城判尹、刑曹判書等に周流し、太醫院卿、中樞院議官、宮内府特進官、秘書院卿、侍從院卿に歴遷し、耆社に入る。明治四十三年日韓合併するや、男爵に陞叙せらる。(文島案)

府特進官、中樞院議長等を歴て、光武八年議政府贊政となり、復た農商工部大臣となり、法部に轉じ、又忠清南道觀察使を歴、隆熙二年大韓協會長となる。書名あり。明治四十三年日韓合併するや、男爵に陞叙せらる。然れども快々として樂まざる、家道零落し、大正八年遂に不逞鮮人の間に投じ、滯に上海に走り、同地に客死す。

金濬 字は景明。蒙隱と號す。江陵の人。進士に中る。業を良齋田愚の門に受け、其の高弟と爲る。(朝鮮名臣傳)

金興鎮 字は景召。安東の人。參奉、道均の子。憲宗癸卯(皇紀二五〇三年)生る。哲宗庚申文科に登り、宗親府執事、司果、典籍を歴て、弘文館に入り、掌令、持平、執義、樂正、司成等を歴拜し、戶刑兵吏曹參議、漢城左右尹、刑曹判書に陞り、廣州留使、統製使を歴て、建陽元年特進官となり、秘書院卿、掌禮院卿、貴族院卿等を歴て、光武七年判教、宰府事となる。(文島案)

金興濟 西山と號す。義城の人。鶴峯、誠一の後孫なり。李太王の朝、遺逸を以て持平を授かり、官承旨に至る。文集若干卷あり。(朝鮮史)

金應元 小湖と號す。哲宗六年乙卯生る。卒年六十七。畫蘭に巧に、又諫行を善くす。(朝鮮史)

金登根 字は仲遠。海士と號す。安東の人。判書、瀛淳の子。憲宗乙未(皇紀二四九五年)生

を歴て、辦理公使となりて日本に駐劄し、刑曹參判、漢城左右尹、兵工吏曹參判、都承旨等に歴遷し、乙未秘書院丞となり、建陽元年宮内府特進官を拜し、掌禮院太醫院卿を歴て、八年議政府贊政に陞り、李章閣提學を拜す。明治四十三年日韓合併するや、男爵に陞叙せらる。(文島案)

金善弼 字は仲弼。安東の人。學基の子。李太王辛未(皇紀二五三一年)鎮撫使に任ず。

金綺秀 字は季芝。蒼山と號す。延安の人。李太王十二年文科に登り、明年江華條約の後、通信使を以て日本に報聘す。此を近世日鮮交渉の始となす。官參判に至り、筆名あり。(朝鮮名臣傳)

金箕錫 字は聖極。光山の人。兵使、相順の子。李太王丙子(皇紀二五三六年)御營大將を拜し、德戎使、統使、江都留使、禁營大將、右營別營等を歴拜し、貞武と號せらる。

金嘉鎮 東嶽と號す。安東の人。禮曹判書、應均の子。憲宗丙午(皇紀二五〇六年)生る。李太王乙丑李章閣檢書官に遷まれ、刑曹佐郎、宣内務府主事に累遷し、丙戌文科に登り、弘文館に入りて副修撰となり、丁亥駐劄日本公使館參贊官を拜し、掌令、司僕寺正、同副承旨を歴て、日本辦事大臣に任じ、東京に駐劄するもの數歳、歸りて參議、内務府主事、麗州牧、安東大都護府使、兵吏曹參判より工曹判書に陞り、乙未農商工部大臣となる。爾後黃海道觀察使、宮内

哲宗辛酉文科に登り、翰林玉堂都承旨を歴て、出て全羅監司となり、吏曹參判内務督辦吏禮兩曹判書に歴進し、甲午東學黨の亂に再び全羅監司を拜し、光武二年宮内府特選官より議政府參政に陞り、五年掌議院議政府贊政李弘文學士を歴、六年度支部大臣を拜す。筆法雄健を以て名あり。明治四十三年日韓併合するや、子爵に陞叙せらる。年八十四にして卒す。(文島集)

金鴻陸 咸鏡道の人。露語を著くするを以て用ひられ、李太王の露館播遷後、秘書院丞に擧げられ、露館内に在りて専ら王と露國公使との通譯に當り、大に王の寵遇を蒙り、後ち貴族院卿に任ぜられ、頗る威勢を張りしが、後ち通譯の國に不利なるものありしこと露は、光武二年陰七月黒山島に流配せらる。未だ發せざるに先だち、王の滿壽節に際し、典膳司主事洪孔植なるものをして毒藥を茶中に投じて以て進めしが、事露はれて絞に處せられ其の死屍は通衢に曳かれ、衆民の石擧刃刺する所となる。(朝鮮史)

金鶴嶺 字は聖天。後夢と號す。安東の人。吏曹判書炳喬の孫。憲宗戊戌(皇紀二四九八年)生る。哲宗辛酉進士に中り、李太王辛未文科に登り、檢閱校理より同副承旨戸曹參議外務衙門參議吏曹參議大司成漢城左尹吏曹參判等を歴踐し、甲午都承旨を拜し、刑工曹を歴判し、出て全羅監司となり、尋で兵曹判書に陞し、光武三年

弘文館學士を拜し、宮内府特選官となり侍從院卿太醫院卿を歴て、十年弘文館太學士となり、明年善社に入る。明治四十三年日韓併合するや、男爵に陞叙せらる。(文島集)

【九畫】

俞吉淵 短堂と號す。杞溪の人。李太王庚辰(明治十三年)年二十三、東京に遊學し、慶應義塾に入り、居ること數年、米國に赴き、ワシントン、ボストン等の大學に學び、業を終へて後、歐州各國を巡遊して國に歸る。時恰も甲申の政變を経て、親日の嫌疑者一網打盡の時に際し、當路の疑ふ所となり、捕盜大將に召喚せられ一命既に危かりしが、幸に趙秉夏・李喬翼の兩人、時の顯官閔應植に説き、爲に幸に死を免かれ、捕將韓圭萬の家に幽閉せらるること約半歳。更に白鹿洞に移され、拘囚せらるるもの六年。壁紙を剥いで西遊見聞記を編纂し、以て憤鬱の懷を洩せり。時にペインと稱する一外人、十四萬圓を以て電氣應用に關する有ゆる權利を永久に買収せんことを當局に交渉せしが、其の交渉文書を當路官吏に解する者無かりし爲め、即ち吉淵をして此を翻譯せしめ、且つ回答文書を作成するを得たり。時に吉淵は無限の富源を一外人に奪はれんとするを憤し、上書建白して、事漸く發むを得たり。功に因て其の罪を免

ざられ、壬辰十一月禁を解かれて家に歸る。甲午の革新に當り内閣書記官長となり、獻策する所皆採納せられ、政務の改革を圖り、軍國機務處に在りて參畫し、又外國公使と折衝の任に當り、此の年十月報聘使義和宮に隨ひて日本に往き、歸りて金宏集内閣に入りて内部大臣となり、乙未冬國王露國公使館に播遷し、金宏集内閣瓦解するや、難を日本に避け、居ること十一年、隆熙元年國に歸りて民間と稱する政黨を組織せしが、爾後政界を脱し漢城府民會長となり、殖産興業に務め、明治四十三年日韓併合するや男爵に叙せられしが、之を辭せり。

南廷哲 霞山と號す。宜寧の人。縣監弘重の子。憲宗庚子(皇紀二五〇〇年)生る。李太王壬午文科に登り、南學教授掌令より禮戶工曹參議駐津參贊官吏曹參議を歴て、刑戶曹參判漢城右尹より、平安監司となり、己丑大憲を拜し、庚寅外部協辦を拜し、禮曹判書漢城判尹等を歴て、建陽元年咸北監司となり、贊政に陞り、内部大臣となり、弘文學士中樞院議官を兼ね、宮内府特選官太醫院卿李景濤提調等に累遷し、光武己酉善社に入る。明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙せらる。(文島集)

南尚敦 雨村と號す。宜寧の人。履佑の子。進士に中り、官牧使に止まり、同敦寧に陞り文名あり。天主教徒たりしを以て李太王三年子鍾三と共に刑戮せらる。著に

す所に雨村詩集一卷あり、家に藏す。

(基督教及外交史)

南鍾三 天主教徒なり。官承旨。李太王三年鍾三、洪鳳周・李身達及び宮内乳母朴姓女等と共に天主教を崇奉し、潛に佛國宣教師張敬一(張元)を鳳周の家に延く。時に會ま露國人慶興に來りて通商を求む。鍾三等大院君に勸むるに英佛に結んで露國を防ぐの策を以てす。大院君作り許し、心腹を遣りて其の外國人を藏匿するを偵知し、命じて鍾三・鳳周・身達等及び佛人宣教師を逮へて之を斬る。鍾三時に年五十。遂に佛國人の潛に來りて宣歎する者を探索し、各地方をして照捕せしめ、捕へられて斬殺せらる。者九人。又國內信徒の戮せらるるもの數萬人と稱す。是れ佛經來興の因をなせり。

姜一澤 霞山と號す。父は興周。母は權氏。李太王八年(明治四年)全羅北道非邑郡に生れ、容貌圓滿、性質寬厚、聰明慧識人に過ぐ。幼にして書塾に入り、弱冠にして造詣已に深く、儒林に聲望あり。常に世道人心の弛緩せるを憤し、二十四歳餘にして東學を學ぶ。時に古阜の豪族全奉準東學黨を率ゐて亂を作す。一澤其の必ず敗るべきを察して之に參らず。亂後人心の益不安に陥るを見、自ら之を救済せんと欲し、專心儒佛仙陰陽雜錄の書を撰述し、年二十七遊歴の途に上り、全羅忠清より足跡八道に及び、旁ら卜筮醫藥の術を採窮し、至る所病患を救ひ、神人の稱を博

し、三十歳にして郷に歸る。然れども疑念未だ釋けず。明年全州母岳山大願寺に至り、精進祈念すること七日、豁然として大悟する所あり。即ち神化一心・仁義相生・去病解怨・修天仙境の四綱領を樹て、一種の呪文を誦して布教に従事し、呪文に吟詠吟嘯と誦ふるを以て世之を呼ぶ者ば驚き、無病者は強健となり、諸願成就すと稱し、近郷歸依する者多く、醫藥卜筮の術を併せ施し、效驗顯著なりしを以て、教勢益擴張し、全州の金亨烈・井邑の車京石等の徒多く其の門下に參ぜしが、明治四十二年病んで歿す。年僅に三十九。教徒等も長生不死の神人を以て一澤を信ぜしが、此に至りて疑を生じ、續々四散し、會葬するもの十數人に過ぎず。然れども其の高弟たりし車京石・金亨烈等猶ほ之を追慕し、更に精進思樂の結果別に各教派を開き、一時太乙教・普天教等十數派の簇立を見るに至れり。

(朝鮮の顯宗實錄)

姜老 字は期中。貞隱と號す。晉州の人。癸九の子。憲宗戊申(皇紀二五〇八年)文科に登り、李太王壬申右相に陞り、己卯致仕す。卒年七十八。(文島集)

柳厚祚 字は載可。嶺梅と號す。豐山の人。都正時春の子。哲宗戊午(皇紀二五二八年)文科に登り、李太王丙寅右相に陞る。文憲と號せらる。(文島集)

至り、甲午京畿監司を拜し、廣州留守に轉じ、罷黜せられ尋で知中樞院事となり...

洪啓龍 南陽の人。李太王甲午(皇紀二五五四年)三月東學黨の亂を湖南に作すや、啓龍命ぜられて兩湖招討使と爲り、壯衛營の兵を率ひて往て之を討ち、五月賊徒を討平し全州城を收復し、捷を以て聞す。

洪鳳周 天主教徒なり。父は粹英。母は丁氏。母の父は若鉉。即ち丁若鏞の伯兄なり。

孫秉熙 義庵と號す。天道教第三世教主と稱す。本と忠清道の人。東學第二世教主崔時亨に師事し、龜菴金演局、松菴孫天民等と共に教徒の領袖たり。

を遣りて悉く一味を拿へて之を刑殺し、遂に大に國內に令して搜捕せしめ、洋人宣教師の殺害せらるもの九人、教徒の戮せらるもの數萬と稱す。宣教師の一人李德兒(ルイ)は逃れて長淵より密に海に泛んで芝罘に着し、直に天津に至り、佛國水師提督魯勢(ロー)に訴へ、遂に佛艦の來襲を見るに至れり。

勢力あるを知りて續々其の傘下に奔りて一進會員として遂に全道の會員一百萬を稱するに至れり。日韓併合後一進會の解散せらるや、多數幹部及び會員の志を得ざる者、漸次孫秉熙の下に復歸し、一部は金演局の下に奔り、爾來十年ならずして孫の傘下に集る者又一百萬を算し、一大宗教團體を形成するに至れり。

【十一畫】

徐堂輔 字は季育。茶史と號す。達城の人有教の子。翼宗丁亥(皇紀二四八七年)生員に中り、憲宗甲辰文科に登り、李太王辛巳大拜して領議政に至り、癸未卒す。年七十八。文簡と號せらる。(金簡傳)

徐載弼 大邱の人。徐光範の孫なり。李太王甲申の變に金玉均の黨を以て、與に日本に亡命し、爾後米國に遊び、歸化して名をドクトル、ヂェーンソン(Dr. Jaiso-ten)と稱し、名を外人間に知らる。

崔時亨 海月と號す。慶州の人。李太王元年東學の教祖崔濟愚の刑死するや、其の後を繼ぎて第二世教主となり、竊に布教に従事し、其の教南鮮地方一帯に廣まり教徒の數、一時十萬と號す。李太王三十年教徒等教祖の冤を伸べんと欲し、上京して賊を闕下に早せしが、精神儒生等崔時亨を斬らんとせしが、崔神備等が走り、仍て黨を聚めて兩湖の間に據り、城を築き旗を立て遠近響應し、其の勢漸く大なり。朝廷護軍魚允中を遣りて宣撫せしめ、其の徒稍散す。明年三月古阜の民、郡守趙秉甲の虐政によりて亂を起す。朝廷長興府使李容泰を以て按察使として鎮撫せしめんとせしが、容泰病と稱して遑遑し、又勢に乗じて民財を擄奪せしを以て反て騷擾を激致し、古阜の豪農全率なる者、東學黨の魁首を以て時に乘じて煽惑し、其勢又張る。時に崔時亨は湖西の報恩郡に在り、孫秉熙は清州郡に在り、李昌九は洪州郡に在り、朴徳七は禮山郡に在りて各一包を組成し、大なる者は萬餘人、小なる者は六七千。包に各接主、接司等の名稱あり。除暴救民を標榜し、斥洋斥倭を假借聲明し、或は官吏を殺し、人財を掠奪し、各地の亂風を望んで暴動し、舉國騷然たり。朝廷將官洪啓

を以て兩湖招討使と爲し、兵を率ひて往て之を討せしめしが、賊勢猖獗にして官軍諸所に敗績し、賊進んで全州に迫るや、前監司金文鉉城を棄て、走り、遂に賊の據る所となる。是に於て朝廷密に救援を清國に請ひ、清兵を引て全州を收復せしが、遂に日清戰爭の端を爲すが至れり。時亨は其の後原州に潛伏せしが、光武二年(皇紀二五五八年)捕へられて京師に絞らる。年七十。或は言ふ、全率率の兵を起すや、時亨は其の直接教化せし徒弟と與に暴徒の群に参加せざりしのみならず、其の高弟孫秉熙を全率率の許に遣はし、教徒の本領に背くを責めしと云ふ。光武十一年教祖と與に其の罪籍を削らる(最近世史)

眞靈君 姓は李氏。李太王時の老巫女なり。副帝聖君の靈我に降ると稱し、眞靈君と號す。宮禁に出入し、頗る閭后に崇信せられ、權を弄し事を用ひ、乾兒無數、方伯守宰も多し其の袖中に出づ。閭后を説て崇洞の北廟を親めて此に居り、求官祈福の徒其の門に奔り、一時絶大の權力を揮へり。次で嚴妃の時に眞靈君なる者あり、尹姓女又内寵を得て二宮洞に西廟を創め、李尹の後に壽蓮なる者あり、宮掖に出入して祈福獲災し、其の二子皆高官

て之を倣倣せんことを請ひ、明年六月、前郡守林炳燾と兵を起し、泰仁より井邑潭陽を歴て、入りて淳昌に據る。衆四百餘。全羅北道觀察使韓昌内部に兵を派して之を鎮壓せんを請ふ。是に於て韓國駐劄軍全州光州地方隊と兵を連ねて撃て之を敗り、益鉉・炳燾へられて京に押送せられ、平理院に拘せらる。八月對馬島に流され、疾んで諺中に卒す。返葬に臨み遺骸を治めて炳燾に付し、返葬に當り、沿路人士靈柩を護衛し、號哭して葬す。(皇後對使誌)

崔錫維 慶州の人。哲宗戊午(皇紀二五〇八年)生る。李太王甲午議政府主事に除し、乙未内閣主事平壤參書記官等を拜し、出で通津洪原始興郡守と爲り、光武九年法部民事局長に陞り、内部警務長同地方局長を歴て、内部協辦となり、隆熙元年中樞院贊議京畿觀察使經理院卿内議院卿を歴拜す。明治四十三年日韓併合するや男爵に陞叙せらる。

崔濟愚 幼名は福述。水雲齋と號す。慶州見谷面何亭里の人。初め慶州、蔚山地方を徘徊し、木綿行商を以て業とせしが、忽ち一日致誠の結果、天に通ぜりといひ呪文を唱へ、我が教を信する者は災禍を免かれ、福壽を得と宣傳し、民衆の之を信する者日に多し。時に西教(天主)漸く朝鮮に侵漸し、哲宗の朝禁歴の強ふに乗じ、益々延の勢あり。是に於て濟愚は哲宗辛酉十二月(改改)布德文を製して之を

四方に頒ちて曰く、我が古俗舊慣を破壊する西教の流布は國を失ひ民を滅するものなり、然るに儒教の力之を防遏する能はず、因て自ら之に當るものなり。即ち西教に對して此を東學と稱せり。其の教義は儒佛道三者を折衷組成したるものにして、其の説く所平易簡明、頗る時勢人心に適せしを以て廣く四方に傳播せり。而して其の最も隆盛なりしは全羅慶尙忠清の諸道にして、殊に全羅道は開宗の地なるを以て殆んど全羅風俗の勢ありたるが如し。其の信者は毎夜必ず淨水を神に捧げて輔國安民を祈り、毎日飯を炊くに必ず、白米一匙を減じ、之を誠米と稱して教主の供と爲し、教主を仰ひて神師と稱し、其の一令の下水火を辭せざるものあり。時の政府は之を異端邪說と爲し、哲宗末年濟愚を捕へて大邱の獄に囚し、翌李太王元年死刑に處せらる。時に年四十一。之を天道教第一世の祖と爲す。弟子崔時亨其の後を繼ぎ、第二世教主として廟に布教に従事し、時亨死刑の後其の弟子孫秉熙繼で第三世教主となれり。(最近世史 韓學編)

張志淵 字は舜熙。章庵と號す。亦嵩陽山人と曰ふ。玉山の人。旅軒顯光の後。李太王元年(皇紀二五〇四年)尙州に生る。幼より聰穎甲午進士に中る。嘗て内閣郎となり、通政に至りしが、官を辭して泉城新聞社長となり、時事を論議して獄に拘せられ、旋て釋さる。又尹孝定等と大韓自

張錫周 舊名は博。咸鏡北道鏡城の人。少にして經史子集に通じ、李太王壬午徵されて上京し、明年統理衙門博文局に入り當時の半官報漢城旬報主筆となり、文名大に揚る。甲申博文局司事交涉衙門主事に任じ、事に由りて罷め、甲午法務衙門參議を拜し、局長に進み、明年協辦に陞り、大臣に擢んで、金安集内閣に入る。乙未の變に遭ひ續義淵等と共に日本に亡命し、居るもの前後十三年。隆熙元年罪名を濫濫せられて國に歸り、宮内府特進官を拜し、三年帝室會計監院卿に任ず。明治四十三年日韓併合するや男爵に陞叙せられ、朝鮮總督府中樞院顧問を拜し、大正九年卒す。

張錫龍 初名錫達。後錫龍と改む。字は雲伯。遊軒と號す。仁同の人。旅軒顯光八代の孫なり。憲宗丙午(皇紀二五〇六年)文科に登り、官判書に至る。光武七年弘文館學士を授けらる。錫龍時に年八十餘、歸臥して第に在り。上疏して職を辭し、因りて其の先祖顯光進奏の嘉言を抄録し、尾附して以て進む。王優答し、左右に置きて以て省覽を表す。諡を文憲と曰ふ。

郭鍾錫 俊愚と號す。玄風の人。李太王の時遺逸を以て中樞院議官を授かり、議政府贊政に超拜し、累に召命を蒙り、遂に入對して四條の時務を敷奏し、病を以て歸郷を上りて歸る。

魚允中 字は聖執。一齋と號す。咸從の人の子なり。憲宗戊申(皇紀二五〇八年)生る。李太王辛未文科に登り、清要に歴進して承旨參判に至る。朴定陽・洪英植等と共に日本に遊び、親しく其の文物を觀察して還る。癸未西北經略使となり、往て清俄交界の地を定む。癸巳東學黨亂を兩湖に起すや、宣撫使に差せられ、諭を宣して其の徒を散す。乙未(皇紀二五〇八年)沈相黨に代りて度支部大臣となる。時に親露派勢を得、隱謀至らざる所無く、明年王を露國公使館に播遷し、總理金弘集害に遭ふ。允中逃れて郷第に歸らんとし、遂に龍仁に至りて害せらる。隆熙四年諡して忠肅と曰ひ、奎章閣大提學を贈り、官を遺りて祭を致す。

魚允迪 字は釋德。惠齋と號す。殷栗の人の子なり。李太王五年(皇紀二五〇三年)生る。早く日本留學を命ぜられ、歸りて諸官を歴て、内閣編輯局長に至り、日韓併合後、總督府中樞院に入りて副參議參議と爲り、朝鮮史編纂委員・京城帝國大學法文學部講師・大東新文會長等を兼ね、昭和二年京畿參議官となり、十年卒す。年六十八。著はす所の東史年表、朝鮮陸軍備置年表世に行

【十一畫】

閔升錫 字は復卿。麗興の人。致祿の嗣子。李太王妃閔氏の兄なり。純祖庚寅(皇紀二四九〇年)生る。李太王元年文科に登り、三年閔氏冊せられて宮に入るや、粹に貴顯に陞り、大院君の隱退するや、王妃を輔けて國政に參與し、時の勢道と爲る。一日其の家に一小箱を贈る者あり。粧飾美にして外觀巧緻なり。仍ち之を聞くに轟然として爆發し、升錫父子共に母親即座に慘死す。明年前兵使申均なる者、之が嫌疑者として逮捕せられ、拷問數日にして刑せらる。(韓學編)

閔台鶴 字は景平。杓庭と號す。麗興の人致三の子。鳳棲命華煥の門人なり。純祖甲午(皇紀二四九四年)生る。李太王七年文科に登り、顯要を歴進し、德戎使御營大將武衛都統使大提學等に陞り、王家の外戚を以て勢威隆赫たりしが、二十一年金玉均等の變に閔泳穆・趙寧夏等と共に殺さる。忠文と諡せらる。

閔泳雨 初名泳柱。麗興の人。參議致友の孫。憲宗丙午(皇紀二五〇六年)生る。進士に中り、丁亥文科に登り、典籍より應教司成檢評舍人榮正等を歴て、執義司諫となり、壬辰禮曹參議吏議刑議を歴て禮戶工兵刑參判内務協辦に周流し、建陽元年中樞院議官となり、二年特進官より學務協

閔泳臺 字は景五。麗興の人。結縉の子。李太王十二年文科に登り、注書を拜し、說書修撰奉令校理應教を歴て、副承旨に陞り、内外を歴進し、刑判判書禮判漢城判判判書判書京畿監司兵曹判書等を歴て、丁酉宮内府大臣を拜し、丙午議政府議政に陞り、尋で各同都提調を歴進し、明治四十三年日韓併合するや、子爵に叙せらる。

閔泳翹 字は遇鴻。芸相・竹相、閔丁等の號あり。麗興の人。台鶴の子。哲宗庚申(皇紀二五二〇年)生れ、出で判書升錫の後と爲り、李太王丁丑文科に登り、清顯を歴て、癸未出でて美國全權大臣となり、甲申右營使軍國機務衙門協辦等を歴拜し、金玉均の亂に刺客の刺す所となりしが、幸に死せず。乙酉兵曹判書漢城判判となり、爾後吏刑禮曹判書判書等々を歴進し、光武二年贊政を拜し、輔國に陞る。日露戰後上海に奔り、終に同處に卒す。(又高宗)

閔泳詰 初名泳敏。麗興の人。校理善編の子。李太王元年(皇紀二五〇三年)生る。乙酉文科に登り、翰林說書弘文正字注書應教執義承旨禮兵史曹參議漢城左右尹禮戶刑三曹參判を歴て、乙未特進官を拜し、建陽元年黃海觀察使となり、全羅北道觀察使に轉じ、警務協辦兼直提學等を歴て、

參贊に陞り、五年會計檢査總長を拜し、秘書院卿を兼ね、惠民署總裁弘文學士を歴て、六年軍部大臣と爲り、陸軍副將軍務總長鐵路總裁等を歴拜す。(文庫)

**閔漢煥** 字は文若。桂庭と號す。麗州の人。兵曹判書謙鎬の子。李太王戊寅(皇紀三五三八年)文科に登り、美國公使を歴て、建陽元年露國皇帝戴冠式に特派せられ、軍部大臣より英德俄美法奧各國全權を命ぜられ、二年九月還りて復命す。沐浴始めて洋服を服す。出使人の變服此より始まる。參政に陞り、四年勳章條例の始めて頒布せらるや、外洋に出使し、屢次勞有る以て勳一等に叙せらる。軍法校正總裁學部大臣等を歴て、九年(明治三十八年)侍從武官長を以て、特選官趙秉世等と共に第二日韓協約に反對し、遂に自刃して卒す。時に年四十五。議政府議政を贈られ、忠正と號せられ、祭を賜はり、閔に旌せらる。

**閔漢達** 菴堂と號す。麗興の人。郡守觀鎬の子。哲宗己未(皇紀二五一九年)生る。李太王乙酉文科に登り、官を累ねて刑禮曹判書左右參贊に至り、甲午戸曹判書より内務大臣に陞り、乙未閔妃殞落の後、意を世事に絶ち、吟詠閑を樂み、明治四十三年日韓併合するや、男爵に陞叙せしが、之を辭せり。(文庫)

**閔漢縉** 蒲庵と號す。麗興の人。峻鎬の子。哲宗戊午(皇紀二五二八年)生る。後嶺山瑞山李太王癸未雲峯縣監と爲り、武嶺山瑞山南陽を歴興し、建陽元年軍部協辦軍部大臣署理となり、建陽二年署理を解き、警務使を兼任し、光武二年京畿觀察使となり、尋いで副將を以て軍部大臣となり、度支部大臣農商工部大臣を歴、三年事によりて流配せられ、後赦されて郷に歸り、八年軍部大臣となり、九年朴齊純内閣に入りて度支部大臣を拜し、隆熙二年東洋拓植會社創立の時副總裁となる。明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙せられ、中樞院顧問となる。大正十二年李王職長官となり、昭和二年卒す。

**閔漢韶** 字は舜若。麗興の人。右相奎鎬の子。哲宗壬子(皇紀二五二二年)生る。李太王戊寅文科に登り、待教院書令應教戸議史議を歴て、乙酉分兵曹參知より、出で春川府使となり、吏工戸曹判書直提學を歴し、刑史禮兵曹判書漢城判書を周流し、輔國に陞り、光武三年奎章閣學士量地衙門總裁官となり、光武五年學部大臣となり、明年宮内府大臣に移り、八年農商工部大臣となり、中樞院に入りて議長と爲る。明治四十三年日韓併合するや、子爵に陞叙せらる。(文庫)

**閔漢儼** 初名泳駿。字は君八。荷汀と號す。判教院院事斗鎬の子。哲宗壬子(皇紀二五二二年)生る。李太王丁丑文科に登り、都承旨直提學、平安監司各曹判書參贊贊成等を歴て、官侍從院卿兼内大臣に至る。表動院總裁奎章閣副總裁官に移り、明治四十三年日韓併合するや、子爵に叙せられ、昭和十年卒す。理財に長じ、鉅富を以て

稱せられ、産業教育等の事業に貢獻する所多し。

**閔漢璣** 又泳琦と稱す。字は奇玉。麗興府院君台鎬の嗣子なり。李太王庚寅(皇紀二五五〇年)文科に登り、檢閱應教承旨宮内府協辦同知教寧を歴て、光武八年禮式院副長を以て報聘大使の隨員となりて日本に往き、歸りて教官を歴、議政府贊成より太醫院卿に轉じ、十一年趙東潤等十五人と與に命を受けて再び日本に往き、各官廳の行政事務を觀察し、掌禮院卿知教寧を拜し、明治四十三年日韓併合するや、伯爵を授けらる。

**閔漢縉** 字は遠縉。麗興の人。泰鎬の子。李太王辛未(皇紀二五三二年)文科に登り、吏曹判書判教寧府事に至り、甲申金玉均の變に閔台鎬等と共に殺さる。

**閔宗植** 字は允朝。麗州の人。判書泳商の子なり。李太王壬午(皇紀二五四二年)文科に登り、官參判に至り、後退て忠清南道定山に居り、隱然として朝野に聲望あり。光武九年日韓新協約成るや之に反對し、陰に同志を糾合し、明年五月兵を湖西に起し、入りて洪州に據る。衆五百餘人。自ら義軍と稱し、城邑に盤據し、勢甚だ猖獗なり。警察及び憲兵隊累次鎮壓に力めたるも意の如くならず。此に於て韓國駐劄軍司令部遂に兵を發し、撃て之を破り、被虜八十二人、殺傷甚だ多し。宗植及び前直閣金商應等夜逃る。後宗植は公州郡前參判李南珪の家に於て捕へられ、明

年平理院に於て死刑に處せられしが、法部大臣李夏榮の請により、一等を減じて珍島に流さる。次で十二月特赦を以て釋放せらる。(皇廷討伐誌)

**閔炳植** 麗興の人。哲宗己未(皇紀二五一九年)生れ、壬午別駕を被り、尋で第を賜はり宣傳官に叙し、訓錄副正嶺山府使内禁將兵曹參議曹司五衛將等を歴、出で宣川防禦使全羅右水使全羅兵使に歴遷し、兵工曹參判三道統制使中樞院議官を周流し、光武八年議政府贊成に陞り、罷めて宮内府特選官となり、陸軍副將中樞院副議長を歴て十年元帥府參謀官を拜し、明治四十三年日韓併合するや、男爵に陞叙せらる。

**閔商龜** 麗興の人。致惠の子。李太王七年生る。少にして米國に遊學するもの多年辛卯增廣試に登り、司諫執義僕正司成戸刑禮議官内府參書官濟用院長を歴て、建陽元年外部交渉局長中樞院議官學部並に農商工協辦となり、二年英德俄義法奧公使館參書官に任じ、明年八月還り歸り、光武二年中樞院議官を拜し、農商工部外部學部協辦通信院總辦禮式院副長等を歴て議政府參贊と爲り、贊政に陞り、江原京畿兩道觀察使制度局總裁奎章閣副候官宮内府特選官修學院長を歴遷し、明治四十三年日韓併合と共に、男爵を授かり、朝鮮總督府中樞院議官を拜し、昭和八年九月卒す。

**閔種默** 字は玄卿。麗興の人。贈判書命世の子。李太王甲戌(皇紀二五三四年)文科に登

り、翰林に入り、華要に歴敬し、建陽元年學部大臣に陞り、明年中樞院議官に移り、外部大臣に轉じ、宮内府特選官弘文學士を歴て度支部大臣となり、光武五年農商工部大臣を拜し、六年量地衙門總裁となり、禮式院長を兼ね、八年著社に入り、九年中樞院議長となり、景孝殿提調等を歴て、隆熙四年奎章閣提學となり、此歳日韓併合し、男爵に陞叙せらる。

**閔應植** 字は性文。菴堂と號す。麗興の人。泳恩の子。李太王壬午(皇紀二五四二年)文科に登り、官親軍監官に至る。

**閔謙謙** 字は允益。麗興の人。致久の子。李太王丙寅(皇紀二五二六年)文科に登り、王妃の一族を以て、階は輔國に陞り、官戸曹判書兼宜惠廳都提調に至りしが、壬午調局軍卒の亂に殺さる。

**黃嗣永** 慶尙道昌寧の人。丁若鏞の長兄若鉉の女婿たり。正祖十八年天主教最初の宣教師周文謨の入國後に師事して其の洗禮を受け、教名を(アレクサ)と稱せらる。純祖元年辛酉迫害の時彼は巧に逃れて身を忠清北道堤川郡鳳陽面舟論の山中に隠れ、同處の土窟内に於て一書を草し極細字を以て之を絹に寫し滑かに同旨の者黃沁・玉千禧の二人を以て毎年出發する冬至使の一行に加はり、在北京の司教湯士遜(アレクサンドル)に傳達せしむる計劃を企てしも志を果さずして黃沁等と共に逮捕せられ、該密書は押收せられ、同年十月三人共に處刑せらる。此の密書は普通

に黃嗣永密書として有名なるを以て以下之に付略叙すべし。本書は一萬三千餘字より成り、其の内容は大體三段に區分することを得、第一段は周文謨入國以後辛酉迫害に至るまでの教勢並に迫害の情況を述べ、第二段は周文謨の自首受刑につきて述べ、第三段は天主教を半島に弘通せしむる方策を述べ、其の内に於て朝鮮を清國に内附せしめ、清國皇帝の命令を以て西洋宣教師に布教せしむること、又は西洋より傳教隊を送り武力を以て布教せしむること等を擧げたるを以て、大に當路の注目を牽き、該教の取締を一層嚴峻ならしむるに至れり。(朝鮮基督教及外交史、黃嗣永密書)

**【十四畫】**

**趙民熙** 楊州の人。秉翼の子。哲宗己未(皇紀二五一九年)生る。李太王二十二年文科に登り、假注書より、累官して參議を拜し、乙未長湍府使となり、中樞院議官管稅司長全州平安北道觀察使秘書院丞等を歴て、庚子宮内府特選官法軍部協辦を歴遷し、佛國全權公使を命ぜられ、甲辰日本駐劄全權に轉じ、歸りて陸軍參領に任じ、副領に陞り、出で慶北觀察使となり、丁未秘書院卿平理院裁判長承寧府侍從長を歴て、承寧府總管に陞り、隆熙四年歐米及日本に赴き、此歳日韓併合と共に、子爵に陞叙せらる。

**趙同熙** 字は有先。揚州の人。領相斗淳の子。哲宗丙辰(皇紀二五〇六年)生る。李太王(皇紀二五〇六年)文科に登り、翰林直閣執義文學應教司僕寺正禮曹參議同副承旨軍國機務參議大司成を歴て、丁亥内務參議となり、己丑刑議を拜し、各刑曹參判に陞り、内務協辦吏禮戶曹參判副學等に歴遷し、辛卯政府堂上に陞り、光武元年秘書院卿を拜し、宮内府特進官掌禮院卿社稷署堂孝殿提調に累轉し、八年議政府贊政を拜し、十年農商工部大臣となり、隆熙元年再び、掌禮院卿を拜す。明治四十三年日韓併合就るや、男爵を授けらる。(文品案)

**趙秉世** 字は稚顯。揚州の人。縣監有淳の子。哲宗己未(皇紀二五〇九年)文科に登り、史曹判書を歴て、官中樞院議長議政府議政に至り、辭して特進官と爲る。明治三十八年日韓開戦の結果新に第二日韓協約の締結せらるゝや、秉世百官を率ゐて閣に伏して上疏し、新約を撤銷せんことを請ふもの連日、遂に表勳院に於て藥を仰いで自盡す。忠正と諡せられ、祭を賜はり閭に旌せらる。

**趙秉模** 字は聖必。豐壤の人。龜永の子。李太王辛未(皇紀二五〇三年)文科に登り、官判書を歴て内部大臣に至る。文靖と諡せらる。

**趙秉模** 字は稚文。揚州の人。弘淳の子。哲宗癸亥(皇紀二五二三年)文科に登り、李太王の朝、官度支大臣に至る。

**趙秉錫** 字は德輔。林川の人。參判基晉の子。憲宗丁未(皇紀二五〇七年)生る。李太王丙寅文科に登り、法規校正所議定官等を歴て、議政府議政に陞る。

**趙性教** 字は聖惟。器亭と號す。漢陽の人。享晩の系子なり。哲宗己未(皇紀二五〇九年)文科に登り、玉堂洋宮を歴て史曹判書に至り、大提學を拜す。(金鑑錄)

**趙秉淵** 惠石と號す。豐壤の人。輔國寧夏の子。李太王八年生る。初め童蒙教官に除し、丁亥文科に登り、翰林說書應教執義司録を歴て、庚寅特に同副承旨に陞り、工刑曹參議副學兵曹參判奎章閣直學士を歴て、丁酉陸軍參將軍部協辦等を拜し、光武三年軍務局長を以て副長に陞り、五年議政府贊政となり、七年陸軍法院長武官學校長を歴て、八年陸軍武官長となり、隆熙二年東宮武官長を拜し、明治四十三年日韓併合するや、男爵を授けらる。(文品案)

**趙重應** 初名重協。揚州の人。宅熙の子。李太王二十年西北邊界調査委員を命ぜられ、滿洲西北利亞地方に到り、明年還りて北防南開論を主唱し、反對派の威嚇所となり、全羅道實城郡に定配せらる。在謫凡そ六年、二十七年赦され還り、三十一年九月義和宮の隨員となりて日本に往き歸りて外務衙門參議に任じ、外部交渉局長等を歴て、法部刑事局長を拜し、特別法院判事を兼ぬ。建陽元年金安集内閣閣覆するや、日本に亡命し、居ること十年。

或は農學校講習生となり、或は韓語教師となり、幾多の辛酸を経て、光武九年歸國し、統監府囑託となり、十一年李完用内閣に入りて法部大臣となり、隆熙二年農商工部大臣に轉じ、日韓の合邦に與かりて最も力あり、併合の後子爵を授けられ、總督府中樞院顧問を拜し、大正八年卒す。年五十八。從三位に叙せらる。(韓合史)

**趙鼎九** 初名哲九。字は米卿。豐壤の人。判書鳳夏の孫、興宣大院君の第二女婚なり。李太王庚辰文科に登り、官を累ねて議政府贊政に至る。明治四十三年日韓併合するや、男爵に陞叙せらる。(文品案)

**趙秉夏** 字は箕三。惠人と號す。豐壤の人。總使秉慶の子。哲宗癸亥文科に登り、官御將都統使に至る。李太王甲申金玉均の變に閔泳穆・閔台鎭等と與に殺さる。忠文と諡せらる。

**趙慶瀛** 字は會慶。鳴堂と號す。林川の人。基晉の子、興宣大院君の女婚なり。李太王乙丑文科に登り、官を累ねて判書に至り、機務に參畫し、盛名あり。後者社に入り官を退て風月を樂み、以て餘生を送る。明治四十三年日韓併合するや、男爵を授かりしが、之を辭せり。

**趙義純** 字は德一。箕城の人。進士存榮の子。李太王壬午(皇紀二五四二年)禁營大將を拜す。(金鑑錄)

**趙錫淵** 字は心源。杞園と號す。平壤の人。哲宗七年生る。李太王十一年文科に登り、機器局委員別軍職より、内外に歴遷し、三十

【十五畫】

**蔡東健** 字は順汝。平康の人。捕將學承の子。李太王辛未統使を拜し、官は刑曹判書に至る。(存遺錄)

**鄭岐濶** 字は鳳聖。延日の人。台榮の子。李太王庚午(皇紀二五三〇年)鎮撫使を拜し、德戎使等を歴遷す。(金鑑錄)

**鄭鳳永** 字は君祥。石華と號す。又后山と號す。草溪の人。晚淵昌肖の後。李太王癸巳(皇紀二五三三年)遺逸に擧げられ、都事直諫に除し、甲午司諫に除せしが並に就かず。幼にして穎悟、八歳華城八達山に登りて一詩を賦し、人口に膾炙す。少にして公車を業とせしが、晩に之を棄て、心を性理の學に潜め、全齋任憲晦に従ひ學ぶ。(朝鮮名臣錄)

**鄭洛錫** 字は景錫。延日の人。牧使寅基の子。文科出身し、宣傳官より累に郡府水使を歴て、李太王己卯統制使を拜し、兵曹參判捕將營使内務府事を周流し、工刑曹判書に陞り、出て江華留守となり、農漢城判書中樞院議官侍從院卿に轉じ、農商工部大臣に陞り、度支部大臣署理中樞院議長宮内府特進官に歴遷し、明治四十三年日韓併合するや、男爵に陞叙せらる。

**鄭萬朝** 字は大卿。茂亭と號す。東萊の人。文學風に就り、年二十六、交渉通商衙門主事に遷まる。後文科に登り、禮曹參議承旨を歴拜し、甲午移りて内部參議を拜

し、旋て宮内府參議官となる。建陽元年詔を披りて珍島に流配せられ、謫に居るもの十二年、宥され還りて官に復し、奉章閣副提學兼宗哲宗兩朝國朝實錄編纂委員等の職を拜し、日韓合併の後李王義典祀官となり、朝鮮總督府中樞院囑託朝鮮史編修會委員等を拜し、大正十五年京城帝國大學講師に遷まれ、昭和四年經學院大提學に進み、明倫學院總裁を兼ぬ。又李王家實錄編纂委員に遷まれ、其の筆を主とす。昭和十一年卒す。年七十八。萬朝雅操謹行、博學強記、文詩立るに就り、尤も併儷に長ず。遺集七卷あり、家に藏す。

**鄭煥翼** 字は聖儀。延日の人。校理度系の子。憲宗丙午文科に登り、内外に歴遷し、李太王丁亥漢城右尹工曹參判に至り、大諫同知經筵同知義禁同知中樞府事を歴て、光武六年特進官を拜し、掌禮院卿と爲る。(文品案)

**鄭漢朝** 字は幼良。東萊の人。郡守世華の子。憲宗乙未(皇紀二四九五年)生る。哲宗辛酉文科に擧んで、内外に歴遷し、光武二年秘書院丞を以て掌禮院卿を兼ね、四年宮内府特進官となり、掌禮院太醫院卿を歴て、出て平安南道觀察使となり、八年中樞院議官を拜し、耆社に入る。明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙陞せらる。(文品案)

**鄭範朝** 字は孤書。葵堂と號す。東萊の人。領相元容の孫なり。哲宗己未(皇紀二五〇九年)文科に登り、李太王庚寅官左相に至

一年壯衛使に擧んで軍務大臣に陞り、明年清國戰地日本軍慰問大使に特派せられ、歸りて又軍部大臣を拜せしが、閏妃事件の責を以て官を免ぜられ、建陽元年王、露館に播遷し、金安集内閣閣覆るや、日本に亡命するもの十年、隆熙元年特に罪名を濫濫せられ、宮内府特進官を拜し、三年表勳院總裁に任じ、明年日韓併合するや、男爵を授けられ、朝鮮總督府中樞院顧問を拜し、大正四年依願本職を免ぜらる。

**趙錫復** 字は伯淵。箕城の人。水使存卿の子。李太王の朝、德戎使御營大將を歴拜す。(金鑑錄)

**趙錫晉** 小琳と號す。琳田廷奎の孫。哲宗四年癸丑生る。辛年六十八。書を善くし各體俱に長ず。(金鑑錄)

**趙錫弼** 字は殷相。漢陽の人。判書性教の子。憲宗庚子(皇紀二五〇〇年)生る。李太王丁卯進士に中り、甲戌文科に登り、玉堂鍊院を歴て、大司成史曹參議を拜し、漢城左右尹を経て刑曹參判を拜し、各曹を周流し、工曹判書に陞り、癸巳政府堂上と爲り、乙未中樞院に入りて一等議官となり、建陽二年太醫院卿特進官に移り、光武二年江原道觀察使を拜し、未だ赴かず、成鏡南道觀察使と爲る。三年江原京畿觀察使に轉じ、四年全羅南道を觀察し、五年掌禮院卿を拜し、正憲に陞り、忠北を按察し、七年黃海道觀察使となり、入りて地契衙門監督と爲る。(文品案)

る。戊戌卒す。(全通錄)

【十七畫】

韓進高 字は舜佑。清州の人。御營大將總戎使、走穢の弟なり。早く武科に登り、捕盜大將、壯衛使を歴て議政府贊政となり、光武九年議政府參政を以て内閣を組織し、第二次日韓協約を議定せしが、元々之に反對せしを以て、官を解て歸る。後中樞院顧問宮内府特選官を歴、明治四十三年日韓併合就るや、男爵を授けられしが之を辭せり。

韓奎 字は舜佐。基玉と號す。清州の人。贊政、走高の兄なり。閔妃全盛の時寵用せられ、摠戎使、御將工判知禁等を歴拜し、李太王甲申金玉均の亂に死す。思肅と諡せらる。

韓昌洙 清州の人。判書章錫の子。哲宗壬戌(皇紀二五二二)生る。李太王戊子文科に登り、翰林檢閱を歴て、甲午承旨に陞り、禮曹參議に轉じ、乙未漢城裁判所判事、學務局長となり、學部參書を兼ね、建陽元年外國語學校長、分秘書丞を拜し、光武二年駐英獨義參書官となり、三年外部參書官に移り、四年昌原監理に任じ、府尹を兼ね、五年中樞院議官に叙し、十年議政府外事局長を拜し、參贊に陞り、李完用内閣に入りて書記官長となり。明治四十三年日韓併合するや、男爵に叙せられ、朝鮮總督府中樞院顧問を拜し、李王職長

官に轉ず。(文島案)

韓啓源 字は公宇。柳下と號す。清州の人。參判鎮屎の子。憲宗乙未(皇紀二四九五年)文科に登り、李太王壬申右相を拜す。卒年六十九。(全通錄)

韓意錫 字は稚毅。一作稚山。經香と號す。後ち眉山と改む。清州の人。蜀教の子。鳳棲會華煥の門人なり。李太王壬申(皇紀二五三二年)文科に登り、官判書に至り、戊子大提學を拜す。文簡と諡せらる。(全通錄)

【十九畫】

羅喆 檀君教の開祖なり。光武八年檀君神教を創め、大倅教と改稱す。蓋し喆字は上古神人の義なりと云ふ。教會を設け、誦呪布教し、教徒凡そ數千人、陰曆三月十五日を以て檀君昇天紀念節と爲し、大祭を行ひ、顔に布教に従事せしが、大正五年丙辰黃海道九月山三聖祠に入り、自經して死す。教に殉ずるなり。遺囑として其の徒金教獻を以て第二代大倅となす。教獻遺旨を繼ぎ、咸鏡北道方面に入りて布教せしが、數年にして歿す。教義、教理の書に三一神譜・神權實紀等あり。金教獻・柳璋等の編著する所なり。

【二十畫】

嚴世承 字は允翼。寧越の人。徐錫愚の子。李太王甲子(皇紀二五二四年)文科に登り、官

判書を歴て、農商大臣に至る。肅敏と諡せらる。

【二十二畫】

權日身 京畿道楊根の人。麗末李初の學者陽村權近の次子大提學(權止)の後にし、順庵安鼎福の女婿たり。彼は李慶(李承恩)の勸誘によりて天主教を信じ、教名をフランシス・ザヴィエルと云ふ。彼は亦大に此の教を人に勧めしかば衆彼を指して主教と呼ぶに至る。正祖十五年辛亥洪樂安の摘發する所となり、濟州島に流配、圓離せられ、尋で病死す。其の兄哲身初め陽明學に傾倒し、後亦天主教信者となる。(『グーレー』基督教會史・朝鮮基督教及外交史)

權重顯 初名在衡。經農と號す。安東の人。永同に居る。哲宗甲寅(皇紀二五二四年)生る。李太王甲申釜山監理署書記官を拜し、内外を歴て署理公使を以て東京に駐劄し、入りて内務府參議を拜し、同副承旨を兼ね、漢城府尹軍務協辦を歴て、乙未陸軍參將法部協辦を拜し、光武元年議政府參贊に陞り、農商工部大臣に叙し、三年贊政に進み、法農二部大臣となり、副將に陞り、九年軍部大臣より農商工部に轉じ、明年復た軍部に任じ、丁未朴齊純内閣更迭するや、中樞院顧問となる。明治四十三年日韓併合するや、朝鮮總督府中樞院顧問に任じ、子爵を授けらる。大正十四年朝鮮史編修會顧問を兼ね、昭和九年卒す。

附 録

字 號 索引	國 朝 榜 目	官 廳 別 號 表	内 鮮 歷 代 對 照 年 表
--------	---------	-----------	-----------------



















































恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恩恩恩恥恥恥恥恥恥恥恥  
 胡厚齋武武武武叔良良孝老安安安安平之湖坡高齋齋齋齋高漢菴菴菴  
 金僕金李韓張宋許李李朴金韓丁金李趙安盧李沈申李李洪曹秦趙權宋李  
 從眉德季彥文克壽仲允致玉謙峻德樂昌耆仁益柳之  
 舜壽行麟珪良琳舒增山孫佛仁亨光然惠琛基涵洙恂壽俊祐倬塚祥悒瓊瀟

恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭  
 簡戴齋襄襄襄襄穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆穆  
 慎鄭尹金金康尹閔姜李李盧金徐奉辛沈鄭趙庚李李黃金趙成韓金李李李  
 居斗順繼季惟季良文引益明忠之念佛文思  
 寬陸緒命璫襄謙曾著清專閉璋重彌孫禮恬貞彌德謂裳贊邁祖義男和和儉

悔悔悔悔悔悔悔悔悔悔悅悅悅悅悅悅悅悅悅悅息息息息恭恭恭恭恭恭恭恭恭恭  
 高窩堂軒軒翁百田卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿  
 朴韓申楊朴蔣李沈柳金李李夏李金金黃金李慎李尹尹尹韓韓韓金朴李許  
 泰德元德希熙相善學時箕時敬錫萬自世世斯師成  
 遠全祿祿壽復斗巖永習泮相贊莞怡直運曹敬儉健豪鼓炯桓文直銑鍵瑞誠

時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時  
 甫甫見佐百可立中中中窩菴軒峯然而之軒清堂遠甫甫伯衣隱堂隱窩  
 李南金成沈奇洪李具金崔鄭申張申安李徐朴金朴朴沈柳韓金閔趙李應安  
 維彥廷宜晚聖弘聖雲景顯光命富嗣自宗興聖汝昌象重  
 棟經龍俊亨獻民業竹甲遇瓊潯光弼斑雄嶺間儀宗凝鐸興一鐸任遠秀俊觀

晉晉晉晉時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時時  
 玉史五三應應應靜慶潤會遇聖極菴晦晦晦晦晦國彥哉哉保堂叔叔叔伯  
 金徐姜金全崔朴鄭郭卜成權金鄭金趙鄭鄭閔尹金鄭李卞田趙洪朴安申南  
 光弘晉日挺東亨應德大錫景應相景養應運直得守師在夏  
 瑄淳奎晉濼豪命益越吉雨運之雲會禹淳嶧烈听夏維彥獻雨翼渾正遇應正

栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗栗  
 翁翁鳥亭亭亭亭亭亭亭里里甫甫谷村耳叔巢淑之卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿  
 尹宋李權尹洪崔崔李朴李張宋安李朴慎李金鄭韓沈許李朴宋崔李河申李  
 慶天東鶴寬瑞堯錫處居攪宗敬天雲康天亮悅日  
 寬徵承節澤民式齡義生區融寬韻珥培寬男傑漢素樞彙輔亨錫翼淵潛道三

重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重重  
 造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造造  
 河金任蘇尹鄭趙許崔具沈李李李李李李李李李李李李李李李李李李李李  
 弘弘必永卓大重東顯思繼平承相應萬鼎潤鼎汝擊  
 度度大福然任呂厚老益諸英鑑鈞任輝鍵默任翼憲南重耆原楷慶鉉轄傑天

香香香香香香山香香香香香香香香香香香香香香香香香香香香香香香香  
 壽堂泉西石山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山山  
 丁韓林尹白尹趙申吳趙朴韓金車李趙張金李申申申申申申申申申申申  
 學景景得諸榮師慶廷啓彥禮仲守志相最錫之尙重世鍾  
 款琦翰聖培始錫灑元翼彌擘琺亮虎倫淵岳中錦禧恒譯運延龜換瓊垠

剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛剛  
 伯仲仲仲中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中  
 金朴尹南徐李李洪李朴金吳張洪李崔李俞具陳李趙李柳宋吳趙金李李李  
 履貞宮居惟至麟鴻經賞惟仲濟肅允九景時厚邦履貴種景  
 健寬立鏢正鐵侃誠詳敏運遐世達達福萬基明囑序讓珣珍潤瓊直禮齡徵淳

城圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍圍  
 甫巖隱樵庵陰谷之彥靖哉泉明明明明明明明明明明明明明明明明明明  
 金尹鄭任朴金鄭安權權金李全柳俞李李李李李李李李李李李李李李李李  
 宗鳳夢輔性昌希懸履驥希仁彥道宜浚玄自釋必世壽

善朝周臣源輔輔中適坤秀哲淑哲翼哲慶寶週潤琿潛圭大雅恭冲閭鐵柔  
 履案宰容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容容  
 翁哉之齋齋齋惠軒甫耳夫三七洲父軒蒙瑞固卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿卿  
 李朴崔陸李李靖李宋申權金李李李尹金李鄭朴韓韓陸金趙李李李李李李  
 晚震兼弘時仲圭軒尙先冕益玄芝昌配禹宗禹相夏惟慶彥以詰

秀英宰善器苻宗原默沈和鎮卿賢齊東鼎錫潤夏夏夏夏夏夏夏夏夏夏夏  
 恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥恥  
 菴軒床庵庵卿軒余伯初初可齋齋魯魯聖聖聖聖聖聖聖聖聖聖聖聖聖聖  
 朴柳鄭申申韓李權柳閔金宋申安李金禹俞成顯徐姜鄭鄭洪韓李申李俞李  
 忠世厚靖世聖永忠忠世在重德希拜汝夢學國復克宗廷象拓晚  
 佐助瑄載夏忠珩炬忠元甲忠應鉉洙參善舟宜川植簡周永邇愈豪慙秀基秀





































王	方	文	尹	孔	夫	太	卞	公	元	仇	千	卜	丁	【二畫】			
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	四	四	二	二	二	一				
牟	池	朴	朱	安	吉	印	全	任	石	白	申	田	甘	玉	玄	丘	【六畫】
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	四	二	二	二	二	二	二	二	一	
吳	孟	奉	奇	周	卓	具	辛	車	沈	李	成	延	宋	呂	吳	余	【七畫】
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	四	二	二	二	二	二	二	二	一	
柳	宜	姜	戚	南宮	南	俞	金	表	芮	河	林	東	明	承	房	尙	【八畫】
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	四	二	二	二	二	二	二	一		
崔	僕	高	馬	邕	秦	殷	桂	晉	徐	孫	韋	邢	禹	皇甫	洪	【九畫】	
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	四	二	二	二	二	二	一			
黃	閔	都	琴	弼	庾	魚	陸	陳	郭	許	莊	梁	曹	張	康	【十畫】	
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	四	二	二	二	二	二	一			
魯	鄭	蔣	蔡	潘	慶	劉	趙	裴	葉	陸	楊	楚	慎	廉	【十一畫】		
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	四	二	二	二	二	一				
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十二畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十三畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十四畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十五畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十六畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十七畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十八畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【十九畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【二十畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【二十一畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					
權	蘇	嚴	邊	羅	魏	鮮	鞠	韓	薛	盧	【二十二畫】						
【五畫】	九	九	七	四	四	四	四	二	二	二	二	一					

國朝榜目捷覽索引

(字畫順)





前資		姓名		生年		本貫		父各居住		時代		年榜		科種		歷		官	
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	丁若鏞	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

前資		姓名		生年		本貫		父各居住		時代		年榜		科種		歷		官	
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	元龍	王美年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同





Table of names and titles for the 'Yin' (尹) family, page 8. Columns include: 前資 (Previous Rank), 姓名 (Name), 生字 (Given Name), 本貫父名 (Native Place/Father's Name), 居住時代 (Residence Era), 年榜 (Yearly List), 科種 (Exam Type), 歷官 (Official Post). Names listed include 尹義立, 尹東老, 尹民逸, etc.

Table of names and titles for the 'Yin' (尹) family, page 9. Columns include: 前資 (Previous Rank), 姓名 (Name), 生字 (Given Name), 本貫父名 (Native Place/Father's Name), 居住時代 (Residence Era), 年榜 (Yearly List), 科種 (Exam Type), 歷官 (Official Post). Names listed include 尹孝立, 尹汝微, 尹鳴岐, etc.



Table of names, birth dates, and official positions for the 'Yin' family (四畫) on the right page. Columns include: 前資姓名 (Previous Name), 生年 (Birth Year), 本貫 (Native Place), 父名 (Father's Name), 居住 (Residence), 時代 (Era), 年榜 (Year of Exam), 科種 (Exam Type), 歷官 (Official History).

Table of names, birth dates, and official positions for the 'Yin' family (四畫) on the left page. Columns include: 前資姓名 (Previous Name), 生年 (Birth Year), 本貫 (Native Place), 父名 (Father's Name), 居住 (Residence), 時代 (Era), 年榜 (Year of Exam), 科種 (Exam Type), 歷官 (Official History).



























前資	姓名	生	本貫	父名	居住	時代	年榜	科種	歷	官
參奉	安弘量	甲子	順興	義孫	光海	壬子式年	丙科	掌令通禮號芹田		
通仕	安景深	庚寅	竹山	昶	同	同	同	注書典籍號醉峯		
刑正	安應魯	辛未	廣州	彥常	同	同	同	玉堂校理嘉善府使		
參奉	安弘重	丙戌	廣州	默智	同	同	同	史正號醉嶽		
奉事	安獻微	庚子	竹山	昶	同	同	同	刑正		
通調	安獻微	庚子	廣州	應亨	同	同	同	翰林承旨監司佐郎		
縣監	安獻規	庚子	廣州	應元	仁祖	丙寅別試	乙科	兩司弼善		
進士	安時賢	辛丑	廣州	應元	同	同	同	兩司弼善		
佐郎	安獻微	辛丑	廣州	應元	同	同	同	辛酉庭		
生員	安頊	辛巳	順興	應一	同	同	同	兵正		
別座	安獻規	戊子	廣州	應亨	同	同	同	察訪		
進士	安獻民	丁酉	順興	德倫	同	同	同	奉常正		
將仕	安命老	庚申	廣州	宗遇	孝宗	庚寅增廣	丙科	持平		
承議	安後稷	庚申	廣州	宗遇	同	同	同	王堂湖堂承旨翰林		
進士	安後說	壬申	廣州	宗遇	同	同	同	王堂湖堂承旨翰林		
通德	安汝止	丁巳	竹山	延燮	同	同	同	參判行大諫號鶴村		
幼學	安汝昌	庚辰	廣州	獻奇	同	同	同	承權		
縣監	安永錫	戊寅	順興	應達	顯宗	乙巳庭試	同	掌令郡守		
幼學	安永錫	戊寅	順興	應達	同	同	同	兩司		
生員	安如石	丙寅	順興	重行	同	同	同	府使		
安汝器	安後泰	丁酉	廣州	時秀	同	同	同	參判		
安汝器	安汝器	丁酉	廣州	時秀	同	同	同	兩司亞長承旨		

前資	姓名	生	本貫	父名	居住	時代	年榜	科種	歷	官
通德	安正仁	庚辰	順興	昶	英宗	己酉式年	丙科	持平		
幼學	安道謙	甲戌	廣州	宗采	同	同	同	禮正		
進士	安宅重	乙亥	順興	義行	同	同	同	郡守禮郎		
都事	安允行	壬申	竹山	晚遇	同	同	同	承權		
生員	安致宅	壬午	竹山	咸平	同	同	同	王堂判尹者堂判教		
通德	安允行	壬申	竹山	晚遇	同	同	同	兩司		
生員	安克孝	己卯	順興	瑞	同	同	同	王堂二判判義禁入		
幼學	安正宅	庚寅	竹山	昕	同	同	同	兩司		
安	安杓	庚寅	竹山	宗海	同	同	同	禮正		
生員	安宗諱	辛丑	廣州	世德	同	同	同	王堂大諫		
通德	安鼎大	庚寅	竹山	允升	同	同	同	司圖直長		
進士	安致邦	乙亥	廣州	載一	同	同	同	兵郎		
通德	安景說	壬申	廣州	汝器	同	同	同	參判監司		
生員	安景濟	甲申	順興	鑑	同	同	同	王堂校理		
通德	安寬濟	丁酉	順興	鑑	同	同	同	王堂三司承旨灣尹		
幼學	安以權	己卯	順興	正賢	同	同	同	王堂校理		
通德	安聖彬	壬申	順興	正賢	同	同	同	王堂校理		
生員	安廷陔	庚辰	順興	聖希	同	同	同	兩司鐘城江界承旨		
生員	安中權	甲寅	順興	正模	同	同	同	瑞山		
進士	安大濟	壬寅	順興	正模	同	同	同	王堂承旨		
生員	安錫胤	庚子	順興	重衡	同	同	同	承正		
將士	安任權	己卯	順興	正模	同	同	同	承正		
幼學	安景漸	壬寅	廣州	信亨	同	同	同	承正		









前資	姓名	生年	本貫	父名	居住	時代	年榜	科種	歷	官
宣教	朴安期	丙寅	密陽	希賢	善山	仁祖	戊子庭試	丙科	縣監號螺山	
前祭	朴承休	丙寅	密陽	震煥	善山	仁祖	戊子庭試	丙科	司諫號洛汀	
奉事	朴承健	己酉	同	安行	同	孝宗	庚寅別試	同	執義	
宣教	朴廷薛	己酉	同	同	同	同	辛卯式年	同	兩司牧使	
生員	朴世城	辛酉	密陽	慶煥	慶泉	同	辛卯別試	乙科	承旨	
內侍	朴昌文	甲寅	密陽	慶煥	慶泉	同	辛卯別試	丙科	正板校正	
郡守	朴世模	庚戌	密陽	慶煥	慶泉	同	辛卯別試	甲科	兩司兵參	
生員	朴居華	甲寅	密陽	慶煥	慶泉	同	甲午式年	同	承旨號滿厓	
幼學	朴純	己巳	密陽	長遠	同	同	甲午式年	同	縣監號梧山	
進士	朴以文	丙寅	同	慶煥	慶泉	同	丁酉式年	丙科	守監司	
同	朴仁基	丙寅	同	慶煥	慶泉	同	同	同	府使	
同	朴相馨	丙寅	同	慶煥	慶泉	同	同	同	行戶判	
同	朴仁禎	辛未	同	慶煥	慶泉	同	同	同	禮佐	
生員	朴世堂	己巳	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	典簿	
府使	朴燧	庚戌	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	行吏判號西溪諱文	
佐郎	朴守玄	庚戌	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	承旨監司	
典簿	朴元度	乙未	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	承旨號草亭	
奉事	朴贊	乙未	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	承旨號竹窓	
進士	朴元度	乙未	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	監司	

前資	姓名	生年	本貫	父名	居住	時代	年榜	科種	歷	官
幼學	朴載時	丙寅	密陽	希賢	善山	仁祖	戊子庭試	丙科	縣監號螺山	
進士	朴泰維	戊子	密陽	震煥	善山	仁祖	戊子庭試	丙科	司諫號洛汀	
幼學	朴斗世	庚戌	密陽	慶煥	慶泉	同	辛卯式年	同	執義	
通德	朴益茂	丙寅	密陽	慶煥	慶泉	同	辛卯別試	乙科	承旨	
生員	朴泰淳	甲寅	密陽	慶煥	慶泉	同	辛卯別試	丙科	正板校正	
幼學	朴光潤	辛未	密陽	慶煥	慶泉	同	辛卯別試	甲科	兩司兵參	
同	朴萬鼎	戊子	密陽	慶煥	慶泉	同	甲午式年	同	承旨號滿厓	
同	朴俊蓉	庚戌	密陽	慶煥	慶泉	同	甲午式年	同	縣監號梧山	
同	朴世臣	丙寅	密陽	慶煥	慶泉	同	丁酉式年	丙科	守監司	
同	朴聖楷	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	府使	
同	朴世臣	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	行戶判	
同	朴泰萬	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	禮佐	
同	朴世臣	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	典簿	
同	朴聖楷	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	行吏判號西溪諱文	
同	朴聖楷	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	承旨監司	
同	朴聖楷	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	承旨號草亭	
同	朴聖楷	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	承旨號竹窓	
同	朴聖楷	壬寅	密陽	慶煥	慶泉	同	同	同	監司	



























